

# 『朱子語類』卷一四〜一八訳注(一)

宇佐美文理・小笠智章・石立善・孫路易・田中秀樹・中純夫

## はしがき

本稿は朱熹(一一三〇〜一二〇〇)の語録を分類編纂した書物である『朱子語類』全一四〇巻のうち、『大学』に関する朱熹の語を集めた巻一四〜一八(『大学』一〜五)の訳注である。各巻の内容は以下の通りである。

巻一四 大学一「綱領」「序」「経」上

巻一五 大学二「経」下

巻一六 大学三「伝一章」至「伝一〇章」

巻一七 大学四「或問」上(「経一章」至「伝三章」)

巻一八 大学五「或問」下(「伝五章」至「伝一〇章」)

朱熹はいわゆる朱子学を創始した人物である。朱子学には朱熹の晩年に偽学として弾圧される一時期があったものの(慶元偽学の禁、一一九六〜一二〇二)<sup>①</sup>、淳祐元年(一二四二)には周敦頤・程顥・程頤・張載(いずれも北宋の思想家で朱子学の先駆者)及び朱熹が孔子廟に從祀される等<sup>②</sup>、南宋末頃には既に国家による朱子学尊重の気風が醸成されていた。そしてこれに続く元明清の時代には、科挙における経書

解釈において朱子学系統の注釈書を採用すべきことが正式に規定された。<sup>③</sup>このように中国近世において朱子学は、官許の学として思想界に揺るぎなき地歩を確立していたのである。

中国近世における朱子学尊重は、東アジアの近隣諸国にも大きな影響を与えた。中華思想という枠組みのもとで東夷としての位置づけを余儀なくされた朝鮮は、小中華を以て自ら任じ、大中華たる中国に臣事し、中華文明を摂取体得すること(「事大慕華」)によって、東夷からの脱却を企図した。<sup>④</sup>そして当時における中華文明の粹とは、朱子学であり『文公家礼』であった。従って朝鮮では、時として中国以上に朱子学を篤実かつ純粹に受容しようとする気風が、強固に存在した。朱子学の解釈をめぐる見解の相違が学派間の対立を引き起こし、それがひいては政治的立場の対立にまで直結連動して激烈な競争を展開したことは朝鮮思想史及び朝鮮政治史上の一大特色であるが、<sup>⑤</sup>そのような競争をもたらした背景には、朱子学解釈における正当性・正統性を争って一步もあとには引かぬ、という思想風土が存在したわけであって、それを更に突き詰めれば、やはり朱子学に対する絶対的尊崇というメンタリテイに帰着するであろう。朝鮮朝における朱子学に対する

絶対的尊崇という問題に關して言えば、中国では孔子廟從祀を果たした陸九淵や王守仁が、朝鮮ではついに從祀を許されなかつたという事實にも、その一端を看取ることが出来るだろう。また李滉「朱子書節要」、宋時烈「朱子大全劄疑」、金昌協「朱子大全劄疑門目」、金邁淳「朱子大全劄疑門目標補」等、朱熹の文集（『朱子大全』）に対する注釈書が連綿と持續して作成され続けた事實にも、朝鮮朝における朱子学尊崇の風潮が如実に示されていると言えらう。<sup>6)</sup><sup>7)</sup>

なお、朝鮮における科挙と朱子学の結びつきに關しては、中国近世の歴代正史「選舉志」におけるような規定に關する明確な記述は文献上、存在しない。しかし實際の科挙試験（司馬試・文科）における出題内容を一瞥すれば、やはり両者間の密接な結びつきが十分に推測されるのである。<sup>8)</sup>

日本における朱子学研究は、豊臣秀吉による朝鮮出兵（文祿・慶長の役、壬辰倭乱・丁酉再乱）によつて朝鮮半島から大量の朱子学関係書が將來されたことを契機として、江戸時代初期から本格化した。<sup>9)</sup> 元祿四年（一六九一）には林羅山の孫信篤が大学頭に任ぜられ、<sup>10)</sup> 以後林家が大学頭を世襲する等、日本においても朱子学は官許の学としての地位を獲得していく。寛政二年（一七九〇）にはいわゆる寛政異学の禁によつて、林家の家塾（湯島聖堂）における朱子学以外の教授が禁止され、<sup>11)</sup> 同九年（一七九七）には湯島聖堂を昌平坂学問所と改称、林家の家塾から幕府の直轄とするなど、朱子学官学化の傾向が強められた。<sup>12)</sup> 日本の政治風土や思想風土にあつて、朱子学的思惟が必ずしも完全に適合するものとはなり得なかつた点については、つとに先学

による指摘が有る。<sup>13)</sup> しかしながら日本の近世思想史において朱子学が極めて重要な位置を占めていたことは論をまたない。

既に触れたように、『朱子語類』は弟子が筆録した朱熹の語録をテーマ別に分類編纂した書物である。朱熹の語録として最初に刊刻されたのは池州刊朱子語録、いわゆる池録（一一二五年刊）であり、同じく語録の体裁で刊刻されたものには饒録（一一三八年序）、饒後録（一二四九年後序）、建別録（一二六五年序）が有る。これらはいずれも現存しないが、筆録者別にまとめられる体裁を採っていたことは、今本『朱子語類』巻首所収の「朱子語録姓氏」によつても確認することができる（例えば池録一は廖德明録、池録二は輔廣録、といった具合である）。また語録の刊刻と並行するようにして、語類の編纂も行われた。即ち黃士毅編の蜀類（一二一九年後序）、及び汪佖編の徽統類（一二二二年後序）である。うち黃士毅は、筆録者別に編纂されていた語録をテーマ（門目）によつて分類再編することにより、語類体を創設した。そして後に黎靖徳が既存の語録及び語類（四録二類）を合してこれを黃士毅の門目によつて分類し、補訂を施して『朱子語類大全』一四〇巻を編纂した（一二七〇年刊）。これが現在通行する『朱子語類』の源流をなすものである。<sup>14)</sup>

そこには宇宙論、自然学、存在論、心性論、学問方法論、經書解釈、政治論、人物評論、異学批判など、多岐多様にわたる話題に關する朱熹の肉声が、時として身振り手振りの描写までを伴つて、筆録されている。推敲を経た自著ではなく、目の前の弟子に向かつてその時々語りかけられた語録である、という資料的性格上、時として、一見す

ると前後あい矛盾する内容を含んでいたり、発言の意図が必ずしも十分に明晰ではなかったり、という箇所は少なからず散見する。加えて口語語彙が頻出し、文法的にも難解な箇所が少なくない。しかしながら朱熹の思想を理解する上で、『朱子語類』が極めて重要な資料であることは言うまでもない。また宋代の口語語彙を研究する上でも、『朱子語類』は第一級の一次資料である。上述したように朱子学が朝鮮や日本においても広く受容された状況を反映して、朝鮮には『朱子語類』の抄本、整版（木版本）、古活字本が存在し、日本にも和刻本が存在する。<sup>15</sup> また『朱子語類』中の口語語彙や難解語を拾って語釈を施した工具書も、朝鮮日本それぞれに存在する。本稿でもこれらの工具書は必要に応じて活用した。

『大学』は『中庸』とともに原來は『礼記』中の一篇であったものを、朱熹が単行本として抜き出し、分章を施し注釈を加えた。それが『大学章句』及び『中庸章句』であり、これに同じく朱熹撰の『論語集注』と『孟子集注』を加えた四書が『四書集注』である。『大学』『中庸』がそれぞれ『礼記』中から抜き出されて注釈を施されたのは、朱子学の学問方法論や人性論、鬼神論などを構築・展開していく上で極めて重要な典拠となるべき資料が、この両書中に集中的に存在することに、朱熹が着目したからに他ならない。『大学』に関して言えば、そのいわゆる「三綱領」と「八条目」は、修己治人の双方を包括した朱子学の学問方法論の骨格をなすものである。とりわけ「八条目」中の「格物」「致知」は朱熹によって「即物窮理」の意に解釈され、理気二元論によって構築された朱子学の存在論、人性論とその学問方法論とが有機的

つ整合的に一つの学問体系を構成する上で、極めて重要かつ基礎的な要素となっている。その朱熹の『大学』解釈を知る上で基礎資料となるのが『大学章句』『大学或問』及びここに訳出する『朱子語類』巻一四〜一八（『大学』一〜五）である。

後に明の王守仁（一四七二〜一五二八）は朱子学を批判して陽明学を創始するが、朱子学と陽明学の最大の対立点の一つが、その『大学』解釈にあった。朱熹は『礼記』所収『大学』のテキストには錯簡や衍文・闕文があるとして、『大学章句』撰述に際して大幅にテキストに改編を施した。しかし王守仁は朱熹による改編を全否定して古本大学（『礼記』所収『大学』）をテキストとして採用、「三綱領」の第二「新民」（朱熹が『礼記』『大学』の「親民」を「新民」の誤りであるとして書き改めたもの）を旧に復して「親民」説を主張、「格物」「致知」を「即物窮理」とする朱熹の解釈を否定して独自に「致良知」説を提起した。このように中国近世思想史上の二大潮流を為す朱子学と陽明学の主要な対立点がその『大学』解釈に起因している点に鑑みても、朱熹の『大学』解釈を示す基礎資料である『朱子語類』巻一四〜一八は思想史的に極めて重要な文献であると言えることができる。

## 凡例<sup>16</sup>

一、底本には理学叢書『朱子語類』（王星賢点校、一九八六年、中華書局）を用いる。中華書局本の底本は光緒六年（一八八〇）賀瑞麟校刻本（劉氏伝経堂叢書本）である。ただし句読の切り方は必

ずしも底本に因らなかった場合がある。

一、校勘には以下のテキストを使用した（括弧内は本稿で用いる略称）。

○国立中央図書館（現台湾国家図書館）蔵成化九年（一四七三）刊本、中文出版社影印、一九七九年縮印本（成化本）。中文出版社は国立中央図書館蔵本の影印本であるが、日本内閣文庫蔵成化本によつて校勘の上で修補を施しており、「中日合璧本」と称されている。<sup>17)</sup>

○京都大学文学部蔵萬曆三十一年（一六〇二）序刊本（萬曆本）。巻首に成化九年彭時序を掲載しており、萬曆本の底本は成化本である。

○寛文八年（一六六八）刊和刻本、中文出版社影印、一九七三年（和刻本）。巻首に成化九年彭時序、萬曆三十一年葉向高序・朱吾弼序・汪応蛟序等が掲載されており、和刻本は萬曆本の翻刻本である。

○楠本正継旧蔵、九州大学蔵朝鮮古写徽州刊本、中文出版社影印、一九八二年（朝鮮古写本）。石立善氏は古写本の書写年代について、朝鮮で成化本系統の語類が刊行されはじめた一五四四年以前、即ち一六世紀中葉以前と推定している。<sup>18)</sup>

○英祖四十七年（一七七二）刊朝鮮整版、大化書局影印、一九八八年（朝鮮整版本）。

一、校勘にはさらに以下の校勘記を参照した。

○朝鮮整版本各巻末附載「考異」

○京都大学人文科学研究所蔵劉氏伝経堂叢書本「朱子語類大全」巻

末附載「朱子語類正譌」一卷、「朱子語類記疑」一卷（ともに賀瑞麟撰）。

一、句読の切り方に関しては、京都大学文学部蔵呂留良刊本に附された句読を参照した。

一、異体字に係る異同（「箇」と「个」、「曾」と「曾」、「著」と「着」等）については必ずしも一々注記しなかつた場合がある。

一、口語語彙や本文内容の解釈に関しては主として以下を参照した。

○日本、岡島冠山『字海便覧』享保十年（一七二五）刊（『唐話辞書類集』第十四集所収、汲古書院、一九七三年）

○日本、留守友信『語録訳義』延享五年（一七四八）序（『唐話辞書類集』第二集所収、汲古書院、一九六九年）

○朝鮮、李宜哲『朱子語類考文解義』英祖五十年（一七七四）序（民族文化文庫影印、二〇〇一年）

○田中謙二『朱子語類外任篇訳注』（汲古書院、一九九四年）

○入矢義高・古賀英彦『禪語辞典』（思文閣出版、一九九一年）

○三浦國雄『朱子語類』抄（講談社、二〇〇八年）

一、筆録者の諱・字・本貫等は『朱子語録姓氏』（『朱子語類』巻首所収）に簡単に記されている他、田中謙二「朱門弟子師事年攷」（『田中謙二著作集』第三巻所収、汲古書院、二〇〇一年）、陳栄捷「朱子門人」（台湾学生書局、一九八二年）に既に詳細な考証がある。本稿では筆録者、及び本文中に登場する弟子のうち『朱子語録姓氏』所収の人物については、原則として注記を省略する。なお訳注完結後に全体の巻末に弟子名索引を付す予定である。

## 付記

現在、『朱子語類』訳注刊行会が組織され、『朱子語類』一四〇巻の全訳注を汲古書院から刊行する計画が進行中である。<sup>19)</sup>我々の訳注もこの刊行事業の一環として取り組まれているものであり、巻一四〇一八の訳注が完結した際には汲古書院から刊行する予定である。書物として公刊するに先だつて本誌に訳注を連載するのは、広く指教を仰ぎ、誤読や不備を少しでも減らして決定稿を作成したいと願うからに他ならない。読者諸賢の忌憚ないご叱正を頂戴することができれば幸いである。

- (1) 『宋史紀事本末』巻八〇「道学崇黜」、『宋元学案』巻九七「慶元党案」。
- (2) 『宋史』巻四二「理宗本紀」淳祐元年春正月甲辰条。『宋史』巻一〇五、礼志「文宣王廟」。
- (3) 『元史』巻八一「選舉志」、『明史』巻七〇「選舉志」、『清史稿』巻一〇八「選舉志」。
- (4) 山内弘一「朝鮮からみた華夷思想」(世界史リブレット六七、山川出版社、二〇〇三年)。
- (5) 高橋亨「李朝儒学史に於ける主理派主気派の發達」(『京城法文学会第二部論集』刀江書院、一九二九年)。
- (6) 中純夫「王守仁の文廟從祀問題をめぐって——中国と朝鮮における異学觀の比較——」(奥崎裕司編『明清はいかなる時代であつ

たか——思想史論集』汲古書院、二〇〇六年)。

- (7) 三浦國雄「朱子大全劄疑をめぐって——朝鮮朱子学の一側面——」(森三樹三郎博士頌寿記念東洋学論集、汲古書院、一九七九年)。なおその後、李滉『朱子書節要』、宋時烈『朱子大全劄疑』、金昌協『朱子大全劄疑門目』、任聖周『朱子大全劄疑節補』、洪儀泳『朱子大全劄疑翼増』、金邁淳『朱子大全劄疑門目標補』等、諸家の注釈を集めた李恒老『朱子大全劄疑輯補』(一八五〇)が一九八五年、韓国学資料院から刊行されている。
- (8) 中純夫「朝鮮朝時代の科挙と朱子学」(『京都府立大学学術報告(人文・社会)』第六〇号、二〇〇八年)。
- (9) 阿部吉雄「日本朱子学と朝鮮」(東京大学出版会、一九七八年)。
- (10) 『徳川実紀』元禄四年正月一三日条(新訂増補国史大系『徳川実紀』第六篇、吉川弘文館)。
- (11) 「為学禁論達書」寛政二年六月。『日本儒林叢書』第三卷「寛政異学禁関係文書」所収(鳳出版、一九七一年復刊)。
- (12) 犬冢遜「昌平志」巻二、事実誌、寛政九年十二月「改革餐制」条(文部省『日本教育史資料』巻一九「学校」、一八九一年。富山房、一九八四年復刻再版、第七冊)。
- (13) 渡辺浩「近世日本社会と宋学」(東京大学出版会、一九八五年)。
- (14) なお近年、石立善氏は『朱子語類大全』未収の南宋人による朱子語録書三七種(古本朱子語録)の存在を明らかにしている。石立善「古本朱子語録について——『朱子語類大全』未収語録書三十七種——」(『西脇常記教授退休記念論集 東アジアの宗教と文化』西

脇常記教授退休記念論集編集委員会、京都大学人文科学研究所  
Christian Witem 研究室、二〇〇七年)。

(15) 藤本幸夫氏によれば、朝鮮では中宗三十九年(一五四四)銅活字本から高宗光武九年(一九〇五)木版本に至るまで、七度にわたって『朱子語類』の刊行が行われた。藤本幸夫「朝鮮における『朱子語類』について——それはいかに扱われたか——」(『朝鮮学報』第七八輯、一九七六年)、藤本幸夫「朝鮮版『朱子語類』攷」(『富山大学人文学部紀要』第五号、一九八二年)。

(16) 『朱子語類』の諸版本とその書誌情報に関しては、既引の石立善論文、藤本幸夫論文に加えて、主として以下を参照した。胡適「朱子語類の歴史」(一九五九年、中文出版社影印縮印本『朱子語類』巻首所収)。福田殖「朱子語類の各種版本について(正)」(『九州中国学会報』一五号、一九六九年。隈本宏・福田殖「朱子語類の各種版本について(続)」(『久留米工業高等学校研究報告』第二二期、一九六九年)。岡田武彦「朱子語類の成立とその版本」(同氏「中国思想における理想と現実」一九八三年、所収)。石立善「朝鮮古写徽州本『朱子語類』について——兼ねて語類体の形成を論ずる——」(『日本中国学会報』第六〇集、二〇〇八年)。

(17) 修補箇所に関しては中文出版社巻末附載の李迺揚「正中書局本与日本内閣文庫覆成化本校勘表」を参照。ここに言う正中書局本とは、一九六二年、台湾正中書局から出版された国立中央図書館蔵成化九年刊本の影印本である。

(18) 石立善前掲「朝鮮古写徽州本『朱子語類』について——兼ねて

語類体の形成を論ずる——」。

(19) 溝口雄三「朱子語類」訳注発刊の辞——二〇年先の完訳を望んで——」(『朱子語類訳注』巻一〜三(溝口雄三・小島毅監修、垣内景子・恩田裕正編、汲古書院、二〇〇七年、巻首所収)。佐藤鍊太郎「朱子語類」訳注刊行会について」(『日本中国学会便り』第一三号、二〇〇八年)。

### 『朱子語類』巻一四「大学」一(1〜91条)

#### 綱領

1条

學問須以大學為先、次論語、次孟子、次中庸。中庸工夫密、規模大。德明

〔校勘〕

○朝鮮古写本は冒頭を「先生問看大學如何。因言學問須以大學為先云々」に作る。

〔訳〕

学問をするには是非とも『大学』を最初に学ぶべきである。その次

は『論語』、その次は『孟子』、その次は『中庸』である。『中庸』に説く実践内容は緻密であり、その枠組みは広大である。 廖徳明録

〔注〕

(1) 「以大學為先」 『大學』は程頤以来「初学入徳之門」と称され、初学者がまず学ぶべき書物とされてきた。『河南程氏遺書』卷二二上、一条「棟初見先生、問。初學如何。曰。入徳之門、無如大學。今之學者、頼有此一篇書存。其他莫如論孟。」「河南程氏粹言」卷一、論書篇「子曰。大學、孔子之遺言也。學者由是而學、則不迷於入徳之門也。」なお『大學章句』の冒頭にもこれらの程子の語が引かれている。また後出の四二条にも「伊川舊日教人先看大學」とある。

(2) 「中庸工夫密」 以下の条を参照。『語類』卷六二、一四六条、孫自修録(IV 51)「周樸純仁問致中和字。曰。…又如射箭。纔上紅心、便道是中、亦未是。須是射中紅心之中、方是。如致和之致、亦同此義。致字工夫極精密也。」「語類」卷六四、一三六条、陳淳録(IV 156)「極高明是言心、道中庸是言學底事。立心超乎萬物之表、而不為物所累、是高明。及行事則恣地細密、無過不及、是中庸。」

(2) 「規模大」 「規模」は規模、スケール、枠組み、骨組み。三条や十条にも後出する。なお三浦國雄『朱子語類抄』六三頁参照。「規模大」に関しては、例えば『中庸章句』第二十七章に「大哉聖人之道。洋洋乎、發育萬物、峻極于天。」に対する朱子の注に「此言道之極於至大而無外也」とある。

2条

讀書、且從易曉易解處去讀。如大學中庸語孟四書、道理粲然。人只是不去看。若理會得此四書、何書不可讀、何理不可究、何事不可處。

蓋卿

〔訳〕

讀書するには、とりあえずわかりやすく理解し易いところから読むことだ。例えば『大學』『中庸』『論語』『孟子』の四書は、その道理は明瞭である。人はただ読もうとしないだけだ。もしこの四書を自分のものできたなら、読めない書物など有ろうか、究められない道理など有ろうか、対処できない事柄など有ろうか。 襲蓋卿録

〔注〕

(1) 「粲然」 明白明瞭であること。『語類』卷七八、一三四条、沈僩録(V 301)「如此解釋、則五句之義、豈不粲然明白。」

(2) 「理會」 しまつする、処置する、処理する、取りくむ。田中謙二『朱子語類外任編訳注』一二頁、九一頁、一〇八頁、三浦國雄『朱子語類抄』三四頁。

3条

某要人先讀大學、以定其規模。次讀論語、以立其根本。次讀孟子、

以觀其發越。次讀中庸、以求古人之微妙處。大學一篇有等級次第、總作一處、易曉、宜先看。論語却實、但言語散見、初看亦難。孟子有感激興發人心處。中庸亦難讀、看三書後、方宜讀之。 寓

〔校勘〕

○朝鮮古写本卷一四は本条を収録しない。

○「孟子有感激興發人心處」底本は「孟子」を「孟」に作り、校勘によって「子」字を補っている。萬曆本も「孟」に作る。成化本、朝鮮整版本、和刻本はいずれも「孟子」に作る。

〔訳〕

私が人に勧めるのは、まず『大学』を読んで、自己の学問の骨格を定めること。次に『論語』を読んで、自己の学問の根本を確立すること。次に『孟子』を読んで、彼の精神的昂揚の発露を見ることが。次に『中庸』を読んで、古人の奥深い道理を求めることである。『大学』一篇は順序階梯が有り、全体がひとつのまとまりをなしており、わかりやすいので、まず読むべきだ。『論語』はと言えば、その内容は平易着実である。ただ話題ごとにまとめられておらず雑然と並んでいるので、いきなり読むとやはり難しい。『孟子』には人の心を感激発憤させるところがある。『中庸』も難しいので、他の三書を読んだ後で読むべきだ。

徐寓録。

〔注〕

(1)「發越」発揮・発明・発露・吐露、顕示などの意。「語類」卷九七、三条、輔広録(Ⅶ 280)「記録言語難、故程子謂。若不得某之心、則是記得它底意思。…今觀上蔡所記、則十分中自有三分以上是上蔡意思了。故其所記多有激揚發越之意。」

(2)「讀孟子、以觀其發越」孟子が悲憤慷慨して自己の胸中を吐露するタイプの人物であったことについては、以下の条を参照。「語類」卷五二、六六条、沈側録(Ⅳ 124)「如今人多將顔子做箇柔善底人看。殊不知顔子乃是大勇、反是他剛果得來細密、不發露。如箇有大氣力底人、都不使出、只是無人抵得他。孟子則攘臂扼腕、盡發於外。論其氣象、則孟子粗似顔子、顔子較小如孔子。孔子則渾然無迹、顔子微有迹、孟子其迹盡見。」

(3)「微妙處」『中庸』の説く内容が「微妙」である(奥深い)という点については、例えば『中庸章句』第二章の「君子之道、費而隱。」に関して「語類」卷六三、五四条、董銖録(Ⅳ 133)に「隱、言其體微妙也。」とあり、また『中庸章句』第三章「上天之載、無聲無臭。」について、朱子の注が「右第三十三章、…又贊其妙、至於無聲無臭而後已焉」とある。

(4)「論語却」「却」は文脈によって多義的であるが、この場合は、主語に関して他と対比対照して述べる語氣を示す。「〴〵の方は」「〴〵はと言えば」「語類」卷二、九〇条、包揚録(Ⅰ 30)「江西山皆自五嶺贛上來、自南而北、故皆逆。閩中却是自北而南、故皆順。」

(5)「中庸亦難讀」「中庸」が難読であることは朱子もしばしば指摘



している。「語類」卷六二、二条、黄升脚録 (IV 1479) 「中庸、初學者未當理會。」同、三条、林賜録 (IV 1479) 「中庸之書難看。」

4条

先看大學、次語孟、次中庸。果然下工夫、句句字字、涵泳切己、看得透徹、一生受用不盡。只怕人不下工、雖多讀古人書、無益。書只是明得道理、却要人做出書中所說聖賢工夫來。若果看此數書、他書可一見而決矣。 謙

〔校勘〕

○朝鮮古写本卷一四是本条を収録しない。

〔訳〕

まず「大學」を読み、次は「論語」「孟子」、次は「中庸」だ。もしもその勉強に際して、一字一句、切実に沈潜し、透徹するまで読むならば、(人はこれら四書から) 一生にわたって尽きせぬ益を蒙るのだ。ただ心配なのは、人がそんなふうには勉強せず、いくら古人の書物を多読しても無益に終わることだ。書物はただ道理を明らかにするだけのものであって、その書中に説かれた聖賢の実践を実地にやってみることこそが肝要なのだ。もし本当にこの数書を読んだなら、その他の書物は一読しただけで決着がつく。 廖謙録

〔注〕

(1) 「涵泳」じつくりと養うこと。またどっぷりと沈潜すること。「語類」卷二二、三四条、襲蓋脚録 (VIII 2928) 「或曰。先生涵泳之說、乃杜元凱優而游之之意。曰。固是如此。亦不用如此解說。所謂涵泳者、只是子細讀書之異名。」なお所引は杜預の「春秋左氏伝序」の「優而柔之、使自求之。鑿而飫之、使自趨之。反若江海之浸、膏澤之潤、渙然冰釋、怡然理順、然後為得也。」三浦國雄「朱子語類抄」七八〜七九頁参照。

(2) 「一生受用不盡」類似の表現を挙げておく。「河南程氏遺書」卷一七、三条「善讀中庸者、只得此一卷書、終身用不盡也。」同、卷二二上、四四条「先生曰。凡看語孟、且須熟玩味、將聖人之言語切己、不可只作一場話説。人只看得此二書切己、終身儘多也。」(いずれも程頤の語)

(3) 「做出書中所說聖賢工夫來」「做出…來」には「実地に行う(行つた結果や成果が目に見える形で現れる)」という語氣が有る。「語類」卷二一、一九条、程端蒙録 (II 888) 「忠信、以人言之。蓋忠信以理言、只是一箇實理。以人言之、則是忠信。蓋不因人做出來、不見得這道理。」

5条

論孟中庸、待大學貫通浹洽、無可得看後方看、乃佳。道學不明、元來不是上面欠却工夫、乃是下面元無根脚。若信得及、腳踏實地、如此做去、良心自然不放、踐履自然純熟。非但讀書一事也。

〔校勘〕

○朝鮮古写本卷一四は本条を収録しない。

○成化本、朝鮮整版本は「貫通」を「通貫」に作る。

〔参考〕

本条に関しては、『朱子語録姓氏』にも収録されている呉必大（字伯豊）が朱子から受け取った書翰中に酷似する表現が見られるので、以下に掲げておく。

『朱文公文集』卷五二「答呉伯豊」第二書「論孟中庸、儘待大學通貫浹洽、無可得看後方看、乃佳。若奔程趣限、一向攢了、則雖看如不看也。近方覺此病痛不是小事。元來道學不明、不是上面欠却工夫、乃是下面原無根脚。若信得及、脚踏實地、如此做去、良心自然不放、踐履自然純熟。非但讀書一事也。」

〔訳〕

【論語】『孟子』『中庸』は、『大学』の教えが身体の隅々にまでしみわたってこれ以上はもう読む余地がない、という段階にまで至ってから、そこで始めて読むべきだ。道学が明らかになって来なかったのは、そもそも（土台の）上での実践が欠如していたからではなくて、足下にそもそも土台そのものが無かったからだ。もしも確固たる信念が持てたなら（＝自己の立脚地が定まったならば）、あとはしっかりと地に足をつけ、そのようにしてやっていけば、良心を喪失することもなく、実践も自ずと純粹に成熟するだろう。これは単に読書の一事に限つ

たことではない。 記録者名欠

〔注〕

(1)「浹洽」教化・感化・道理などが身心にすっかりしみこむこと。『漢書』卷二二「礼楽志」「於是教化浹洽、民用和睦。」顔師古注「浹、徹也、洽、霑也。」「語類」卷一〇、五条、魏椿録（I 162）「讀書要自家道理浹洽透徹。」

(2)「道學不明」孟子以後、聖学が断絶したという所謂「道統説」（朱子「大学章句序」等）に関わる認識である。王開祖（皇祐五年一〇五三進士）『儒志篇』「或曰。荀揚之學何如。曰。奚以問歟。由孟子以來、道學不明。我欲述堯舜之道、論文武之治、杜淫邪之路、開皇極之門。吾畏諸天者也。吾何敢已哉。」「朱文公文集」卷四一「答程允夫」第二書「大抵自道學不明、千有餘年。為士者、習於耳目見聞之陋、所識所趣、不過如此。」なお以下の用例でも朱子は、「道學不明」の原因は聖学に対する信が確立しない（＝為学の立脚点が決まらない）からであると述べている。『朱文公文集』卷四五「答呂季克」「道學不明、異端競起。士雖有意於學而浮沉世故、不能篤信聖言、躬行默體、以至不疑之地、鮮有不沒溺者、甚可歎也。」

(3)「信得及」信じ切る。その反対が「信不及」入矢義高・古賀英彦『禪語辭典』頁二二八参照。

(4)「良心自然不放」『孟子』『告子』上「孟子曰。仁、人心也。義、人路也。舍其路而弗由、放其心而不知求、哀哉。人有雞犬放、則知求之、有放心、而不知求。學問之道無他、求其放心而已矣。」

人之為學、先讀大學、次讀論語。大學是箇大坯模。大學譬如買田契、論語如田畝濶狹去處、逐段子耕將去。或曰。亦在乎熟之而已。曰。然。去偽 人傑同

## 〔校勘〕

○「大學是箇大坯模」朝鮮古写本は「箇」を「个」に作る。以下、同様の異同については校勘を省く。

○「濶狹」成化本、萬曆本、朝鮮古写本、朝鮮整版本、和刻本ともに「濶狹」に作る。「濶」は「闊」の俗字。

○「亦在乎熟之而已」朝鮮古写本は「亦在乎熟耕將去」に作る。

○「去偽 人傑同」朝鮮古写本は「人傑 去偽同」に作る。

## 〔訳〕

学問をするにはまず『大学』を読み、次には『論語』を読む。『大学』は大きな鑄型のようなものだ。『大学』は喩えて言えば田地を買う際の契約書のようなもの。『論語』は自分の所有する土地の広狭に応じて、その一段一段を耕していくようなものだ。或る者が尋ねる。「例の成熟させることこそが肝要だ」と同じですね。」答え「その通りだ。」  
金去偽録 萬人傑録も同じ

## 〔注〕

(1) 「坯模」鑄型、大枠、荒削りの骨格。『語類』卷七、九条、葉賀孫録 (I 155) 「古者、小學已自暗養成了、到長來、已自有聖賢坯模、只就上面加光飾。」

(2) 「大學譬如買田契」云々 田契は土地の売買や貸借に関する契約書。『宋史』卷二二七、宦者「楊戩」「有胥吏杜公才者、獻策于戩、立法索民田契、自甲之乙、乙之丙、展轉究尋。至無可證、則度地所出、増立賦租。」岡島冠山『字海便覽』に「買田契トハ 田ヲ買フ手形ノコトナリ」とある。

(3) 「田畝濶狹去處」「去處」は「ところ」「場所」『語類』卷一二、一二七条、周謨録 (I 215) 「大凡學者須先理會敬字。敬是立脚去處。」

(4) 「亦在乎熟之而已」『孟子』「告子」上「孟子曰。五穀者、種之美者也。苟為不熟、不如糞稗。夫仁亦在乎熟之而已矣。」

## 7条

問。欲專看一書、以何為先。曰。先讀大學、可見古人為學首末次第。且就實處理會却好、不消得專去無形影處理會。 淳

## 〔校勘〕

○朝鮮古写本卷一四は本条を収録しない。

〔訳〕

質問。「一書を選んで読もうとする場合、何をまず読めばよいでしょう。」先生「まず『大学』を読めば、古人の学問の順序首尾を知ることが出来る。とりあえずは平易着実なところから取り組む方がよい。わざわざ影も形もないような抽象的なところから取り組む必要はない。」 陳淳録

〔注〕

(1)「無形影」形而上の存在である「理」や「性」を形容する際にも用いられる語彙であるが、ここでは抽象的、形而上学的で難解なこと。朱子によれば四書の中では「中庸」が、五経の中では「周易」がこれに当たる。『語類』巻六二、四條、陳淳録(IV 1479)「某說箇讀書之序、須是且著力去看大學、又著力去看論語、又著力去看孟子。看得三書了、這中庸半截都了。…不可掉了易底、却先去攻那難底。中庸多說無形影、如鬼神、如天地參等類、說得高。說下學處少、說上達處多。」『語類』卷六七、五一條、陳淳録(V 1657)「說及讀易、曰。易是箇無形影底物、不如且先讀詩・書・禮、却緊要。」

8条

可將大學用數月工夫看去。此書前後相因、互相發明、讀之可見、不比他書。他書非一時所言、非一人所記。惟此書首尾具備、易以推尋也。

力行

〔訳〕

「大学」を数ヶ月間かけて読むのがよい。この書は前後の内容が関連し、相互に意味を明らかにしてくれるので、読めばわかる。それは他の書の比ではない。他の書は一時の発言でもなければ、一人が記したものでもない。この「大学」だけは首尾が具さに備わっており、考察しやすい。 王力行録

〔注〕

(1)「讀之可見」「大学」は読めば理解できる。「の意味に解釈したが、『大学』は前後の内容が関連し、相互に意味を明らかにしてくれる書物であるということは、読んでみればわかることだ。」という解釈も可能。因みに後出の三八条には「如大學、只說箇做工夫之節目、自不消得大段思量、纔看過、便自曉得。」とあり、やはり「大学」は一読すれば理解可能」という趣旨の発言である。

9条

今且須熟究大學作間架、却以他書填補去。如此看得一兩書、便是占得分數多、後却易為力。聖賢之言難精。難者既精、則後面粗者却易曉。

大雅

〔校勘〕

○「便是占得分數多」 成化本、朝鮮古写本、朝鮮整版本は「便是」を「便

「自」に作る。

〔訳〕

今、まずは「大学」をじっくりと研究して骨組みを作り、それから他の書物でその中身を埋めていくこと。そのようにして一二冊の本を読めば、それでもうかなりの部分が埋まることになるので、後の勉強がしやすい。聖賢の言葉は精密に理解することが難しい。その難しいのを精密に理解できれば、残りの大雑把なものは理解しやすい。余大雅録

〔注〕

(1)「間架」 家屋等の構造、骨格。『語類』卷一九、四条、沈僩録(Ⅱ) 458「如入箇門、方知門裏房舍間架。若不親入其門戶、在外遙望、説我皆知得、則門裏事如何知得。」

(2)「後面」 うしろの、あとの。ここでは「残りの」と意識したが、上の「既」と呼応して「難しいものが精密に理解できさえすれば、その後は」という解釈も可能。

10条

亞夫問大學大意。曰。「大學是修身治人底規模。如人起屋相似、須先打箇地盤。地盤既成、則可舉而行之矣。」時舉

〔訳〕

亞夫(曇淵)が「大学」の大意についてお尋ねした。先生「『大学』は修己治人の骨格である。ちょうど人が家を建てるようなもので、まずは地盤を固めねばならない。地盤が完成しさえすれば、あとはどんな建てていける。」潘時拳録

〔注〕

(1)「亞夫」 『朱子語録姓氏』「曇淵、字亞夫、涪陵人。」  
(2)「修身治人」 「修身」は八条目の一つでもあるが、ここでは「治人」と対拳されているから「修己」と同義と見ておく。因みに三綱領・八条目と修己治人の関係は以下の通り。

明明徳——格物・致知・誠意・正心・修身——修己  
新民——齊家・治國・平天下 ——治人

11条

或問。大學之書、即是聖人做天下根本。曰。此譬如人起屋、是畫一箇大地盤在這裏。理會得這箇了、他日若有材料、却依此起將去。只此一箇道理。明此以南面、堯之為君也。明此以北面、舜之為臣也。

〔校勘〕

○朝鮮古写本卷一四は本条を収録しない。

〔訳〕

或る者が尋ねる。「『大学』という書物は、聖人が天下を治める根本ですね。」先生「人が家を建てる場合に喩えれば、『大学』とは大きな基盤をしっかりと定めておくようなものだ。それさえやっておけば、他日もしも材料が得られれば、その地盤にそって建てていけばよい。ただこの道理があるばかりだ。この道理を明らかにして南面したのが君主としての堯であり、この道理を明らかにして北面したのが、臣下としての舜である。 記録者名欠

〔注〕

(1)「做天下」この場合の「做」は「为国」「為天下」の「為」と同じく「治める」の意。『語類』巻五六、一八条、沈備録(IV 1328)「今之為國者、論為治則曰、不消做十分底事、只隨風俗做便得、不必須欲如堯舜三代、只恁地做天下也治。」

(2)「在這裏」上に述べる動作・状態の確実さを強調する。ちゃんと、しっかり。田中謙二『朱子語類外任編訳注』一八頁、三浦國雄『朱子語類抄』五〇頁。

12条

大學一書、如行程相似、自某處到某處幾里、自某處到某處幾里。識得行程、須便行始得。若只讀得空殼子、亦無益也。 履孫

〔訳〕

『大学』一書は、某処から某処までは何里ある、某処から某処までは何里ある、と記した旅程書のようなものだ。行程を知った上は、是非ともすぐに实地にその経路をたどってみるべきだ。もしただ単に空しく読むだけでは、やはり無益である。 潘履孫録

〔注〕

(1)「須便行始得」「須(是)：始得」は「せひともして、それでこそよい。「せひともしてせねばならぬ。」「語類」には「須(是)：方可」「須(是)：方是」「須(是)：方得」等の用例が頻出する。なお「便」はここでは「すぐに」「ただちに」の意。『語類』巻一一、四七条、潘履孫録(I 103)「學者有所聞、須便行始得。若得一書、須便讀便思便行。豈可又安排停待而後下手。」

(2)「空殼子」空き殻。中身がなく空っぽなこと。「むなしく」「表面的に」の意で副詞句としても用いられる。『語類』巻七三、二九条、胡泳録(V 1206)「或問。大人虎變、是就事上變、君子豹變、是就身上變。曰。豈止是事上。也從裏面做出來。這箇事、却不只是空殼子做得。」

13条

大學如一部行程曆、皆有節次。今人看了、須是行去。今日行得到何處、明日行得到何處、方可漸到那田地。若只把在手裏翻來覆去、欲望之燕

之越、豈有是理。 自修

〔訳〕

『大学』は一冊の旅程書のようなものであって、(目的地までの道順が)全て順序立てて記されている。今、人は読み終わったならば、是非とも実地にそれをたどってみるべきだ。今日はどこそこまで行った、明日はどこそこまで行こう、というやりかたでこそ、やがてはその目的地にまでたどり着けるのだ。もし単に旅程書を手の中で開いたり閉じたりして眺めているだけでは、燕に行きたい越に行きたいと願っても、どうしてそんなことができようか。 孫自修録

〔注〕

(1) 「行程暦」 留守友信『語録訳義』に「行程暦 名物六帖曰。道中記ノコト、語類ニ出ツ。」とある。伊藤東涯『名物六帖』人事箋三、簿帳冊暦に「行程暦」の見出し語を挙げ、「語類」の本条を引用している(朋友書店刊、古典叢書、頁四三八)。官司が行程暦に照らして糧運の遅速等を監察督促する、という類の用例は『宋会要』にも多数見られる。『宋会要輯稿』職官、一一之一四、磨勘、慶曆四年六月五日「有押水路網運并附綱到闕者、令在京排岸司點檢本綱行程暦、且在路計若干程内阻滯月日。」同、食貨、一二之三三、塩法、福建路、双行注引建安志「如尤溪、三年之内、合運二十四綱、止運一綱者間或有之。批行程暦以驗遲速。」

(2) 「田地」 『語類』では「聖人田地」(巻七)、「孔子田地」(巻

六〇)など、地歩・境地・境涯などの意でも用いられるが、ここは単に場所の意。『語類』巻一一、六一條、輔廣録(一184)「讀書…若執着一見、則此心便被此見遮蔽了。譬如一片淨潔田地、若上面纒安一物、便須有遮蔽了處。」

(3) 「之燕之越」 燕は河北、越は浙江。北方と南方。「之燕之越」には任意の地に赴く、というニュアンスがある。陳埴(嘉定進士)『木鍾集』巻八「禮記」「道不可以湏臾離、如何。…道即路之謂也。之燕之越、無非是路。才無路、便是荆棘草莽。」

14条

大學は一箇腔子。而今却要去填教實著。如他說格物、自家是去格物後、填教實著。如他說誠意、自家須是去誠意後、亦填教實著。 節

〔校勘〕

○「今却要去填教實著」 萬曆本は「著」を「看」に作る。朝鮮古写本は「實著」を「實」に作る。但し後出する二箇所の「填教實著」は萬曆本・朝鮮古写本とも同じ(但し両書とも「著」を「着」に作る)。

〔訳〕

『大学』とは、(それ自体は空虚な)人の身体のようなものだ。今、それを充填して満たしてやるのが大切だ。例えば『大学』が格物を説けば、自分で格物を実践することでそれを充填して満たしてやる。

『大学』が誠意を説けば、自分では非とも誠意を實踐し、やはりそれを充填して満たしてやるのだ。 甘節録

〔注〕

(1)「腔子」 身体。心や臓器などの容器としての身体（それ自体は空虚なもの）。『河南程氏遺書』卷三、四五条「滿腔子是惻隱之心。」同書卷七、一〇条「心要在腔子裏。」『語類』卷五三、二五条、董銖録（IV 1283）「或問。滿腔子是惻隱之心。曰。此身軀殼謂之腔子。」「語類」卷五三、二九条、黄榦録（IV 1283）「問。如何是滿腔子皆惻隱之心。曰。腔、只是此身裏虛處。」

(2)「填教實著」 充填して満たさせる。「教」は使役。「著」は句末に添えて状態等を表す助字。『語類』卷二一、八三条、記録者名欠（I 187）「先生戲引禪語云。一僧與人讀碑云、賢讀者、總是字、某讀者、總是禪。」

15条

大學重處都在前面。後面工夫漸漸輕了、只是措磨在。 士毅 廣録云。後面其失漸輕、亦是下措磨底工夫在。

〔校勘〕

○朝鮮古写本は「廣録云」以下を欠く。  
○成化本、朝鮮整版本は「廣録云」以下を「後面其失亦漸輕、只是下

措磨底工夫在。」に作る。

〔訳〕

『大学』の重い部分は全て前半にある。後半は工夫もしいに軽くなっていくから、ただ（仕上げに）磨きをかけてやることだ。 黄士毅録

輔廣録に云う。「後半は（工夫が）少しずつ重みを失って軽くなっていくから、あとは磨きをかける工夫を行うだけのことだ。」

〔注〕

(1)「重處都在前面」云々 ここにいう「前面（前半）」と「後面（後半）」がそれぞれ具体的に『大学』全体のどこからどこまでを指しているのか、実は判然としない。「誠意」までが難関で「正心」「修身」以下は比較的容易である、という朱子の発言は複数存在する。『語類』卷一五、一一五条、林夔孫録（I 305）「意誠則心正。誠意最是一段中緊要工夫。下面一節輕一節。」同、一二二条、林夔孫録（I 305）「大學於格物・誠意、都煅煉成了。到得正心・修身處、只是行將去、都易了。」因みに李宜哲『語類考文解義』は「前面」を「修身以前」と解釈している。「前面謂修身以上工夫。此乃本根所在、至重而緊。其下則比此為輕、就加磨措而已。」

(2)「只是措磨在」「措磨」はこすり磨く、磨きをかける。前半の工夫で基本的骨格は定まるので、後はいささか磨きをかけて完成させればよい、との意。『語類』卷一〇四、四五条、沈僩録（VII 2621）「歐



陽公則就作文上改換、只管揩磨、逐旋捱將去。久之、漸漸揩磨得光。」  
「在」は断定の語氣を示す句末の助字。入矢義高・古賀英彦「禪語  
辭典」頁一五六。

(3) 「後面其失亦漸輕」 「其失」は「工夫」の誤写である可能性も  
ある。

16条

看大學前面初起許多、且見安排在這裏。如今食次册相似、都且如此  
呈說後、方是可喫處。初間也要識許多模樣。 賀孫

〔校勘〕

○朝鮮整版本は「初間」を「初問」に作る。

〔訳〕

「大学」を読むと冒頭で最初に多くの事柄を挙げているから、まず  
はしっかりと段取りを把握しておくことだ。今の献立表のようなもの  
で、まずは全てをこうして提示しておくのであって、それでこそ食べ  
ることもできるのだ。最初にやはり多くの様子を知っておくべきであ  
る。 葉賀孫録

〔注〕

(1) 「前面初起許多」 經の「三綱領」「八条目」等を指すか。

(2) 「安排」 あれこれからう、手をかける、手配りする、処置する。  
「語類」では「何待安排」(卷八)、「不容安排」(卷一〇)、「未要如  
此安排」(卷一二)等のように否定的文脈での用法が多いが、本条  
のように肯定的文脈でも用いられる。「語類」卷一八、一三二条、黃  
士毅録(II 424)「因舉左氏傳云。正曲為直、正直為正。曲是體段不  
直、既為整直、只消安排教端正。故云正直。」

(3) 「食次册」 食譜・食單・メニュー。「字海便覽」に「食次册トハ  
コンダテ書ノコトナリ」葉適「水心文集」卷一九「中奉大夫直龍圖  
閣司農卿林公墓誌銘」「汀州賦輸無法、吏多取自入、為百姓患。帥  
漕請均節之、以委公。公索其征、有公庫鮮脯食次册・差出貼支等錢、  
皆數千計、他多此類。」因みに「齊民要術」卷九には「食經曰」と  
いう引用と並んで「食次曰」という引用例が頻出する。「隋書」卷  
三四「經籍志」子部、医方には「食饌次第法一卷」が著録されており、  
「食次」の二文字はあるいは「食饌次第法」の略かとも思われる。  
後に「食次」は食べ物の意味する語彙ともなる。「夢梁錄」卷一六「酒  
肆」「賣諸般下酒・食次、随意索喚。(いろいろな下酒と食次を売り、  
好きなものが求められる。)」同「分茶酒店」「杭城食店、…食次名  
件甚多。(杭城の料理店は…杭城の食次の種類名称は極めて多い。)」  
なお梅原郁訳注『夢梁錄』(平凡社、東洋文庫)第三冊、九六頁、  
注(6)参照。上引二例の日本語訳も同書による。

17条

大學一字不胡亂下、亦是古人見得這道理熟。信口所說、便都是這裏。  
淳

〔校勘〕

○「亦是」朝鮮古写本は「亦只是」に作る。

〔訳〕

『大学』はただの一字もい加減には書かれていないのであって、それはやはり古人がこの道理に通曉習熟していたからだ。その古人が口をついて出るままに説いた内容が、全てこの道理に他ならないのだ。

陳淳録

〔注〕

(1) 「信口」『語類』中では「信口胡説」(口に任せてでたために説く、卷一二)のように否定的に用いられることが多いが、以下のように肯定的な文脈で用いられることもある。『語類』卷一二五、二六条、葉賀孫録(Ⅷ 2992)「莊子文章、只信口流出、煞高。」「語類」卷一三九、三条、葉賀孫録(Ⅷ 3297)「問離騷卜居篇内字。曰。：如這般文字、更無些小窒礙。想只是信口恁地説、皆自成文。」内面に蓄えられたものが、作為やはからいなしに自然に発露する、というニュアンス。

18条

大學總說了、又逐段更説許多道理。聖賢怕有些子照管不到、節節覺察將去、到這裏有恁地病、到那裏有恁地病。 節

〔訳〕

『大学』は(「経」において)総論的に説いた後で、さらに(「伝」において)一段ごとに多くの道理を説いている。聖賢は(「経」における総論だけでは)いささか目配りの行き届かない点があるのではないかと危惧し、そこで(「伝」を作成して)一節ごとに「ここにはこういう問題がある、あそこにはこういう問題がある。」と(学ぶ者の陥りがちな問題点を)察知していったのである。 甘節録

〔注〕

(1) 「照管」管理する、管理下に置く、掌握する、制御する。『語類』卷一二、三二条、游敬仲録(Ⅰ 200)「大概人只要求箇放心、日夕常照管令在。」「語類」卷一六、二五五条、湯泳録(Ⅱ 200)「人治一家一國、尚且有照管不到處、況天下之大。」  
(2) 「恁地」このように、このような。「如此」と同じ。  
19条

明德、如八窗玲瓏、致知格物、各從其所明處去。今人不曾做得小學

工夫、一旦學大學、是以無下手處。今且當自持敬始、使端慤純一靜專、然後能致知格物。 椿

〔校勘〕

○「端慤」成化本、萬曆本、朝鮮古写本、朝鮮整版本、和刻本はいずれも「慤」を「確」に作る。

〔訳〕

「明德」とは、例の「八窗玲瓏」（八つの窓から明るく陽光の差し込んだ部屋）のようなものであって、「致知」「格物」も、それぞれその明るくしたところからやっていけばよい。今の人は小学の工夫を全くやりもしないで、ある日突然に「大学」を学ぼうとするから、それどこから手をついたらよいかわからないのだ。とりあえずまずは持敬から始めるべきであって、そうして心を端正誠実に、純一で静かで専一にすれば、その後で致知格物を実践し得るのだ。 魏椿録

〔注〕

(1) 「八窗玲瓏」 八つの窓から光が差し込んで室内が明るいさま。

唐の盧綸の詩句に典故を持つ語。『全唐詩』卷二七六、盧綸「賦得

彭祖樓送楊德宗歸徐州幕」「四戸八牕明、玲瓏逼上清。」転じて澄明

透徹した境地を指す。『語類』卷二〇、九三条、呂熹録（VII 2909）「而

今須是要打破那黑底虛靜、換做箇白底虛靜、則八窗玲瓏、無不融通。

不然、則守定那裏底虛靜、終身黑滓滓地、莫之通曉也。」

(2) 「小學」「大學」は古の教育機関である大学における教育内容を

記した書物であるが、その大学入学の前段階に小学での教育期間があった。朱子『大学章句』序「人生八歳、則自王公以下、至於庶人之子弟、皆入小學、而教之以灑掃・應對・進退之節、禮樂射御書數之文。及其十有五年、則自天子之元子・衆子、以至公卿大夫・元士之適子、與凡民之俊秀、皆入大學、而教之以窮理・正心・修己・治人之道。」朱子の当時、小学は書物の形では既にその伝承を失っていた。『朱文公文集』卷七六「題小學」。なお朱子の友人である劉清之（字子澄）は朱子の付託を受けて『小学』を編纂した。王懋竑『朱子年譜考異』「淳熙十四年丁未五十八歳、三月、小學書成。」の条参照。

(3) 「持敬」「敬」は朱子学の術語であり、重要な実践項目の一つ。

身心を収斂し心を専一にすること。程頤の「整齐嚴肅」（外貌を整えて心を専一にする）、「主一無適」（心を専一に保ってあらぬかたに向かわせない）、謝良佐の「常惺惺」（心を常に目覚めさせておく）等が北宋以来の「敬」に対する代表的な定義である。『河南程氏遺書』卷一五、五四条「一者無他、只是整齐嚴肅、則心便一。」同、一七七条「所謂敬者、主一之謂敬、所謂一者、無適之謂一。」『上蔡語録』卷中、三七条「敬是常惺惺法。」なお「敬」の実践を「居敬」「持敬」等という。

(4) 「今且當自持敬始」 伝承を失った小学の欠を補うものとして「敬」を位置付ける発想は『語類』の随処に見出すことができる。『語類』卷一七、三条、廖德明録（II 370）「持敬以補小學之闕。小學且是拘檢住身心。」同、四條、鄭可學録（II 370～371）「問。大學首云明德、

而不會說主敬、莫是已具於小學。曰。固然。自小學不傳、伊川却是帶補一敬字。」

(5)「然後能致知格物」朱子学では程頤以来、居敬を格物致知(窮理)の本根に据えつつ、両者を互いに補充し合うものとしてともに重視する。『河南程氏遺書』卷三、九八条「入道莫如敬、未有能致知而不敬者。」同、卷一八、二八条「涵養須用敬、進學則在致知。」(ともに程頤の語)、『語類』卷一八、七二条、葉賀孫録(II 407)「又云。用誠敬涵養為格物致知之本。」「語類」卷九、一六条、廖德明録(I 150)「擇之問。且涵養去、久之自明。曰。亦須窮理。涵養・窮索、二者不可廢一。如車兩輪、如鳥兩翼。」

20条

而今無法。嘗欲作一説。教人只將大學一日去讀一徧、看他如何是大人之學、如何是小學、如何是明明德、如何是新民、如何是止於至善。日日如是讀、月去日來、自見所謂温故而知新。須是知新、日日看得新方得。却不是道理解新、但自家這箇意思長地新。 義剛

〔校勘〕

- 「一日去讀」徧」成化本、萬曆本、朝鮮古写本、朝鮮整版本、和刻本とも「徧」を「遍」に作る。
- 「月去日來」成化本、朝鮮古写本、朝鮮整版本は「月來日去」に作る。
- 「須是知新」萬曆本は「新」を「心」に作る。

〔訳〕

今、何か特別な方法が別に有るわけではない。かつて次のような説を作ろうとしたことがある。つまり人にただ一日に一度、「大学」を読ませ、「大人の学」とは如何なるものか、小学とは如何なるものか、「明德」とは如何なるものか、「新民」とは如何なるものか、「至善に止まる」とは如何なるものかを見させる。日々にこのように読み、歲月を積み重ねていけば、自ずから所謂「故きを温ねて新しきを知る」がわかるだろう。是非とも新たな発見があつて、日々に読み方が新しくなるようであればいい。とはいへ、道理の方が新しくなり得るわけではなく、ただ自分の側のこの認識が常に新しくなるのだ。 黄義剛録

〔注〕

- (1)「無法」他に格別の方法があるわけではない。以下を参照。『語類』卷一一、八四条、陳淳録(I 187)「問讀諸經之法。曰。亦無法、只是虚心平讀去。」「語類」卷一九、六二条、沈僩録(II 433)「讀書別無法、只管看、便是法。」
- (2)「大人之學」朱子『大学章句』冒頭の注に「大學者、大人之學也。」とある。
- (3)「明明德」「新民」「止於至善」「大学」の三綱領。
- (4)「温故而知新」「論語」「為政」「子曰。温故而知新、可以為師矣。」かつて学んだ内容を折に触れて思索し、その度に新たに得るところ

があるようであれば、人の師となることができる。なおこの語は「中庸章句」二七章にも引かれている。

(5) 「道理解新」 「解」は「会」と同じく「〜できる」。

(6) 「長長」 「常常」に同じ。

(7) 「自家這箇意思長地新」 「意思」はこころ、気持ち、認識。朱子は「温故知新」の具体例として、読書が深まることで新たな道理を発見する、といった場合を想定している。「語類」卷二四、三六条、呉振録(II 575) 「温故知新、謂温故書而知新義。」同、三八条、董銖録(II 575) 「問温故知新。曰。是就温故中見得這道理愈精、勝似舊時所看。」その場合、変化があるのは対象の側(書・道理)ではなく、主体の側(自家意思)である、ということ。

## 21条

才仲問大學。曰。人心有明處、於其間得一二分、即節節推上去。又問。小學、大學如何。曰。小學涵養此性、大學則所以實其理也。忠信孝弟之類、須於小學中出。然正心、誠意之類、小學如何得知。須其有識後、以此實之。大抵大學、一節一節恢廓展布將去、然必到於此而後進。既到而不進、固不可。未到而求進、亦不可。且如國既治、又却絜矩、則又欲其四方皆準之也。此一卷書甚分明、不是滾作一塊物事。可學

〔校勘〕

○「於其間得一二分」 朝鮮古写本は「問」を「問」に作る。

○「滾作一塊物事」 成化本、萬曆本、朝鮮古写本、朝鮮整版本は「滾」を「袞」に作る。

〔訳〕

才仲が「大學」についてお尋ねした。先生「人の心には明晰な部分(明德)がある、そのうちの一割二割でも得れば、あとは逐一それを推し広めていくことだ。」またお尋ねする。「小学と大学は如何でしょうか。」先生「小学においてこの本性を涵養する、大学とはその理を実あるものとする場である。忠信孝弟(といった徳目)の類は、是非とも小学において養っておくべきである。しかしながら「正心」「誠意」といった実践方法)の類は、小学においてどうして知ることができよう。ぜひともそれらについて識った上で、大学によって実践すべきだ。そもそも大学は、段階的に徐々に範囲を広げて実践していくべきであるが、しかしながら、是非ともそこまでたどり着いてから然る後に先へ進む、というふうにすべきである。そこまで到達していながら先へ進まないのはもちろんだめだが、そこまでたどり着いてもいけないのに先へ進むとするのは、これまただめだ。例えば国が既に治まれば、そこでさらに(広く天下に)推し量るのも、天下四方が全て自己と同様になるようにと望むからに他ならない。「大學」というこの書物は極めて明晰な構造を持つものであつて、いっしょくたにひとかたまりのものとして書かれた書物ではないのだ。」 鄭可學録

〔注〕

(1)「才仲」魏丙、字才仲(材仲)。「朱子語録姓氏」には未収。「語類」卷三九、四四、四九等に「魏才仲問」で始まる条が有る他、卷六六、六条(IV 1621)には「魏丙材仲問」とある。陳榮捷『朱子門人』頁三五八。

(2)「人心有明處」人間の心に本来具わった明晰な箇所。「明德」のこと。一九条参照。また次注における用例を参照のこと。

(3)「於其間得二分、即節節推上去。」明德の大部分が物欲によって蔽われても、その一二割が保たれていれば、そこを基礎としてこれを拡充していく。ここでの「推」は「明明徳」の工夫を意味する。

〔語類〕卷一四、七七条、李季札録(Ⅰ 263)、「問明明徳。曰。人皆有个明處。但為物欲所蔽、剔撥去了。只就明處漸明將去。」同、七八条、沈憫録(Ⅰ 263)、「明德未嘗息、時時發見於日用之間。如見非義而羞惡、見孺子入井而惻隱、見尊賢而恭敬、見善事而歎慕、皆明德之發見也。如此推之、極多。但當因其所發而推廣之。」

(4)「大抵大學、一節一節恢廓展布將去」以下、「大學」が為学工夫の階梯を段階的漸進的に説く書物であることを述べる。「恢廓展布」は「修身→齊家→治國→平天下」と実践の場が同心円上に拡大していくイメージか。

(5)「絜矩」『大学章句』伝十章(「釈治國平天下」)に典故を持つ語。その朱注に「絜、度也。矩、所以為方也。」とある。さしがねで量ること。自分の心を尺度として他者の心を推し量ること。「恕」に近い。〔語類〕卷一六、二一五条、萬人傑録(Ⅱ 361)「所謂絜矩者、

矩者、心也。我心之所欲、即他人之所欲也。我欲孝弟而慈、必欲他人皆如我之孝弟而慈。」〔語類〕卷一六、二三〇条、吳振録(Ⅱ 364)「恕亦是絜矩之意。」

(6)「四方皆準之」自分だけでなくあらゆる人々(四方)が人心の欲する所を遂げることができるといふ点において、自分と等しくなる(準)。「大学章句」伝十章、朱注「是以君子必當因其所同、推以度物、使彼我之間、各得分願、則上下四旁、均齊方正、而天下平矣。」〔語類〕卷一六、二一七条、徐寓録(Ⅱ 361)「絜矩は四面均平底道理。教他各得老其老、各得長其長、各得幼其幼。不成自家老其老、教他不得老其老、長其長、教他不得長其長、幼其幼、教他不得幼其幼、便不得。」

(7)「不是滾作一塊物事」「滾」「袞」は「混」「渾」に通じる。『大学』は為学の階梯を明晰に段階的に説いた書物なので、その漸進性・段階性を無視して全体を一括りに(渾一的に)見てはならない、という意。

22条

大學是為學綱目。先通大學、立定綱領、其他經皆雜說在裏許。通得大學了、去看他經、方見得此是格物致知事、此是正心誠意事、此是修身事、此是齊家治國平天下事。

〔訳〕

『大学』とは為学における綱目である。まず『大学』に通暁して綱領をしつかりと定めれば、その他の経書がいろいろに説く内容は全て『大学』のうちにあるのだ。『大学』に通暁し得た上で他の経書を読めば、これこそが「格物」「致知」の事柄だ、これこそが「正心」「誠意」の事柄だ、これこそが「修身」の事柄であり、これこそが「齊家」の事柄であり、「治国」「平天下」の事柄である、とわかるのだ。 記録者名欠

〔注〕

(1) 「裏許」 うち。「裏面」と同じ。

23条

問。大學一書、皆以修身為本。正心、誠意、致知、格物、皆是修身内事。曰。此四者、成就那修身。修身推出做許多事。 椿

〔校勘〕

○朝鮮古写本卷一四は本条を収録しない。

〔訳〕

問い。『大学』の一書にあつては、全て「修身」を根本としており、「正心」「誠意」「致知」「格物」は、全て「修身」に属する事柄ですね。

先生「この四者がかの「修身」の内実を成している。「修身」から推し窮めていき、多くの事柄を為すのだ。」 魏椿録

〔注〕

(1) 「以修身為本」 『大学章句』経「自天子以至於庶人、壹是皆以脩身為本。」朱子注「正心以上、皆所以脩身也。」

24条

致知格物、大學中所説、不過為人君、止於仁、為人臣、止於敬之類。古人小學時都會理會來。不成小學全不會得知。然而雖是止於仁・止於敬、其間却有多少事。如仁必有所以為仁者、敬必有所以為敬者、故又來大學致知・格物上窮究教盡。如入書院、只到書院門裏、亦是到來、亦喚做格物・致得知。然却不曾到書院築底處、終不是物格・知至。 磴

〔校勘〕

○「古人小學時」 朝鮮古写本は「古人若是小學之時」に作る

○「如仁必有所以為仁者、敬必有所以為敬者」 朝鮮古写本はなし。

○「故又來大學」 朝鮮古写本は「故又來大學於」に作る。訳はこれに従う。

○「亦喚做格物致得知」 朝鮮古写本は「亦曰格物致知」に作る。

○「終不是」 朝鮮古写本は「終不是」に作るが、最初の「是」は衍

文であろう。

〔訳〕

「致知」・「格物」について、『大学』の中で説いているのは、「人君と為りては、仁に止まり、人臣と為りては、敬に止まる」という類に過ぎない。古の人は小学の段階ですべて取り組んできたわけだ。まさか小学の段階では全く知らなかったということがあろうか。しかし、「仁に止まり」、「敬に止まる」にしても、そこにはどれほど多くの事が含まれているのだろうか。例えば、仁は必ず仁をなす手だてがあり、敬は必ず敬をなす手だてがある。だから、(古では小学を経てから)さらに大学に来て「致知」・「格物」について窮めさせようとしたのだ。例えば、(ここの)書院に入る場合は、書院の門のところに入っただけでも、やはり(書院に)来たということになるし、これを「格物」・「致知」と言ってもよからう。しかし、書院の建物の中に足を踏み入れなければ、結局「物格り」・「知至る」とは言えないのだ。 黄螢録

〔注〕

(1)「致知・格物」『大学章句』経の語、八条目中の二項で、実践上における工夫の概念である。

(2)「為人君止於仁」云々『大学章句』伝三章、「為人君、止於仁。為人臣、止於敬。為人子、止於孝。為人父、止於慈。與國人交、止於信。」

〔関連記録〕

【語類】卷一五、一七条、董銖録 (I 287)「格物、是窮得這事當如此、那事當如彼。如為人君、便當止於仁、為人臣、便當止於敬。又更上一著、便要窮究得為人君、如何要止於仁、為人臣、如何要止於敬、乃是。」

同上、四六条、曾祖道録 (I 287)「格物是為人君止於仁、為人臣止於敬之類。事事物物、各有箇至極之處。所謂止者、即至極之處也。然須是極盡其理、方是可止之地。」

25条

人多教踐履、皆是自立標置去教人。自有一般資質好底人、便不須窮理・格物・致知。此聖人作今大學、便要使人齊入於聖人之域。 榦

〔校勘〕

○「今」「个」の誤写であろう。訳も改める。後掲の〔関連記録〕【語類】卷九、黄鯨録はまさに「箇」に作る。

〔訳〕

人は往々にして実践を教える際には、みな自分勝手に目標を立てて人に教えてあげている。確かに一種の素晴らしい資質を持つ人がいて、彼らには「窮理」・「格物」・「致知」を行う必要がないのだ。聖人がこの『大学』を作ったのは、(資質の素晴らしい一部の人のみではなく、すべての)人に齊しく聖人の境地に到達させたかったからなのだ。



黄榦録。

〔注〕

(1) 「標置」 手本、模範、基準の意。ここでは、朱子が近頃の人々の立てた目標を聖人の作った「大学」の実践論に対比させている。

〔関連記録〕

【語類】卷九、三四条、黄榦録（1152～1153）「王子充問、某在湖南、見一先生只教人踐履」。曰、「義理不明、如何踐履。」曰、「他説、「行得便見得。」曰、「如人行路、不見、便如何行。今人多教人踐履、皆是自立標致去教人。自有一般資質好底人、便不須窮理・格物・致知。聖人作箇「大学」、便使人齊入於聖賢之域。若講得道理明時、自是事親不得不孝、事兄不得不弟、交朋友不得失信。」本条に一致する内容があるので、抜粋か。

26条

大學所載、只是箇題目如此。要須自用工夫做將去。 賀孫

〔訳〕

「大学」に記載されているのは、ただこのような、学問を為す項目だけだ。是非とも自ら実践してやっていかなければならない。 葉賀

孫録

〔注〕

(1) 「題目」 要目、項目、骨組みの意。  
(2) 「要須」 須要と同意、：しなければならぬ。

27条

大學教人、先要理會得箇道理。若不理解會得、見聖人許多言語都是硬將人制縛、剩許多工夫。若見得了、見得許多道理都是天生自然鐵定底道理、更移易分毫不得。而今讀大學、須是句句就自家身上看過。少間自理會得、不待解說。如語・孟・六經、亦須就自家身上看、便如自家與人對説一般、如何不長進。聖賢便可得而至也。 賀孫

〔校勘〕

○「聖人」 萬曆本は同じ。成化本、朝鮮古写本、朝鮮整版本はいずれも「聖賢」に作る。朝鮮整版本考異「聖賢、賢一作人」。訳は三本に従う。

〔訳〕

「大学」は人に教えるに、まずこの道理を會得させようとする。もし會得できなければ、聖賢の多くの言葉は全部人を無理矢理に束縛するもののように見えてしまい、多くの工夫も余計なものになってしまうのだ。(一方)もし會得できれば、聖人の説いている多くの道理はすべて天与の自然な鉄則のような道理で、ほんのわずかも変えるこ

とができないのだ、ということが分かる。現実に「大学」を読む際、必ず一言一句を自分の身に関連させながら、読まなければならぬ。(そうして) しばらく経つたら、自然に(道理を) 会得でき、人に説明してもらふ必要がなくなるのだ。例えば、『論語』・『孟子』・六経もやはり必ず自分の身に照らし合わせながら、読まなければならぬ。あたかも自分が人(経典の作者)と対談しているようであれば、どうして進歩しないことがあるのか。聖賢の境地にもこれで到達することができるのだ。 葉賀孫録

〔注〕

(1) 「聖賢便可得而至也」『二程全書』所収『河南程氏文集』卷八、伊川「顔子所好何學論」、「聖人之門、其徒三千、獨稱顔子為好學。夫詩・書・六藝、三千子非不習而通也、然則顔子所獨好者、何學也。學以至聖人之道也。聖人可學而至與。曰、然。」

28条

今人都是為人而學。某所以教諸公讀大學、且看古人為學是如何、是理會甚事。諸公願為古人之學乎、願為今人之學乎。 敬仲

〔校勘〕

○「都」 朝鮮古写本は「却」に作る。

○「甚事」 朝鮮古写本は「甚底事」に作る。

〔訳〕

近頃の人はみな他人に知ってもらうために学問をしているのだ。私皆さんに「大学」を読むようにと教えているのは、まず古の人が学問を為すこととはどのようなものであったか、取り組んでいる対象は何であったかを見てもらうためだ。皆さんは古の人のような学問をしたいのか、それとも今の人のような学問をしたいのか。 游敬仲録

〔注〕

(1) 「為人而學」『論語』憲問、「子曰。古之學者為己、今之學者為人。」『集註』は程子の言葉を引き、「為己、欲得之於己也。為人、欲見知於人也。」という。

(2) 「諸公」『語類』では、朱子が弟子のことを諸公や諸生、諸君と称した。

29条

讀大學、且逐段捱。看這段時、似得無後面底。看第二段、却思量前段、令文意聯屬、却不妨。 榦

〔校勘〕

○「且逐段捱」「捱」、「四庫」本は同じ。成化本、萬曆本、呂本、朝鮮整版本は「崖」に作る。また、朝鮮古写本はこの一句を「且逐段

唾將去」に作る。

○「看這段時」 朝鮮古写本なし。

○「後」 朝鮮古写本は脱落。

〔訳〕

『大学』を読むには、まず段ごとに順次に、突き詰めていくことだ。この段落を読む時は、あたかも後ろの文が存在しないかのようにするが、次の段落を読むには、また前の段落の文章を念頭に置いて読み、前後の文の意味が繋がるようにさせるのは差し支えがない。 黄榦録

〔注〕

(1) 「崖」、「涯」は「捱」に通ずる。順次に迫る、突き詰める、びつたりくっ付くの意。

(2) 「聯屬」 連繋する、繋がるの意。『語類』卷三十一、五四条、黄榦録(Ⅲ 796)「豈有上文稱其盡道而死、下文復歎其不當疾、而文勢亦不相聯屬。」

〔関連記録〕

『語類』卷一〇、四八条、余大雅録(I 167)「讀書是格物一事。今且須逐段子細玩味、反來覆去、或一日、或兩日、只看一段、則這一段便是我底。却踏這一段了、又看第二段。如此逐旋捱去、捱得多後、却見頭頭道理都到。」

『晦庵先生朱文公文集』卷四五「答胡寬夫」本文の小注、「如看論語、今日看到此段、即專心致意只看此段、後段雖好、且未要看。直待此段

分曉、説得反復不差、仍且盡日玩味、明日却看後段。日用凡事皆如此、以類推以可見。不然、雖是好事、亦名妄想。」

30条

看大學、固是著逐句看去。也須先統讀傳文教熟、方好從頭仔細看。若全不識傳文大意、便看前頭亦難。 賀孫

〔校勘〕

○「若全不識傳文大意」 「傳」、萬曆本は「得」に誤る。

〔訳〕

『大学』を読むには、当然一句ずつ読んで行くことだが、やはりまず伝文を通読し、(覚え込むように)習熟してからこそ、始めから(経文を)きめ細かく読むのがよい。もし伝文の大意を全く把握しなければ、前の部分(Ⅱ 経文)を読んでも難しい。 葉賀孫録

〔注〕

(1) 「著」 着手する、つける、行なうの意。

31条

或問讀大學。曰、讀後去、須更溫前面、不可只恁地茫茫看、須溫故

而知新。須是温故、方能知新。若不温故、便要求知新、則新不可得而知、亦不可得而求矣。 賀孫

新知、則亦不可得而求矣。」

〔校勘〕

○「茫茫看」成化本、朝鮮古写本、朝鮮整版本は「茫茫看去」に作る。

訳はこの三本に従う。

○「須温故而知新」成化本、朝鮮古写本、朝鮮整版本は「須」の字なし。これによって、句読も変わるが、訳はこの三本に従う。

〔訳〕

ある人が『大学』を読むことについて質問した。(先生が)言われた。「後ろの方へ読んでいったら、さらに前の文をお温習いしなければならぬ。そのように漫然として読んで行つてはいけない。(『論語』にいう)『故きを温ねて新しきを知る』とは、『故きを温ね』てこそ『新しきを知る』ことができるのだ。もし『故きを温ね』ないまま、『新しきを知』ろうとすれば、新しきを知ることできないし、探求することもできなからう。」 葉賀孫録

〔注〕

(1)「温故而知新」本巻第20条の注(4)を参照。

〔関連記録〕

【語類】巻二四、三七条、劉礪録(II 575)「温故方能知新、不温而求

32条

讀大學、初問也只如此讀、後來也只如此讀。只是初問讀得、似不與自家相關、後來看熟、見許多說話須著如此做、不如此做自不得。 賀孫

〔訳〕

『大学』を読むには、最初はただこのように読むしかないし、後になつてもただこのように読むしかない。ただ最初に読んだ時は、自分には関係がないようだったが、後になつて内容に習熟すれば、そこに書いてある多くの話は、是非ともこのようにしなければならなくなつて、そのようにすまいとしても自ずとできないのだ、ということが分かる。 葉賀孫録。

〔注〕

(1)「須著」必ず…しなければならぬ。

33条

謂任道弟讀大學、云、須逐段讀教透、默自記得、使心口相應。古時無多書、人只是專心暗誦。且以竹簡寫之、尋常人如何辦得竹簡如此多。

所以人皆暗誦而後已。伏生亦只是口授尚書二十餘篇。黃霸就獄、夏侯勝受尚書於獄中、又豈得本子。只被他讀得透徹。後來著述、諸公皆以名聞。漢之經學、所以有用。 賀孫

〔校勘〕

○「云」 朝鮮古写本は「曰」に作る。

○「人只是」 朝鮮古写本は「人人只是」に作る。

○「夏侯勝」前に「從」の字が脱落か。

○「又豈得本子」 成化本、朝鮮古写本、朝鮮整版本は「獄中又豈得本子」に作る。訳はこの三本に従う。

○朝鮮古写本はこの条の末尾に「池本止此」という小注が見え、さらに「因云、『余正甫前日堅說一國一宗。某云、『一家有大宗、有小宗、如何一國却一人。』渠高聲抗爭、某檢本與之看、方得口合。』と続く。

この部分は通行本『語類』卷九〇にある（VI 2389）。

〔訳〕

（先生は）弟の任道に『大学』を読むことを教えて言われた。「必ず段ごとに読んで、透徹させることだ。黙々と心と口が相呼応するように暗記するのだ。古の時は多くの書がなかったが、人々はただ一意専心して暗誦したのだ。そもそも竹簡を用いて寫すとなると、普通の人はどうしてあんなにたくさん竹簡を手に入れられようか。だから、人々はみな暗誦するまで読み続けた。伏生もやはりただ『尚書』二十数篇を口伝しただけだし、黄霸が投獄され、夏侯勝に従い獄中で『尚書』

を受けられた際も、獄中である以上、どうして書物が手に入ろうか。ただ夏侯勝が『尚書』を熟読し透徹するほど覚えていたので、伝授ができたのだ。後になって著述をあらわしたが、諸公はみな有名になった。漢代の經学が（後世に伝えられ）役に立ったのはこのためである。」

葉賀孫録

〔注〕

（1）「任道」 葉賀孫の弟。このほかに、『語類』卷一六、一八、七八（II 324、II 403、V 190）に葉任道が質問した語録三条が見えるが（葉賀孫録二条、萬人傑録一条）、「朱子語録姓氏」にはその名が載せられていない。また、葉賀孫の記録は紹熙二年（一一九一）以後に聞いたもので、任道も朱子晩年の門人と思われる。「水心先生文集」卷七に「送葉任道教授之官靜江」、「後村先生大全集」卷五に「甲錦鶏一首兼呈葉任道」という詩が残されているので、任道は葉適や劉克莊と交わりがあることが分かる。さらに、後者の詩によると、任道は國子監の教授を務め、後に広西の靜江に任官したという。

（2）「辦」 購入する、調達する、集めるの意。

（3）「而後已」 『論語』泰伯「死而後已、不亦遠乎。」

（4）「伏生亦只是口授尚書」 『史記』卷二二、伏生伝、「秦時焚書、伏生壁藏之。其後兵大起、流亡。漢定、伏生求其書、亡數十篇、獨得二十九篇、即以教于齊魯之間。學者由是頗能言尚書、諸山東大師無不涉尚書以教矣。」『史記』卷一〇一、鼂錯伝では、『正義』は衛宏「詔定古文尚書序」を引き「微之、老不能行、遺太常掌故鼂錯往

讀之。年九十餘、不能正言、言不可曉、使其女傳言教錯。齊人語多與穎川異、錯所不知者凡十二三、略以其意屬讀而已也。」という。孔安國「尚書序」、「濟南伏生、年過九十、失其本經、口以傳授、裁二十餘篇。」

(5) 「黃霸就獄」云々 『漢書』卷八九、黃霸伝、「知長信少府夏侯勝非議詔書大不敬、霸阿從不舉劾、皆下廷尉、繫獄當死。霸因從勝受尚書獄中、再更冬、積三歲乃出。」「漢書」卷七五、夏侯勝伝、「勝・霸既久繫、霸欲從勝受經、勝辭以罪死。霸曰、朝聞道、夕死可矣。勝賢其言、遂授之。繫再更冬、講論不忘。」

(6) 伏生には『尚書傳』四十一篇、『漢書』藝文志)や『尚書暢訓』三卷(『舊唐書』經籍志)があり、夏侯勝には『大・小夏侯章句』各二十九卷、『大・小夏侯』二十九篇がある(『漢書』藝文志)。

〔関連記録〕

『語類』卷一〇、董銖録(Ⅰ171)「今人所以讀書苟簡者、緣書皆有印本多了。如古人皆用竹簡、除非大段有力底人方做得。若一介之士、如何置。所以後漢吳恢欲殺青以寫『漢書』、其子吳祐諫曰、「此書若成、則載之車兩。昔馬援以意苴興謗、王陽以衣囊微名、正此謂也。」如黃霸在獄中從夏侯勝受『書』、凡再踰冬而後傳。蓋古人無本、除非首尾熟背得方得。至於講誦者、也是都背得、然後從師受學。…」

34条

或問大學。曰、大概是如此。只是更要熟讀、熟時滋味自別。且如喫果子、生時將來喫、也是喫這果子。熟時將來喫、也是喫這果子、只是滋味別。 胡泳

〔訳〕

ある人は『大学』について(自らの解釈を先生に)聞いた。先生が言われた。「大体はその通りだが、ただもつと熟読しなければならぬ。習熟すれば、味わいが自ずから違ってくるのだ。例えば、果物を噛む時、未熟の時に持ってきてきて噛っても、やはりこの果物を噛ることだし、熟れてから持ってきてきて噛るのも、やはり同じ果物だが、しかし、ただ味わいが違うのだ。」 胡泳録

〔関連記録〕

『語類』卷八、二三条、葉賀孫録(Ⅰ132)「…實是見得入頭處、也自不解住了、自要做去、他自得些滋味了。如喫果子相似、未識滋味時、喫也得、不消喫也得。到識滋味了、要住、自住不得。」また、『語類』卷一〇、黃卓録(Ⅰ167)「大凡讀書、須是熟讀。熟讀了、自精熟。精熟後、理自見得。如喫果子一般、劈頭方咬開、未見滋味、便喫了。須是細嚼教爛、則滋味自出、方始識得這箇是甜是苦是甘是辛、始為知味。」また次の第三五条を参照。

問賀孫、讀大學如何。曰、稍通、方要讀論語。曰、且未要讀論語。大學稍通、正好著心精讀。前日讀時、見得前、未見得後面、見得後、未接得前面。今識得大綱統體、正好熟着。如喫果實相似、初只恁地硬咬嚼。待嚼來嚼去、得滋味、如何便住却。讀此書功深、則用博。昔和靖見伊川、半年方得大學・西銘看。今人半年要讀多少書。某且要人讀此、是如何。緣此書却不多、而規模周備。凡讀書、初一項須著十分工夫了、第二項只費得九分工夫、第三項便只費六七分工夫。少刻讀漸多、自貫通。他書自不著得多工夫。賀孫

## 〔校勘〕

- 「曰稍通」「曰」、朝鮮古写本は「答云」に作る。
- 「曰且未要讀論語」「曰」、朝鮮古写本は「先生曰」に作る。
- 「和靖」朝鮮古写本は「尹和靖」に作る。
- 「是如何」朝鮮古写本は「是如此」に誤る。

## 〔訳〕

(先生が)賀孫に「『大学』を読んでどんな具合かね」と聞かれた。私が「すこし通じましたので、『論語』を読もうとしてるところです」と答えたが、(先生が)言われた。「とりあえず『論語』を読まないようにしなさい。『大学』にすこし通じたのだから、今こそ心懸けて精讀するのに最適だ。先日読んだ時には、この書の前の部分を見て後ろ

の部分を見なかったり、後ろの部分を見て前の部分と繋がらなかったりする。今『大学』の大筋や全体を把握したのだから、熟読するのに最適だ。あたかも果物を嚼むように、初めはただこのようにひたすら嚼むだけだが、よく咀嚼しているうちに、味が出てきたら、どうして途中でやめることができようか。この書物を読む際にかけた手間や時間が多ければ多いほど、それに伴う効用が広がるのだ。昔、尹和靖は伊川に会って師事したが、半年経ってようやく『大学』・『西銘』を授けられ読むことができた。しかし、近頃の人は半年の間、どれほど多くの書物を読もうとしているのだろう。私が人に対しまずこの書物(『大学』)を読むようにと要求しているのは、なぜかというところ、この書物の分量が少ない割りには、学問をなす骨組みが何もかも揃っているからだ。読書する場合は、最初の段階には十割の工夫を用いなければならぬが、第二段階ではただ九割の工夫を用いればよいのだ。(さらに)第三段階に入ると、ただ六、七割の工夫を用いればよいのだ。しばらくして、読む回数が段々多くなるにつれて、自ずから全書を通ずるようになる。(そうなれば)他の書物を読む際にも、自然にたくさんの工夫は要らなくなるのだ。」葉賀孫録

## 〔注〕

(一)「昔和靖見伊川、半年方得大學・西銘看」和靖(一〇七一—一一四二)は尹焯、字彦明、号は和靖、伊川の門人である。また、「二程外書」卷二二、「先生曰、『某纔十七八歳、見蘇季明教授。時某亦習畢業、蘇曰、「子修畢業、得状元及第便是了也。」先生曰、「不敢

望此。」蘇曰、「子謂狀元及第便是了否。唯復這學更有裏。」先生疑之、日去見蘇、乃指先生見伊川。後半年、方得「大學」・「西銘」看。」なお、この「二程外書」の記述は「近思錄」卷二「爲学」にも収められている。

〔関連記録〕

【語類】卷九五、一七六条、沈側録（VI 2458）「昨夜説尹彦明見伊川後、半年方得大學・西銘看。此意思也好、也有病。蓋且養他氣質、淘漢去了那許多不好底意思。如學記所謂「未卜禘、不視學、游其志也」之意。此意思固好、然也有病者、蓋天下有多少書、若半年間都不教他看一字、幾時讀得天下許多書。所以尹彦明終竟後來工夫少了。…」

36条

諸生看大學未曉、而輒欲看論語者、責之曰。公如喫飯一般、未曾有顆粒到口、如何又要喫這般、喫那般。這都是不會好生去讀書。某嘗謂人、看文字曉不得、只是未曾著心。文字在眼前、他心不會著上面、只是恁地略綽將過、這心元不曾伏殺在這裏。看他只自恁地豹跳、不肯在這裏理會、又自思量做別處去。這事未了、又要尋一事做、這如何要理會得。今之學者看文字、且須壓這心在文字上。逐字看了、又逐句看。逐句看了、又逐段看、未有曉不得者。 賀孫

〔校勘〕

- 「輒」和刻本作「輒」。
- 「又要尋一事做」 萬曆本、和刻本同。成化本、朝鮮古写本、朝鮮整版本作「又要別尋一事做」。
- 「今之學者」 萬曆本、和刻本同。成化本、朝鮮古写本、朝鮮整版本無「之」字。

〔訳〕

学生たちの中の、「大學」を読んでまだよくわかっていないのに、むやみに『論語』を読もうとする輩について、このように叱責して言われた。「きみは、ごはんをたべるときと同じで、まだ米粒が口にはいつてもいないのに、どうしてこれを食べようあれを食べようというのだ。これはまったく用心深く読書をしてこなかったからだ。わたしはかつて人に話したことがあるのだが、文章を読んで理解できないのは、ただ用心深く読んでいないからだ。文字は目の前にあるのだが、読む人の心がそこにびったり寄り添っていないのであり、ただひたすらそんなふうにいるにいいかげんに読み飛ばしていく。その心は読んでいるその箇所におしとどめきっていないのだ。読むときにひたすらあんなふうにならぬようにとびはねてしまって、まさにこの部分に取り組もうとせず、さらに別のところへ行こうとする。ここが終わっていないのに、更にもう一つ別のことをしようとする。そんなことでどうして自分のものにするなどできよう。今の学ぶ者が文章を読むときは、まずこの心を文章の上に据えて一文字ごとに読み進めたら、さらに一句ご



とに読み進め、一句一句を読み終えたら、さらに一段一段読み進める  
というようにやってみれば、わからない所などなくなるはずだ。」葉  
賀孫

〔注〕

(1) 四書を読む順序については、本巻一条 (I 249) を参照。

(2) 「著心」『語類』卷一〇一、一〇三条 (VII 2595) 「五峰諸子不著心  
看文字、恃其明敏、都不虚心下意、便要做大。」

(3) 「這都是不會好生去讀書」「不會」については、『語類』卷  
一二七、一一條、葉賀孫錄 (VIII 3045) 「當時濮廟之爭、都是不會好好  
讀古禮。」を参照。(「會」を諸本は「争」に作るが、朝鮮古写本が「會」  
に作るのに従う。) 「好生」は、『考文解義』に「生、語辭。如怎生  
甚生之生。好、猶善也。謂不能善讀書也」とする。

(4) 「略綽」朱子は才氣走った人間の読書の陥りやすい弊害として  
この言葉を使っている。『語類』卷一一六、三九條 (VII 2800) 「某嘗  
喜那鈍底人、他若是做得工夫透徹時、極好。却煩惱那敏底、只是略  
綽看過、不會深去思量、當下說、也理會得、只是無滋味、工夫不耐久。」  
(5) 「伏殺」この「伏」は、最終行に出てくる「壓這心」の「壓」  
と通じる言葉で、「おしとどめる」と訳した。なお以下の用例を参照。  
『語類』卷三四、一六九條、葉賀孫錄 (III 895) 「也須且教讀書、漸漸  
壓伏這箇身心教定、方可與說。」

(6) 「豹跳」『語類』卷五三、七七條、楊道夫錄 (IV 1296) 「孟子大段  
見得敏、見得快、他說話、恰似箇獅子跳躍相似。且如他說箇惻隱之心、

便是仁之端、羞惡之心、便是義之端、只他說在那裏底便是。似他說時、  
見得聖賢大段易做、全無許多等級。所以程子云、孟子才高、學之無  
可依據。」なお、禪においてはこの「跳」は肯定的に使われる。以  
下の用例を参照。『雲臥紀譚』卷二 (卅續藏 86-676b) 「謙 (謙開善)  
後歸建陽、結茅于仙洲山。聞其風者、悅而歸之。如會侍郎天游、呂  
舍人居仁、劉寶學彦脩、朱提刑元晦以書牘問道、時至山中。有答元晦、  
其略曰、：如合眼越黃河。莫問越得過越不過。盡十二分氣力打一越。  
若真箇越得這一越、便百了千當也。若越未過、但管越、莫論得失、  
莫顧危亡。勇猛向前、更休擬議。若遲疑動念、便沒交涉也。」

(7) 「做別處去」他所へ行く。この場合の「做」は「到」と同義か。  
『語類』卷三三、八一條、葉賀孫錄 (III 825) 「先難、是心只在這裏、  
更不做別處去。如上嶺、高峻處不能得上、心心念念只在要過這處、  
更不思量別處去。過這難處未得、便又思量到某處、這便是求獲。」

37 條

子淵說大學。曰、公看文字、不似味道只就本子上看、看來看去、久  
之浹洽、自應有得。公便要去上面生意、只討頭不見。某所成章句或問  
之書、已是傷多了。當初只怕人曉不得、故說許多。今人看、反曉不得。  
此一書之間、要緊只在格物兩字。認得這裏着、則許多說自是閑了。初  
看須用這本子、認得要害處、本子自無可用。某說十句在裏面、看得了、  
只做一句說了方好。某或問中已說多了、却不說到這般處。看這一書、  
又自與看語孟不同。語孟中只一項事是一箇道理。如孟子說仁義處、只

就仁義上說道理。孔子答顏淵以克己復禮、只就克己復禮上說道理。若大學、却只統說。論其功用之極、至於平天下。然天下所以平、却先須治國。國之所以治、却先須齊家。家之所以齊、却先須修身。身之所以修、却先須正心。心之所以正、却先須誠意。意之所以誠、却先須致知。知之所以至、却先須格物。本領全只在這兩字上、又須知如何是格物。許多道理、自家從來合有不合有。定是合有。定是人人都有。人之心便具有許多道理。見之於身、便見身上有許多道理。行之於家、便是一家之中有許多道理。施之於國、便是一國之中有許多道理。施之於天下、便是天下有許多道理。格物兩字、只是指箇路頭、須是自去格那物始得。只就紙上說千千萬萬、不濟事。賀孫

## 〔校勘〕

- 「子淵說大學曰」 成化本、萬曆本、朝鮮整版本、和刻本同。朝鮮古写本「曰」上有「答」字。
- 「公便要去」 成化本、萬曆本、朝鮮整版本、和刻本同。朝鮮古写本「便」作「使」。
- 「某所成章句或問之書」 成化本、萬曆本、朝鮮整版本、和刻本同。朝鮮古写本「章句」上有「大學」二字。
- 「認得這裏着」 中華書局本、和刻本「着」作「看」。萬曆本又作「看」。成化本、朝鮮整版本、朝鮮古写本作「着」。今據三本改作「着」。
- 「認得要害處」 成化本、萬曆本、朝鮮整版本、和刻本同。朝鮮古写本無「害」字。

## 〔訳〕

子淵が大学について語った。先生がおっしゃった。「君の文章の読み方は、葉味道君の、ただひたすら書物に密着して読み、繰り返し読んで、時間の経過とともに自身に貫通してしみとおるようになれば、自ずと自分のものになる、という読み方とは異なっている。君はといえばそこに（本文の持たぬ）別の解釈を持ち込んでおり、それでは手がかりがつかめぬ。私が作った『大学章句』『大学或問』という書物は、多く書きすぎたという欠点がある。最初はただ人がわかってくれないのではと思ったので多くの言葉を費やした。ところが実際に読まればみると、かえってわかりにくくなっている。この書物においては、肝要な点はただ「格物」の二文字にあり、このところがわかれば、多くの言葉はおのずから不用なものとなる。初めて読むときには、この『大学章句』を使うのがよい。そして要点がつかめたら、この本はもう無用だ。わたしがここで十句で説明していることは、読み終わったら、一句で言えなければならぬ。わたしは『或問』のなかで多くの言葉を費やしたが、このことには説き及んでいない。この『大学』という本を読むときは、当然『論語』や『孟子』を読む読み方とは違ってくる。『論語』『孟子』は、一つの事柄に一つの道理が備わる。たとえば孟子が仁義を説くところは、ただ仁義について道理が説かれる。『論語』のなかで孔子が顔淵に「克己復礼」と答えたときには、ただ「克己復礼」について道理が説かれているのだ。『大学』はといえば、そうではなく、まとめて説いており、その功用のきわまるところを論じて、平天下という段階にまで説き及んでいる。しかしながら、天下が

平らかになるためにはまず国を治めねばならず、国が治まるためにはまず家を齊えねばならず、家が齊うためにはまず身を修めねばならず、身が修まるためにはまず心を正さねばならず、心が正されるためにはまず意を誠にせねばならず、意が誠であるためにはまず知を致さねばならず、知が至るためにはまず格物せねばならない。根本はすべてただこの格物の二文字にあるのであり、そしてさらに、格物とはいかなることかを知らねばならない。多くの道理は自分自身に本来備わっているべきものなのかそうではないのか。これは、必ず備わっているべきものであり、必ずそれぞれの人が備えているものなのだ。人の心には多くの道理が具有されている。道理を自分自身の行動に具現させれば、自分自身に多くの道理を見いだすことが出来るし、道理を家について行えば、一家の中に多くの道理があることがわかるし、国に施せば一国の中に多くの道理があることがわかり、天下に施せば天下に多くの道理があることがわかる。「格物」の二文字は、まさにこの道筋を指すのであり、是非とも自らその事物にいたるといふ取り組みをせねばならないのだ。ただ紙の上であれこれと説いたところで、なんにもならぬ。」 葉賀孫録

※三浦國雄『朱子語類抄』一六九頁以下に本条の訳注が収録されている。

〔注〕

(1) 「子淵」 次章にも現れる林子淵。名は不詳。葉賀孫の記録にの

み現れる。

(2) 「生意」 「生意」が否定的な意味で使われるものとして、以下の用例がある。『語類』卷一、一〇五条、曾祖道録 (I 191) 「大凡人讀書、且當虚心一意、將正文熟讀、不可便立見解。」

(3) 「討頭不見」 『語類』卷八、一九条、葉賀孫録 (I 131) 「或問、氣質之偏、如何救得。曰、才説偏了、又著一箇物事去救他偏、越見不不正了、越討頭不見。」

(4) 「統説」 『語類』卷六四、四三条、萬人傑録 (IV 708) 「自誠明、性之也。自明誠、充之也。轉一轉説。天命之謂性以下、舉體統説。」「語類」卷七七、一六条、晏淵録 (V 108) 「和順道德而理於義、是統説底。窮理盡性至命、是分説底。」

(5) 「傷多」 多くの言葉を費やした『論孟精義』に対して、一文字が十字百字に当たる『論孟集注』として語られる部分がある。『語類』卷一九、七六条、記録者名欠 (II 440) 「且説精義は許多言語、而集注能有幾何言語、一字是一字、其間有一字當百十字底、公都把做等閑看了。」

(6) 「要害處」 賈誼「過秦論」良將勁弩、守要害之處。」

(7) 「克己復禮」 『論語』顔淵「顔淵問仁。子曰、克己復禮爲仁。一日克己復禮、天下歸仁焉。爲仁由己、而由人乎哉。」

(8) 「濟事」 『春秋左氏傳』莊公十四年「若皆以官爵行路勸貳、而可  
以濟事、君其若之何。」

答林子淵說大學、曰、聖人之書、做一樣看不得。有只說一箇下工夫規模、有首尾只說道理。如中庸之書、劈初頭便說天命之謂性。若是這般書、全著得思量義理。如大學、只說箇做工夫之節目、自不消得大段思量、纔看過、便自曉得。只是做工夫全在自家身上、却不在文字上。文字已不著得思量。說窮理、只就自家身上求之、都無別物事。只有箇仁義禮智、看如何千變萬化、也離這四箇不得。公且自看、日用之間如何離得這四箇。如信者、只是有此四者、故謂之信。信、實也、實是有此。論其體、則實是有仁義禮智。論其用、則實是有惻隱、羞惡、恭敬、是非、更假偽不得。試看天下豈有假做得仁、假做得義、假做得禮、假做得智。所以說信者、以言其實有而非偽也。更自一身推之於家、實是有父子、有夫婦、有兄弟。推之天地之間、實是有君臣、有朋友。都不是待後人旋安排、是合下元有此。又如一身之中、裏面有五臟六腑、外面有耳目口鼻四肢、這是人人都如此。存之爲仁義禮智、發出來爲惻隱、羞惡、恭敬、是非。人人都有此。以至父子兄弟夫婦朋友君臣、亦莫不皆然。至於物、亦莫不然。但其拘於形、拘於氣而不變。然亦就他一角子有發見處看、他也自有父子之親。有牝牡、便是有夫婦。有大小、便是有兄弟。就他同類中各有群衆、便是有朋友。亦有主腦、便是有君臣。只緣本來都是天地所生、共這根蒂、所以大率多同。聖賢出來撫臨萬物、各因其性而導之。如昆蟲草木、未嘗不順其性。如取之以時、用之有節。當春生時、不斫夭、不覆巢、不殺胎。草木零落、然後入山林。獺祭魚、然後虞人入澤梁。豺祭獸、然後田獵。所以能使萬物各得其所者、惟是先

知得天地本來生生之意。 賀孫

〔校勘〕

○「如大學只說」 成化本、萬曆本、朝鮮整版本、和刻本同。朝鮮古寫本「只」上有「且」字。

○「在自家身上」 中華書局本「己」作「心」（賀瑞麟「朱子語類正訛」

「身上」、原作己、據周本改。） 成化本、萬曆本、朝鮮古寫本、朝鮮整版本、和刻本共作「己」。今據諸本改作「己」。

○「已不着得思量」 成化本、萬曆本、朝鮮整版本、和刻本同。朝鮮古寫本「思量」作「意思」。

○「實是有君臣」 成化本、萬曆本、和刻本同。朝鮮古寫本、朝鮮整版本「臣」上有「有」字。朝鮮整版本考異「有臣、一無有」。

○「各因其性而導之」 成化本、萬曆本、朝鮮整版本、和刻本同。朝鮮古寫本「導」作「道」。

○「所以能使萬物各得其所者」 成化本、萬曆本、朝鮮整版本、和刻本同。朝鮮古寫本無「能」字。

〔訳〕

林子淵の『大学』の説明に対して言われた。「聖人の書物は、一様にみなして読んではいけない。一つの工夫の枠組みだけを説くものもあれば、最初から最後までひたすら道理を説くものもある。たとえば『中庸』という書物は、開巻劈頭に「天の命ずるをこれ性と謂う」とあって、このような書物は、すべて義理を考へることが必要とされるもの

である。対して『大学』は、ただこの工夫をする条目を説くのみであり、じっくり考えこむことが必要ではなく、読みさえすればわかるというたぐいのものである。この『大学』の工夫は、まったく自己の心身においてなされるものであり、文章の上になされるものではない。この『大学』の文章は、思考することを求めるものではないのだ。窮理を説いてはいるのだが、それもただ自分自身に即して求めるべきものであり、そのほかは何かあるわけではない。ただこの仁義礼智があるだけで、どのように千変万化しようとも、やはりこの四つを離れることは出来ない。君、ちょっと考えてみたまえ、日々の出来事のなかで、どうしてこの四つから離れることなどありえようか。信については、ただこの四つがあるから、そのことを信というのだ。信とは実である。信とは本当にこの四つがあることなのだ。信の体を問題にすれば、それは真実として仁義禮智があることであるし、用を問題にすれば、それは真実に惻隱羞惡恭敬是非があることであり、かりそめにいつわることとはできないのだ。考えてもみたまえ、天下にかりそめに仁をなし得たとか、かりそめに義をなし得たとか、かりそめに禮をなし得たとか、かりそめに智をなし得たとかいうことなどあるだろうか。そして信ということが説かれるのは、それらが真実にあるのであり、いつわりのものではない、ということを言うためのものだ。そしてさらにこのことを自分自身から家に推し及ぼしていくならば、本当に父子があり、夫婦があり、兄弟がある。これを天地に推し及ぼせば、本当に君臣があり、朋友がある。これらは後の人がその時になって按排してそうなっているわけでは決してなく、最初からともとうこうなっていたのだ。

また自分の身体について言うなら、からだのなかに五臟六腑があり、外には耳目口鼻四肢がある。これらはどの人もみんなこのようになっている。内面に存在するものとして仁義禮智があり、外に発現すれば惻隱羞惡恭敬是非となる。これは人はみなこのようになっているのだ。父子兄弟夫婦朋友君臣についても、またみなこのようでないものはない。人間以外の動物についても、みなそのようになっている。ただ、形や気というものに影響を受けざるを得ず、氣質が変化しない。しかしながら、その一隅においてもあらわれてくるところについて見ると、そこには当然父子の親がある。牡と牝があるのだから、夫婦がある。大きいのと小さいのがいるのだから兄弟がある。同類の中でそれぞれ群れが生じる、だから朋友がある。そしてそこには領袖ができる、だから君臣がある。このことも、まったく本来みな天地が作り出したものなのであり、この根っこをみな共有している。だから世界の万物はおおよそそのところでみな同じことになるのだ。聖賢があらわれて、万物を撫育するにも、おのおのその性にしたがって導いたのであり、昆虫草木について言えば、その性にしたがわかないことなどない。たとえば適切な時期に収穫し、節度をもって用いる。春の生長の時には、うまれたばかりの動物は殺さない、巢はこわさない、みごもった動物は殺さない。草木の葉が枯れて地面に落ちてから、はじめ山林に入つて木を切る。カワウソが魚を祭ったあとに山澤の官である虞人は沢に入って筮を仕掛けて魚を取り始め、やまいぬがけものを祭ったあとで狩をはじめめる。万物がそれぞれの本来のありようを実現できるようにするためには、なによりまずこの天地本来の生生の意と

いうものを知ることだ。」葉賀孫録

〔注〕

(1) 「看如何千變萬化」「看+疑問詞」で「たとえ……でも」の意。田中謙二『朱子語類外任編訳注』一八頁、一〇八頁。

(2) 「信實也」「論語」泰伯「正顔色斯近信矣」集注「信、實也」。ただし、信を實とよむのは、古い訓詁はなく、莊子成玄英疏ぐらいしかさかのばれない。通常は、毛詩鄭箋、白虎通の「誠也」。「語類」卷二〇、一二七条、黄榦録(II 176)「仁則爲慈愛之類、義則爲剛斷之類、禮則爲謙遜、智則爲明辨、信便是真箇有仁義禮智、不是假、謂之信。」なお、『文集』卷七四「玉山講義」にも同趣の言葉があるのを参照。

(3) 「論其用」「大學或問」「今且以其至切而近者言之、則心之爲物、實主於身、其體則有仁義禮智之性、其用則有惻隱羞惡恭敬是非之情、渾然在中、隨感而應。」なお、言うまでもなくこの部分は『孟子』の所謂「四端」を意識する。

(4) 「旋按排」その時になって按排して。三浦國雄『朱子語類抄』三九八頁参照。

(5) 「存之」「語類」卷六、一八条、甘節録(I 101)「存之於中爲理、得之於心爲徳、發見於行事爲百行。」

(6) 「拘於形、拘於氣」「語類」卷四、一一條、黄榦録(I 38)「問氣質有昏濁不同、則天命之性有偏全否。曰、非有偏全。謂如日月之光、若在露地則盡見之、若在蔀屋之下、有所蔽塞、有見有不見。昏濁者

是氣昏濁了、故自蔽塞、如在蔀屋之下。然在人則蔽塞有可通之理。至於禽獸、亦是此性、只被他形體所拘、生得蔽隔之甚、無可通處。至於虎狼之仁、豺獺之祭、蜂蟻之義、却只通這些子、譬如一隙之光。至於獼猴、形狀類人、便最靈於他物、只不會說話而已。到得夷狄、便在人與禽獸之間、所以終難改。」

(7) 「發見處」理の発現する場。「語類」卷一、一二条、曾祖道録(I 3)「或問理在先氣在後。曰、理與氣本無先後之可言、但推上去時、却如理在先氣在後相似。又問、理在氣中發見處如何。曰、如陰陽五行錯綜不失條緒、便是理。若氣不結聚時、理亦無所附著。故康節云、性者道之形體、心者性之郭郭、身者心之區宇、物者身之舟車。」「語類」卷五、六〇条、楊道夫録(I 30)「景紹問心性之別。曰、性是心之道理、心是主宰於身者。四端便是情、是心之發見處。」

(8) 「父子之親」「孟子」滕文公上「聖人有憂之、使契爲司徒、教以人倫、父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信。」「荀子」非相「夫禽獸爲父子而無父子之親、有牝牡而無男女之別。」「語類」卷六〇、八五条、葉賀孫録(IV 138)「萬物皆備於我矣、反身而誠、樂莫大焉。萬物不是萬物之迹、只是萬物之理、皆備於我。如萬物莫不有君臣之義、自家這裡也有。萬物莫不有父子之親、自家這裏也有。萬物莫不有兄弟之愛、自家這裡也有。萬物莫不有夫婦之別、自家這裡也有。是這道理本來皆備於吾身、反之於吾身、於君臣必盡其義、於父子必盡其親、於兄弟必盡其愛、於夫婦必盡其別、莫不各盡其當然之實理、而無一毫不盡、則仰不愧俯不作、自然是快活若是。反之於身、有些子未盡、有些子不實、則中心愧怍、不能以自安、如何

得會樂。」

(9) 「撫臨」『史記』卷一〇、孝文本紀「以不敏不明而久撫臨天下、朕甚自愧。」

(10) 「因其性」『河南程氏遺書』卷二二上「又問、祭祀於聖人之制作以教人否。曰、非也。祭先本性、如豺有祭、獺有祭、鷹有祭、皆是天性。豈有人而不如物乎。聖人因而裁成禮法、以教人耳。」〔論語精義〕作「聖人因其性而裁成禮法。」

(11) 「取之以時」『論語』學而「子曰、道千乘之國、敬事而信、節用而愛人、使民以時。」『新書』禮「取之有時、用之有節。」

(12) 「當春生時」『史記』太史公自序「夫春生夏長、秋收冬藏、此天道之大經也。」

(13) 「不殊天云々」『禮記』王制「獺祭魚、然後虞人入澤梁。豺祭獸、然後田獵。鳩化為鷹、然後設罝羅。草木零落、然後入山林。昆蟲未蟄、不以火田。不麝（積文・麝本又作麝、音迷）、不卵、不殺胎、不殊夭（鄭注・殊、斷殺）、不覆巢（鄭注・覆、敗也）。

(14) 「萬物各得其所」『論語』子罕「子曰、吾自衛反魯、然後樂正、雅頌各得其所。」『戰國策』秦策三「萬物各得其所、生命壽長、終其年而不夭傷。」

(15) 「生生」『周易』繫辭上傳「生生之謂易。」

39条

問大學。曰。看聖賢說話、所謂坦然而大路然。緣後來人說得崎嶇、

所以聖賢意思難見。 賀孫

〔校勘〕

○朝鮮古写本は「緣後來人說得崎嶇」の「緣」の上に「止」の字がある。

〔訳〕

『大学』について質問した。先生「聖賢のことをば読むと、いわゆる坦然として大道の如くである（つまり、その説かれた道理は平易明白なものだ）。後世の人々がそれを難しく説いたのが原因で、聖賢の真意がわかりにくくなったのだ。」 葉賀孫録

〔注〕

(1) 「聖賢說話」つまり「聖賢之書」に書かれている聖賢の言葉であるが、具体的には経と伝を指すであろう。『語類』卷二〇、四一条、葉賀孫録（VII 2894）「他所見既如彼、便将聖賢說話都入他腔裏面、不如此、則他所學無據。這都是不曾平心讀聖賢之書、只把自家心下先頓放在這裏、却捉聖賢說話壓在裏面。」『大学章句』序「然後古者大學教人之法、聖賢傳之指、粲然復明於世。雖以熹之不敏、亦幸私淑而與有聞焉。」

(2) 「坦然而大路然」『尚書』序に「帝王之制、坦然明白、可舉而行。」とあり、『孟子』告子下に「曰、夫道若大路然、豈難知哉。」とある。「坦然而大路然」は恐らく朱子とその弟子の間ではよく言われている語であろうと推測する。「大路」は理、道理が平易なものを喩える。

【語類】卷一一三、二六条、訓輔廣（VII 2747）「聖人教人如一條大路、平平正正、自此直去、可以到聖賢地位。」【語類】卷一一四、一二条、訓李方子（VII 2756）「天下自有一箇道理在、若大路然。聖人之言、便是一箇引路底。」【語類】卷一五、一〇〇条、沈憫錄（I 302）「如人夜行、雖知路從此去、但黑暗、行不得。所以要得致知。知至則道理坦然明白、安而行之。」

(3) 「聖賢意思」 經と伝に込められている聖賢の心である。【語類】卷一二〇、八一一条、楊道夫録（VII 29056）「非不讀書、但心有所溺、聖賢意思都不能見。科擧也是奪志。今既免此、亦須汲汲於學。為學之道、聖賢傳所以告人者、已竭盡而無餘、不過欲人存此一心、使自家身有主宰。」

40条

聖賢形之於言、所以發其意。後人多因言而失其意、又因注解而失其主。凡觀書、且先求其意、有不可曉、然後以注解通之。如看大學、先看前後經亦自分明、然後看傳。 可學

〔校勘〕

○「凡觀書」 萬曆本は「觀」を「覘」に作る。

〔訳〕

聖賢がことばにあらわすのは、その心中を伝えるためである。後の

人たちは、そのことばにとらわれて聖賢の心を見失い、さらに注解を頼るが故に主旨をも見失ってしまったことが少なくない。およそ書物を読むには、まずは聖賢の心を求めるのだ。分らないところがあった、はじめて注解で意味を通じさせる。例えば「大学」を読む場合でも、まず前後の経を読んでも自ずとわかるから、それから伝を読めばいい。 鄭可學録

〔注〕

(1) 「聖賢形之於言、所以發其意。」言葉にとらわれてそこに込められた意味、意図を見失うようでは本末転倒である、との趣旨。『莊子』雜篇「外物」「荃者所以在魚、得魚而忘荃。蹄者所以在兔、得兔而忘蹄。言者所以在意、得意而忘言。吾安得夫忘言之人而與之言哉。」「發其意」は意味・意図（考え・心）を伝えること。【語類】卷六〇、二二一条、潘時舉録（IV 1445）「至之間孔子登東山而小魯一節。曰。此一章、如詩之有比興。比者、但比之以他物、而不說其事如何。興、則引物以發其意、而終說破其事也。」「孟子」盡心上「孟子曰、孔子登東山而小魯、登太山而小天下。」

(2) 「亦自分明」 注解がなくても自ずからわかること。【語類】卷七八、一〇三条、輔廣録（V 1995）「女子時觀厥刑于二女」、皆堯之言。【釐降二女子于鴻汭、嬪于虞」、乃史官之詞。言堯以女下降於舜爾。【帝曰、欽哉」、是堯戒其二女之詞、如所謂「往之女家、必敬必戒」也。若如此說、不解亦自分明。但今解者便添入許多字了說。」「尚書」堯典「女子時觀厥刑于二女、釐降二女子于鴻汭、嬪于虞。帝曰、欽哉。」「孟



子「滕文公下」「往之女家、必敬必戒。」

41条

大學諸傳、有解經處、有只引經傳贊揚處。其意只是提起一事、使人讀著常惺惺地。 道夫

〔校勘〕

○成化本、萬曆本、和刻本は「著」を「着」に作る。

〔訳〕

『大学』のもろもろの伝には、経を解釈するものもあれば、ただ経や伝を引用して賛嘆発明するものもある。その狙いは、ただ、一つの事柄を提示することによって、人々に常によりありありとイメージを浮かべながら読むようにさせることに他ならない。 楊道夫録

〔注〕

(1)「有解經處、有只引經傳贊揚處」『大学章句』伝三章における「詩經」の引用のうち、「邦畿千里、惟民所止。」(商頌「玄鳥」)、「烝蠻黃鳥、止于丘隅。」(小雅「綿蠻」)、「穆穆文王、於緝熙敬止。」(大雅「文王」)は、いずれも經文の「止於至善」を解釈するものであるが、「瞻彼淇澳、綠竹猗猗。…」(衛風「淇澳」)や「於戲前王不忘」(周頌「烈文」)は、『章句』朱注に「此兩節詠歎淫泆、其味深長、

當熟玩之。」とあるように、「明明徳」「新民」において至善に止まることが効験を賛嘆発明したものであろう。

(2)「提起」明示する、或いは示唆することである。また「心を引き締める」という時の「引き締める」を意味する場合もある。『語類』卷一一五、二六条、楊驥録(VII 277)「敬只是提起這心、莫教放散、恁地、則心便自明。」

(3)「常惺惺」「敬」概念が絡む語であり、常に心を目覚めさせておくこと。19条の注(3)を参照。

42条

伊川舊日教人先看大學、那時未有解說、想也看得鶻突。而今看注解、覺大段分曉了。只在子細去看。 賀孫

〔校勘〕

○「而今看注解」成化本、朝鮮古写本、朝鮮整版本は「而今有注解」に作る。朝鮮整版本考異「今有、有一作看」

〔訳〕

程伊川(程頤、号は伊川)が前人にまず『大学』を読めと教えたが、その時は解説がまだなかったため、曖昧に読んでいただろうと思う。今は注解を読めば、非常に分かりやすくなった。ただ綿密に読んでいけばよいのだ。 葉賀孫録

〔注〕

- (1) 「伊川舊日教人先看大學」『河南程氏遺書』卷二二上、一条「棟初見先生、問。初學如何。曰。入德之門、無如大學。今之學者、頼有此一篇書存。其他莫如論・孟。」一条注(1) 参照
- (2) 「鶻突」『朱子語類』訳注 卷十(十一) (汲古書院) 頁六六「鶻突」は、『混沌』にも通ずる疊韻の語で現代語の「胡塗」に同じ。…ほんやりしていることを言う。」

- (3) 「覺大段分曉了」「大段」は、『朱子語類』訳注 卷十(十一) (汲古書院) 頁二七に「『大段』は、副詞。「非常に」の意。」とあり、三浦國雄『朱子語類抄』一一八頁に「『大段』は「大いに、非常に」の意の俗語、『語類』の常用語のひとつ。」とあり、田中謙二『朱子語類外任篇訳注』(前掲、一一三頁)には「『大段』大いに。宋元期の俗語、語類に習用される。」とある。「分曉」は、田中謙二『朱子語類外任篇訳注』(前掲、一五八頁)に「『分曉』はつきりする。」とある。

43条

看大學、且逐章理會。須先讀本文、念得、次將章句來解本文、又將或問來參章句。須逐一令記得、反覆尋究、待他淡洽。既逐段曉得、將來統看溫尋過、這方始是。須是靠他這心、若一向靠寫底、如何得。又曰。只要熟、不要貪多。 道夫

〔校勘〕

- 成化本は「次將章句來解本文」の「解」字が欠落。
- 朝鮮古写本は「將來統看溫尋過」の「將」の上に「却」字がある。
- 「不要貪多」 萬曆本、朝鮮古写本、和刻本は「不要多貪」に作る。
- 朝鮮整版本考異「貪多、一作多貪」

〔訳〕

「大學」を読むには、一章ずつ取り組むべきだ。まずは本文を読み、口で読み上げたら、次は「大學章句」で本文を解釈し、更に「大學或問」で「大學章句」と付き合わせる、という段取りを踏まなければならぬ。一つずつ覚え、繰り返し奥義を探求して、その道理が身心にすつきりしみこむまで努力するのだ。既に段を追って分かってきたところで、全体を通覧してじっくり反芻してこそよいのだ。学ぶ者は是非とも自分のこの心をこそ拠り所として読むべきであって、もしひたすら書かれた文字に頼っているならば、いいはずがない。」またおっしゃった。「とにかくじっくり読むことだ。欲張ってはいけない。」 楊道夫録

〔注〕

- (1) 「念得」 口で読み上げること。『語類』卷五九、八八条、輔廣録(IV 1399)「廣云。如童蒙誦書、到氣昏時、雖讀數百遍、愈念不得。及到明早、又却自念得。此亦可見平旦之氣之清也。曰。此亦只就氣上說。」『朱子語類』訳注 卷十(十一) (汲古書院) 頁四八「一般に『語類』では、『看』と『念』とを、『目で読む』と『口に出して

讀む』とに使い分けている。」音読することの効用については以下を参照。『語類』卷一〇、六六条、沈憫録（I 170）「讀書之法、讀一遍了、又思量一遍。思量一遍、又讀一遍。讀誦者、所以助其思量、常教此心在上面流轉。」

(2) 「須逐一令記得」朱子は読書法として暗誦するまで熟読することを推奨した。『語類』卷一〇、八三条、李方子録（I 173）「看了一遍、又重重看過、一齊記得、方是。」

(3) 「尋究」つまり「推尋究竟」である。とどのつまり、究極を探究すること。『語類』卷九、一九条、輔廣録（I 150）「居敬是箇收斂執持底道理、窮理是箇推尋究竟底道理。」

(4) 「溫尋」『朱子語類』詠注 卷十〜十一（汲古書院）頁二〇五「溫尋」はじっくり反芻すること。」

(5) 「如何得」現代語の「怎么行」に同じ。『語類』卷八、五〇条、童伯羽録（I 136）「大抵為學雖有聰明之資、必須做遲鈍工夫、始得。既是遲鈍之資、却做聰明底様工夫、如何得。」

(6) 「貪多」多読を戒める言葉は『語類』卷一〇、一一（「讀書法」上下）等にも多数見られる。『語類』卷一〇、四〇条、張洽録（I 166）「讀書不可貪多、且要精熟。如今日看得一板、且看半板、將那精力來更看前半板、兩邊如此、方看得熟。直須看得古人意思出、方好。」など。

#### 44条

聖人不令人懸空窮理、須要格物者、是要人就那上見得道理破、便實。只如大學一書、有正經、有注解、有或問。看來看去、不用或問、只看注解便了、久之、又只看正經便了、又久之、自有一部大學在我胸中、而正經亦不用矣。然不用某許多工夫、亦看某底不出、不用聖賢許多工夫、亦看聖賢底不出。 大雅

〔校勘〕

○「有注解」成化本、萬曆本、朝鮮整版本、和刻本は「有解」に作る。

〔訳〕

聖人が人々に事物を離れて抽象的に「理を窮める」ことをさせず、必ず「物に格る」ことを要求するのは、人々に事物に即してその道理を見極めさせるためであり、（そうすればこそ）確実だ。例えば『大学』という書物には、経があり、注解があり、『或問』がある。繰り返し読めば、『或問』を読まなくて注解だけを読めば十分だ。日にちが経つと、経だけを読めば十分だ。更に日にちが経つと、一冊の『大学』が自然に私の胸の中にあつて、経さえも読まなくてよいのだ。しかし、私の多くの実践を实地にやらなければ、私の（説いた）道理を見出せないし、聖賢の多くの実践を实地にやらなければ、聖賢の（説いた）道理をも見出せぬ。 余大雅録

〔注〕

(1) 「懸空」 宙にぶら下がる。地に足が着かず着実性を欠く。具体性を欠いて抽象的である。しばしば「実」字と対拏される。『語類』卷一三、一三条、黄升卿録 (I 223) 「問學如登塔、逐一層登將去。上面一層、雖不問人、亦自見得。若不去實踏過、却懸空妄想、便和最下底層不會理會得。』『語類』卷一五、三〇条、廖德明録 (I 288) 「人多把這道理作一箇懸空底物。大學不說窮理、只說箇格物、便是要人就事物上理會、如此方見得實體。』『語類』卷六六、三四条、楊道夫録 (IV 1635) 「大凡人不會着實理會、則說道理皆是懸空。』

(2) 「工夫」 三浦國雄『朱子語類抄』三七頁「かりに『勉強』と訳した『工夫』という言葉は(現代朝鮮語の『工夫』はまさしく邦語の『勉強』の意)『功夫』とも表記し、当時の俗語で、時間と努力をつかう、手間ひまかける意。邦語の実践、修行、努力などの意を全て含む。』

(3) 「看く不出」 くを見出すことができない。『語類』卷九、四八条、黄義剛録 (I 135) 「或問。而今看道理不出、只是心不虛靜否。曰。也是不會去看。會看底、就看處自虛靜、這箇互相發。』『語類』卷一二〇、八五条、李閔祖録 (VII 2907) 「凡讀書須虛心、且似未識字底。將本文熟讀平看、今日看不出、明日又看。看來看去、道理自出。』三浦國雄『朱子語類抄』七八頁「『看不出』は『見出すことができな』、その反対が『看得出』。』

45条

或問。大學解已定否。曰。據某而今自謂穩矣。只恐數年後又見不穩、這箇不由自家。問中庸解。曰。此書難看。大學本文未詳者、某於或問則詳之。此書在章句。其或問中皆是辨諸家說恐未必是。有疑慮、皆以蓋言之。 淳

〔校勘〕

○朝鮮古写本は「數年後」を「數年時後」に作り、「某於或問則詳之」と「其或問中皆是辨諸家說」の「或問」を「答問」に作る。

○成化本、朝鮮古写本、朝鮮整版本は「諸家說理未必是」の「理」を「恐」に作る(朝鮮整版本考異「恐未、恐一作理」)。今、校勘によって「恐」字に改める。

〔訳〕

或る人が尋ねた。「『大学』の解釈はもう確定しましたか。」先生「私の考えでは今のところは落ち着いていと言えよう。ただ、恐らく数年後にはまた問題が出てくるだろう。これは今の自分にはどうにもならないことだ。』『中庸』の解釈について尋ねた。先生「この書は難解だ。『大学』の本文の明確でない部分は、私は『大学或問』において詳しく説いておいた。この『中庸』は『中庸章句』で解釈している。『中庸或問』の中では全て諸家の説く道理が必ずしも妥当なものではない点について弁難しておいた。疑問があるところは、すべて『蓋し』と

いう語を付けて述べておいた。」 陳淳録。

〔注〕

(1) 「不由自家」 『二程外書』 卷二二、五一条「或拳伯淳語云、人有四百四病、皆不由自家、則是心須教由自家。」 また『近思錄』 卷四、存養。僧肇『注維摩詰經』 (大正、卷三八、頁三四二a) 「是身為災百一病惱」 「肇曰。一大増損、則百一病生。四大増損、則四百四病同時俱作。故身為災聚也。」 (「是身為災百一病惱」は鳩摩羅什訳『維摩詰所説經』 「方便品」の語。)

46条

大學章句次第得皆明白易曉、不必或問。但致知、格物與誠意較難理會、不得不明辨之耳。 人傑

〔校勘〕

○成化本、朝鮮古写本、朝鮮整版本は「次第」を「次序」に作る。

〔訳〕

『大学章句』は順序がみなはっきりしていて分かりやすいから、必ず『大学或問』を読まなくてはならないということはない。ただ、致知、格物と誠意は比較的に理解しにくいものだから、これをはっきり説明せざるを得ないのだ。 萬人傑録

〔注〕

(1) 「明辨」 明らかに説明すること。『中庸章句』 第二十章「博學之、審問之、慎思之、明辨之、……」 『語類』 卷一六、一一九条、林夔孫録 (II 32) 「因説誠意章。曰。若如舊説、是使初學者無所用其力也。中庸所謂明辨、誠意章而今方始辨得分明。」

47条

子淵問大學或問。曰。且從頭逐句理會、到不通處、却看章句。或問乃注脚之注脚、亦不必深理會。 賀孫

〔校勘〕

○朝鮮古写本は「曰」を「答曰」に作る。

〔訳〕

林子淵 (名は不明) が『大学或問』について質問した。先生「とにかく最初から一句ずつ取り組んでいき、分からないところが出てきたら、『大学章句』を読むといい。一方『或問』はと言えば注釈の注釈にすぎないから、深く取り組まなくてよいのだ。」 葉賀孫録

48条

學者且去熟讀大學正文了、又子細看章句。或問未要看、俟有疑處、

方可去看。又曰。某解書不合太多、又先準備學者、為他設疑說了。他未曾疑到這上、先與說了、所以致得學者看得容易了。聖人云、不憤不啟、不悱不發。舉一隅不以三隅反、則不復也。須是教他疑三朝五日了、方始與說他、便通透。更與從前所疑慮、也會因此觸發、工夫都在許多思慮不透處。而今却是看見成解底、都無疑了。吾儒與老莊學皆無傳、惟有釋氏常有人。蓋他一切辦得不說、都待別人自去敲磕、自有箇通透處。只是吾儒又無這不說底、若如此、少間差異了。又曰。解文字、下字最難。某解書所以未定、常常更改者、只為無那恰好底字子。把來看、又見不穩當、又著改幾字。所以橫渠說命辭為難。賀孫

〔校勘〕

○朝鮮古写本は「又子細看章句」と「又見不穩當」の「又」を「文」に作る。

○「敲磕」の「磕」萬曆本、呂晚村句讀本、和刻本は「楷」に作り、成化本、朝鮮古写本、朝鮮整版本は「搯」に作る。

○朝鮮整版本は「只為無那恰好底字子。把來看」の「子」を「纒」に作る。朝鮮整版本考異「纒把、纒一作子」

○成化本、萬曆本、和刻本は「又著改幾字」の「著」を「着」に作る。

〔訳〕

「学ぶ者はしばらく『大学』の本文を熟読して、さらに『大学章句』を仔細に読むとよい。『大学或問』はとりあえず読む必要がないが、疑うところが出てきてから、はじめて読むべきものだ。」またおつ

しゃった。「私は、經書を解釈するに際して不本意にもあのようによく書いてしまい、その上まず学ぶ者を想定し、その人の為疑問を設定して説いた。その人はこのような疑問を持ったこともないのに、あらかじめ説いてやるのだから、学ぶ者の読みは安易なものになってしまった。聖人は『憤せずんば啟せず、悱せずんば發せず。一隅を擧げて三隅を以て反らざれば、則ち復たせざるなり』と言われた。ぜひ四、五日疑わせて、はじめてその人に説くと、すっかり理解できるのだ。さらに以前疑問を持ったところまでも、それによって啓發される。努力は多くの思慮がすつきりしないところにおいてこそするのが肝要だ。ところが、今はみな出来あいの解釈を読んで、なんの疑問も持たなくなってしまった。わが儒学と老莊の学ではいずれも伝える人がなく、ただ仏教だけ常に伝える人がいる（衣鉢の伝授を指すか）。恐らく仏教では一切説かないというやり方をして、すべて人自身に考え窮めさせ、自ずとすつかり理解するようにさせているのだろう。しかしわが儒学ではなにも説かないようなやり方はしない。もし仏教のやり方と同じようにやれば、やがて見解のずれが生じてしまう。」またおつしゃった。「文章を解釈するには、適切な言葉を与えるのが一番難しい。私が經書を解釈することが未だに完成せず、常に書き改めているのは、ただ意味をきちんと伝えられる文字がないためである。手にとつて読んでみるとまた適切でないところが現れて、そこでまた何字かを改める。だから張横渠は『言葉使いは難しい』と言つたのだ。」葉賀孫録

〔注〕

(1) 「不合太多」 「沢山書くべきではない」の意。「合」については、三浦國雄『朱子語類抄』七一頁に「事事都合講過」の「合」は「当(マサニベシ)」に同じ。」とある。

(2) 「不憤不啟。…」 『論語』述而篇「子曰、不憤不啟、不悱不發。舉一隅不以三隅反、則不復也。」

(3) 「須是、方始」 三浦國雄『朱子語類抄』三七頁「須、方」  
…、【ぜひくして始めてくだ】という意味。『朱子語類』 訳注 卷十「十一」(汲古書院) 頁二二「方始」は「方」に同じ。

(4) 「三朝五日」 四、五日間の意。『敦煌變文集』上卷(山盧)山遠公話「十月満足乃生、是時手把阿孃心肝、脚踏阿孃胯骨、三朝五日、不肯平安。」

(5) 「通透」 すっかり分かること。『語類』卷一一、九四條、徐寓録(189)「凡讀書、須有次序。且如一章三句、先理會上一句、待通透、次理會第二句、第三句、待分曉、然後將全章反覆細繹玩味。如未通透、却看前輩講解、更第二番讀過。」または、抜け通ること。岡島冠山「字海便覽」卷二「通透ハ、ヌケトホルノコトナリ。」(「大学」三「伝一章釈明明徳内俗語」の項、汲古書院、三〇七頁)

(6) 「觸發」 啓発すること。『語類』卷八七、二二八條、沈僩録(VI 2252)「蓋義理相説之久、其難處自然觸發解散也。」

(7) 「都無疑了」 学ぶ者自身が問題意識や疑問を抱くことが、進歩向上の契機になる。『語類』卷一一五、八條、訓萬人傑(VII 2771)「人傑將行、請教。先生曰。平日工夫、須是做到極時、四邊皆黑、無路

可入、方是有長進處。大疑則可大進。若自覺有些長進、便道我已到了、是未足以為大進也。」陸九淵集』卷三六、年譜「紹興十九年己巳先生十一歲」條「後嘗語學者曰。小疑則小進、大疑則大進。」時代は下るが陳猷章にも同様の語がある。『陳猷章集』卷二「與張廷實主事」第一三書「前輩謂學貴知疑。小疑則小進、大疑則大進。疑者、覺悟之機也。一番覺悟、一番長進。章初學時亦是如此、更無別法也。」

(8) 「蓋他一切辦得不說」 禪における不立文字の伝統を指すか。『禪源諸詮集都序』(筑摩、禪の語録、九、頁四四)「達磨受法天竺、躬至中華。見此方学人多未得法、唯以名數為解、以事相為行。欲令知月不在指、法是我心故、但以心伝心、不立文字。」『景德伝灯録』卷五「南嶽懷讓」 「乃直詣曹谿參六祖。相問。什麼處來。曰。嵩山來。祖曰。什麼物恁麼來。曰。説似一物即不中。」李宜哲『朱子語類考文解義』第五「辦、猶決也能也。不説謂不以言語相授、但作話頭、使自求索也。」

(9) 「敲磕」 敲いて打ち破ることであるが、転じて、臆せず難題に取り組んで考え窮めることである。

(10) 「少間」 三浦國雄『朱子語類抄』五四頁「少間」は「おっつけ、しばらくして」の意の俗語。

(11) 「字子」 用例としては、『語類』卷一三九、一二七條、包揚録(VIII 3322)「因論今人作文、好用字子。如讀漢書之類、便去收拾三兩箇字。洪邁又較過人、亦但逐三兩行文字筆勢之類好者讀看。因論南豐尚解使一二字、歐蘇全不使一箇難字、而文章如此好。」が挙げられる。

(12) 「横渠説命辭為難」 張載『經学理窟』学大原下「所以難命辭者、

只為道義は無形體之事。」

49条

某作或問、恐人有疑、所以設此、要他通曉。而今學者未有疑、却反被這箇生出疑。 賀孫

〔訳〕

私が『大学或問』を書いたのは、『大学』を読む）人々が疑問を持つつだらうと想定し、そこであらかじめ疑問を設定して、（それを解くことで）人々に通曉させるためである。今の学ぶ者は（自ら）疑問を持っていないのに、逆に『大学或問』によって疑問が生じてしまったのだ。

葉賀孫録

50条

或問朱敬之。有異聞乎。曰。平常只是在外面聽朋友問答、或時裏面亦只說某病痛處得。一日、教看大學。曰。我平生精力盡在此書。先須通此、方可讀他書。 賀孫

〔校勘〕

○「方可讀他書」 底本は「方可讀書」に作るが、朝鮮古写本は「方可讀他書」に作る。校勘によって「方可讀他書」に改める。

〔訳〕

ある人が朱敬之に尋ねた。「異聞が有るか（つまり、先生からほかの門人が知らない何か特別な話を聞いたことがあるか）。」朱敬之は答えた。「普段はただ外で父と友人たちの問答を聞くだけで、時には家庭内でまたただ私の欠陥を指摘するだけだ。ある日、『大学』を読まされて、『私の平生の精力はすべてこの書物に注がれている。ぜひまずこれに通じて、それから始めて他の書物を読むべきだ』と言った。」

葉賀孫録

〔注〕

(1) 「朱敬之」 名は在、字は敬之または叔敬、朱子の三男。

(2) 「有異聞乎」 『論語』季氏第一六「陳亢問於伯魚曰、子亦有異聞乎。對曰、未也。嘗獨立。鯉趨而過庭。曰、學詩乎。對曰、未也。不學詩無以言。鯉退而學詩。…」伯魚は孔子の子であつて、名は鯉、字は伯魚である。

(3) 「病痛」 欠陥、病弊、弱点の意である。『語類』卷一一六、一条、訓黃義剛(Ⅶ 287)「問。平時處事、嘗未接時、見得道理甚分明、及做者、又便錯了、不知如何恁地。曰。這是難事。但須是知得病痛處、便去著力。若是易為、則天下有無數聖賢了。」

(4) 「平生精力、盡在此書」 司馬光（字は君實、司馬溫公と称す）の言葉を借用したもの。次条の注を参照。



51条

某於大學用工甚多。溫公作通鑑、言。臣平生精力、盡在此書。某於大學亦然。論孟中庸、却不費力。友仁

〔校勘〕

○朝鮮古写本にはこの条が見えない。

〔訳〕

私は『大学』については甚だ努力している。司馬溫公が『資治通鑑』を作つて、「臣の平生の精力は悉くこの書物に注がれている」と言つたが、私の『大学』における場合も同じだ。『論語』『孟子』『中庸』については、それほど精力を費やしていない。郭友仁録

〔注〕

(1) 「臣平生精力、盡在此書」 『資治通鑑』 「進書表」 または 『司馬溫公文集』 (四部備要) 卷一 「進資治通鑑表」 に 「臣今筋骸癯瘁、目視昏近、齒牙無幾、神識衰耗、目前所為、旋踵遺忘。臣之精力、盡於此書」とある。

52条

大學一日只看二三段時、便有許多修處。若一向看去、便少。不是少、

只是看得草草。

〔校勘〕

○朝鮮古写本にはこの条が見えない。

〔訳〕

『大学』は、一日に二、三段しか読まない時には、実践すべき箇所が沢山あるが、もしさつと読んでいくならば、(それが) 少ない。少ないのではなく、ただいい加減に読んでいただけだ。記録者名欠

〔注〕

(1) 「一向」 三浦國雄『朱子語類抄』 一三三頁 「一向」 はひたすら、もっぱら。

(2) 「草草」 「いい加減に」の意。『語類』 卷一〇、六三条、陳淳録 (I 169) 「讀書、理會一件、便要精這一件、看得不精、其他文字便亦都草草看了。一件看得精、其他亦易看。」

53条

某解注書、不引後面說來證前說、却引前說去證後說。蓋學者方看此、有未曉處、又引他處、只見難曉。大學都是如此。 侷

〔訳〕

私は経書を解釈する際には、後の文を引用して前の文を証明するようにはせず、前の文を引用して後の文を証明するようにしている。恐らく学ぶ者はここを読んで、分らないところが出てきたのに、さらにほかの（まだ読んでいない）ところを引用しても、ただ分かりにくいと感じるだけだ。『大学』の解釈は全部このようになっていて。

沈憫録

54条

説大學啟蒙畢、因言。某一生只看得這兩件文字透、見得前賢所未到處。若使天假之年、庶幾將許多書逐件看得恁地、煞有工夫。 賀孫

〔訳〕

『大学』と『易学啓蒙』について話し終えると、そこでおっしゃった。「私は生涯にただこの二つの書物（『大学』と『易』）を透徹するまで読んだから、以前の賢人たちがまだ到達し得ないところを掴んだのだ。もし『天之年を假す』るならば（つまりもし天が私を長生きさせるならば）、私は多くの書物を一冊ずつそれと同じように（『大学』と『易』を読むのと同じように）読み、極めて周到に熟考するであろう。」 葉

賀孫録

〔注〕

(1) 「只看得這兩件文字透」 朱子が『大学』と『易』の解釈に心血を注いだことに関してはその発言を参照。『朱文公文集』巻五九「答余正叔」第三書「熹歸家、只看得大學與易、修改頗多。義理無窮、心力有限、奈何。唯需畢力鑽研、死而後已耳。」  
 (2) 「天假之年」 『左伝』僖公二八年「天假之年、而除其害。天之所置、其可廢乎。」

(3) 「煞有工夫」 はなはだ周到に考えをめぐらすこと。『語類』巻一二二、二二条、葉賀孫録（Ⅷ 2953）「東萊自不合做這大事記。他那時自感疾了、一日要做一年。若不死、自漢武至五代、只千來年、他三年自可了此文字。人多云、其解題煞有工夫。其實他當初作題目、却煞有工夫、只一句要包括一段意。解題只見成、檢令諸生寫。伯恭病後、既免人事應接、免出做官、若不死、大段做得文字。」 「煞」については、三浦國雄『朱子語類抄』七一頁に「煞」は「殺」の俗字だが、『はなはだ、非常に』の意の俗語。」とある。

## 序

55条

亞夫問大學序云既與之以仁義禮智之性、又有氣質之稟。所謂氣質、便是剛柔、強弱、明快、遲鈍等否。曰然。又云氣是那初稟底、質是成這模樣了底。如金之鑛、木之萌芽相似。又云只是一箇陰陽五行之氣、

滾在天地中、精英者爲人、渣滓者爲物、精英之中又精英者、爲聖、爲賢、精英之中渣滓者、爲愚、爲不肖。 恪

〔校勘〕

○「仁義禮智」成化本「智」作「知」。

○「滾」成化本・朝鮮整版本「滾」作「衰」。

○「渣滓」成化本・朝鮮整版本「渣」作「查」。

○朝鮮古写本無此文。

〔訳〕

亞夫が質問した「大學序にいう「既に之に與うるに仁義禮智の性を以てし、又氣質の稟有り」のいわゆる氣質とは、剛柔、強弱、明快遲鈍などのことでしょうか。」朱子「そうだ。」そこでまた言った、「氣とは、あの初めに受けたもので、質とは、このかたちを成したもので、金におけるあらがね、木における萌芽のようなものだ。」また、「全ては同じ陰陽五行の気なのであって、それが天地の間でたぎって、上質なものとは人となり、かすは物となる。上質中の上質なものは、聖となり賢となり、上質中のかすは、愚や不肖となる。」 林恪録

〔注〕

(1)「亞夫」 晏淵、字は亞夫、蓮塘と号す。涪州涪陵県の人。「朱子語録姓氏」では紹興四年(一一九三)所聞。田中謙二「朱門弟子師事年攷」「田中謙二著作集」第三卷(汲古書院、二〇〇一年)

二二三～二二四頁。陳榮捷『朱子門人』(臺灣學生書局、一九八二年)二六六～二六七頁。

(2)「大學序云既與之以仁義禮智之性、又有氣質之稟」「大學章句」序「蓋自天降生民、則既莫不與之以仁義禮智之性矣。然其氣質之稟或不能齊、是以不能皆有以知其性之所有而全之也。」

(3)「氣是那初稟底。質是成這模樣了底」氣は陰陽二氣、質は五行であり、氣の拡散した不可視の状態が氣、氣の凝縮聚積した可視の状態が質。『語類』卷一、四八條、舒高録(10)「陰陽是氣、五行是質。有這質、所以做得物事出來。…然却是陰陽二氣截做這五箇、不是陰陽外別有五行。」「語類」卷三、一九條、李閔祖録(137)「氣之清者爲氣、濁者爲質。」「語類」卷一、七條、游敬仲録(12)「氣積爲質。」恐らくその可視と不可視を金と鉞石、木と萌芽になぞらえたのだと思われる。

(4)「渣滓」かす。『語類』卷一、二三條、陳淳録(10)「天地初間只是陰陽之氣。這一箇氣運行、磨來磨去、磨得急了、便拶許多渣滓。裏面無處出、便結成箇地在中央。氣之清者便爲天、爲日月、爲星辰、只在外、常周環運轉。地便只在中央不動、不是在下。」

(5)「精英者爲人、渣滓者爲物、精英之中又精英者、爲聖、爲賢、精英之中渣滓者、爲愚、爲不肖」「人」「物」「聖」「賢」「愚」「不肖」「朱文公文集」卷三〇「答張欽夫」第一〇書「其所乘之氣有偏正純駁之異、是以稟而生者有物質否之不一。」「語類」卷四、四一條、沈僩録(10)「人物之生有精粗之不同。自一氣而言之、則人物皆受是氣而生。自精粗而言、則人得其氣之精且通者、物得其氣之偏且塞者。」

…然就人之所稟而言、又有昏明清濁之異。故上知生知之資、是氣清明純粹而無一毫昏濁。」

〔参考史料〕

【語類】卷四、九二條、陳淳錄（一七）「問。子罕言命。若仁義禮智五常皆是天所命。如貴賤死生壽夭之命有不同、如何。曰。都是天所命。稟得精英之氣、便爲聖、爲賢、便是得理之全、得理之正。稟得清明者、便英爽、稟得敦厚者、便溫和、稟得清高者、便貴、稟得豐厚者、便富、稟得久長者、便壽、稟得衰頹薄濁者、「一本作「衰落孤單者、便爲貧爲賤爲天」便爲愚、不肖、爲貧、爲賤、爲夭。天有那氣生一箇人出來、便有許多物隨他來。」

56条

問一有聰明睿智能盡其性者、則天必命之以爲億兆之君師、何處見得天命處。曰此也如何知得、只是才生得一箇恁地底人、定是爲億兆之君師、便是天命之也。他既有許多氣魄才德、決不但已、必統御億兆之衆、人亦自是歸他。如三代已前聖人都是如此。及至孔子、方不然。然雖不爲帝王、也閑他不得、也做出許多事來、以教天下後世、是亦天命也。

箇

〔訳〕

質問「一たび聰明睿智にして能く其の性を盡くす者有れば、則ち天

必ず之に命じて以て億兆の君師と爲す」とありますが、どこに天命の所在を見いだすことができるのでしょうか。」朱子「これもどうして知り得ようか。ただひとたびこのような人を生み出すことが出来さえすれば、きつと億兆の君師となる、すなわちこれが「天之を命ず」ということである。その人はたくさんの氣魄と才能と徳をそなえているのであるから、決してそのままで終わってしまうのではなく、必ず億兆の民衆を統御するのであり、人民もまた自ずと彼に歸服するのだ。三代以前の聖人はみなこのようであった。孔子に至って、初めてそうではなくなった。しかし帝王とならなかつたとはいえ、(天は) 彼を捨ておかなかつたし、(孔子は) たくさんの事をし、天下後世を教化したのである。これもまた天の命である。」沈僩録

〔注〕

(1) 「一有聰明睿智能盡其性者、則天必命之以爲億兆之君師」『大學章句』序「一有聰明睿智能盡其性者出於其間、則天必命之以爲億兆之君師、使之治而教之、以復其性」。

(2) 「閑他不得」岡島冠山『字海便覽』卷一に、「閑他不得トハ、彼レヲナラザリノ者トスルコトハナラヌト云ウコトナリ」とある。

57条

問天必命之以爲億兆之君師、天如何命之。曰只人心歸之、便是命。

問孔子如何不得命。曰中庸云大徳必得其位、孔子却不得。氣數之差

至此極、故不能反。可學

〔校勘〕

○「問天必命之以爲億兆之君師、天如何命之」朝鮮古寫本有「夜令敬之讀大學序、至一有聰明睿智能盡其性者出於其間、則天必命之以爲億兆之君師、某問天如何命之」。

〔訳〕

質問「天必ず之に命じて以て億兆の君師と爲す」とありますが、天はどのようにして之に命じるのでしょうか。」朱子「ただ人民の心がこれに歸服する、すなわちこれが命だ。」質問「孔子はどうして（天子となる）命を得なかったのですか。」朱子「中庸」では「大徳は必ず其の位を得」（『中庸章句』第一七章）というが、孔子はしかし（その位を）得なかった。氣數のくるいがここに至って極まり、故に（氣數の正常な状態に）戻ることができなかったのだ。」鄭可學録

〔注〕

（1）「中庸云大徳必得其位」『中庸章句』第一七章「子曰「舜其大孝也與。徳爲聖人、尊爲天子、富有四海之内。宗廟饗之、子孫保之。故大徳必得其位、必得其祿、必得其名、必得其壽。故天之生物、必因其材而篤焉。故栽者培之、傾者覆之。詩曰『嘉樂君子、憲憲令徳。宜民宜人、受祿于天。保佑命之、自天申之』。故大徳者必受命」。（朱注）「受命者、受天命爲天子也」。

（2）「氣數之差至此極、故不能反」『語類』卷一、四五條（18）「人之生、適遇其氣、有得清者、有得濁者、貴賤壽夭皆然、故有參錯不齊如此。聖賢在上、則其氣中和。不然、則其氣偏行。故有得其氣清、聰明而無福祿者。亦有得其氣濁、有福祿而無知者、皆其氣數使然。堯舜禹臯文武周召得其正、孔孟夷齊得其偏者也。至如極亂之後、五代之時、又却生許多聖賢、如祖宗諸臣者、是極而復者也」。また、朱子の氣數に關しては次の三浦國雄氏の研究で詳論されている。三浦國雄「氣數と事勢——朱熹の歴史意識——」（『東洋史研究』第四二卷第四号、一九八四年）、のち「朱子と氣と身體」（平凡社、一九九七年）に再録。

58条

問繼天立極。曰天只生得許多人物、與你許多道理。然天却自做不得、所以生得聖人爲之脩道立教、以教化百姓、所謂裁成天地之道、輔相天地之宜、是也。蓋天做不得底、却須聖人爲他做也。 個

〔校勘〕

○「所以生得聖人爲之脩道立教」成化本、朝鮮古寫本、朝鮮整版本「生」作「必」、萬曆本、和刻本「生」作「立」。賀瑞麟「朱子語類正譌」「所以生、原作立、據周本改」。

〔訳〕

質問、「天を繼ぎ極を立てる」とは。朱子、「天はただたくさんの人と物を生み出し、それにたくさんの道理を與えるだけだ。しかし天は自分では（天下を治め民を教化することが）できないので、聖人を生み出し、その聖人が天になりかわって道を修め教えを立て、人民を教化させた。所謂「天地の道を裁成し、天地の宜を輔相す」とは、このことである。おそらく天は（自分では）することができないものなので、きつと天に替わって聖人にやらせる必要があるのだ。」沈僞録

〔注〕

(1) 「繼天立極」『大學章句』序「此伏羲・神農・黃帝・堯・舜、所以繼天立極、而司徒之職、典樂之官所由設也」。

(2) 「天却自做不得」『語類』卷六四、五五條、李閔祖録(IV 1570)「贊天地之化育。人在天地中間、雖只是一理、然天人所爲、各自有分。人做得底、却有天做不得底。如天能生物、而耕種必用人。水能潤物、而灌溉必用人。火能燠物、而薪爨必用人。裁成輔相、須是人做、非贊助而何。程先生言、參贊之義、非謂贊助、此說非是。」

(3) 「裁成天地之道、輔相天地之宜」『周易』泰・象傳「象曰、天地交泰。后以財成天地之道、輔相天地之宜、以左右民。」とあり、「裁成」を「財成」につくる。阮元「校勘記」には、「石經、岳本、閩、監、毛本同。釋文財作裁」とあり、『經典釋文』には「音才、徐才載反、荀作裁」とある。また、『周易本義』も「財成」に作る。

59条

問各俛焉以盡其力。下此俛字何謂。曰俛字者、乃是刺著頭、只管做將去底意思。友仁

〔校勘〕

○「問各俛焉以盡其力」朝鮮古写本作「問大學章句序中言各俛焉以盡其力」。

〔訳〕

質問、「各おの俛焉として以て其の力を盡くす」とありますが、『俛』の字を下したのにはどういう意味があるのですか。」朱子「『俛』の字というのは、没頭して、ひたすらやっていくという意味だ。」郭友仁録

〔注〕

(1) 「俛焉」『禮記』表記篇「子曰、詩之好仁如此。鄉道而行、中道而廢、忘身之老也。不知年數之不足、俛焉日有孳孳、斃而后已。」(鄭注)「俛焉、勤勞之貌」

(2) 「各俛焉以盡其力」『大學章句』序「其學焉者、無不有以知其性分之所固有、職分之所當爲、而各俛焉以盡其力。此古昔盛時所以治隆於上、俗美於下、而非後世之所能及也」。

(3) 「刺頭」没頭するの意。『漢語大詞典』に「猶埋頭」とある。

問外有以極其規模之大、内有以盡其節目之詳。曰這箇須先識得外面一箇規模如此大了、而内做工夫以實之。所謂規模之大、凡人爲學、便當以明明德、新民、止於至善、及明明德於天下爲事、不成只要獨善其身便了。須是志於天下、所謂志伊尹之所志、學顏子之所學也。所以大學第二句便說在新民。 倂

〔校勘〕

○朝鮮古写本「問」作「問大學序」四字。

○「外有以極其規模之大」成化本、萬曆本、朝鮮古写本、朝鮮整版本本「極」作「盡」。

〔訳〕

質問「『外は以て其の規模の大を極むる有りて、内は以て其の節目の詳を盡くす有り』について。」朱子「これは必ず先に外面の枠組みがこのように壮大であることを認識し、そして内に實踐してこれを充實充填しなければならぬ。所謂『規模の大』とは、おおよそ人が學問をするに、すなわちきつと『明德を明らかにし、民を新たにし、至善に止まる』及び『明德を天下に明らかにす』(『大學章句』經一章)を事としなければならず、どうしてただ自己の一身を修めさえすればそれでおしまいだということがあろうか。必ず天下を志さなければならぬのであり、所謂『伊尹の志す所を志し、顔子の學ぶ所を學ぶ』

である。ゆえに『大學』の第二句で『民を新たにするに在り』といっているのだ。」沈僩録

〔注〕

(1)「規模」規模、スケール、枠組み、骨組みの意。詳細は、本巻第一條の〔注〕(1)を参照。

(2)「外有以極其規模之大、内有以盡其節目之詳」『大學章句』序「若曲禮・少儀・内則・弟子職諸篇、固小學之支流餘裔、而此篇者、則因小學之成功、以著大學之明法、外有以極其規模之大、而有以盡其節目之詳者也。」

(3)「獨善其身」『孟子』盡心章句上篇「古之人、得志、澤加於民、不得志、脩身見於世。窮則獨善其身、達則兼善天下。」

(4)「志伊尹之所志、學顏子之所學」『通書』志學第一〇、「聖希天、賢希聖、士希賢。伊尹・顏淵大賢也。伊尹恥其君不爲堯舜、一夫不得其所、若撻於市、顏淵不遷怒、不貳過。三月不違仁。志伊尹之所志、學顏子之所學、過則聖、及則賢、不及則亦不失於令名。」、『近思錄』卷二にも収録。

61条

明德・新民、便是節目、止於至善、便是規模之大。 道夫

〔校勘〕

○「便是規模之大」朝鮮整版本「便是」作「便見」、朝鮮整版本考異「見、一作是」

〔訳〕

「明德」民を新たにす」というのが（『大學章句』序にいう）「節目」で、「至善に止まる」というのが、（『大學章句』序にいう）「規模の大」だ。楊道夫録

62条

仁甫問釋氏之學、何以說爲高過於大學而無用。曰吾儒更著讀書、逐一就事物上理會道理。他便都掃了這箇、他便恁地空空寂寂、恁地便道事都了。只是無用。德行道藝、藝是一箇至末事、然亦皆有用。釋氏若將些子事付之、便都沒奈何。又曰古人志道、據德、而游於藝、禮樂射御書數、數尤爲最末事。若而今行經界、則算法亦甚有用。若時文整篇整卷、要作何用耶。徒然壞了許多士子精神。賀孫

〔校勘〕

○「何以說爲」朝鮮古写本「爲」作「其」。  
 ○「若時文整篇整卷」朝鮮古写本無「若」字。  
 ○「要作何用耶」成化本、萬曆本、朝鮮古写本、朝鮮整版本、和刻本「耶」作「即」。

〔訳〕

仁甫が質問した、「釋氏の學を、何ゆえに『高きこと大學に過ぐれども用なし』といわれたのですか。」朱子「吾が儒學ではかえって讀書させるのであり、一つひとつ事物に即して道理を理解させる。彼らはこれをすべて一掃してしまい、彼らはこのように空空寂寂にして、これでもうすべて片づいたという。（これでは）ただの無用であるだけだ。德行道藝のうち、藝は最も末の事だが、しかしまたみな有用でもある。釋氏には、たとえばほんの些細な事柄を委嘱しても、彼らには、まったくどうしようにもしようがない。」朱子「古人は道を志し、徳に依據し、藝に遊んだ。禮・樂・射・御・書・數のうち、數が最も末事であるが、もし今經界法を行うなら、算法もやっぱり非常に有用なのだ。（それにひきかえ）時文の全篇全卷、このようなものを作ろうとして一體何の用になるのか。いたずらに多くの士人の精神を破壊してしまっただけだ。」葉賀孫録

〔注〕

(1)「仁甫」孫自任、字仁甫。『朱子門人』一七二頁。從弟の孫自修、自新と朱子に従遊した。『宋元學案補遺』では朱子に私淑した者として、陳著（一七二頁）、田中著（二五六頁）では朱子に直接師事した者とされている。陳著に詳しい考證があり、ここではそれに従って、仁甫を孫自任のことだとしておく。『宋元學案』卷六九、「補遺」卷六九。

(2)「高過於大學而無用」『大學章句』序「自是以來、俗儒記誦詞章



之習、其功倍於小學而無用、異端虛無寂滅之教、其高過於大學而無實」。

(3) 「德行道藝」 『周禮』地官、鄉大夫「三年則大比。攷其德行道藝而興賢者能者。鄉老及鄉大夫帥其吏與其衆寡、以禮禮賓之。」鄭注「賢者有德行者。能者有道藝者。衆寡謂鄉人之善者無多少也。鄭司農云、興賢者謂若今舉孝廉。興能者謂若今舉茂才。賓敬也。敬所舉賢者能者。玄謂、變舉言興者、謂合衆而尊寵之、以鄉飲酒之禮、禮而賓之。」疏「…云考其德行道藝者、德行謂六德六行、道藝謂六藝。云而興賢者、則德行之人也。能者、則道藝之人也。」 『周禮』地官、大司徒「以鄉三物教萬民而賓興之。一曰六德。知・仁・聖・義・忠・和。二曰六行。孝・友・睦・婣・任・恤。三曰六藝。禮・樂・射・御・書・數。」鄭注「物猶事也。興猶舉也。民三事教成、鄉大夫舉其賢者能者以飲酒之禮賓客之。既則獻其書於王矣。知明於事。仁愛人以及物。聖通而先識。義能斷時宜。忠言以中心。和不剛不柔。善於父母爲孝。善於兄弟爲友。睦親於九族。婣親於外親。任信於友道。恤振憂貧者。禮五禮之義。樂六樂之歌舞。射五射之法。御五御之節。書六書之品。數九數之計。」

また『語類』卷八六、第四八條、沈僩錄(Ⅵ、2718)「問、「周禮」『德行道藝』。德行・藝三者、猶有可指名者。』道』字當如何解」。曰、「舊嘗思之、未甚曉。看來『道』字、只是曉得那道理而已。大而天地事物之理、以至古今治亂興亡事變、聖賢之典策、一事一物之理、皆曉得所以然、謂之道。且如『禮・樂・射・御・書・數』、禮樂之文却是祝史所掌、至於禮樂之理、則須是知道者方知得。如所謂『天高地下、

萬物散殊、而禮制行矣。流而不息、合同而化、而樂興焉』之謂。又、德是有德、行是有行、藝是有藝、道則知得那德・行・藝之理所以然也。注云、「德行是賢者、道藝是能者」。蓋曉得許多事物之理、所以屬能」も参照。

(4) 「游於藝」 『論語集注』述而篇「子曰、志於道、據於德、依於仁、游於藝」。

(5) 「經界」 經界法のこと。農地の測量と土地臺帳の作成を行い、富家の隱匿田を摘發し、課稅納稅の不均衡を正すことを目的とした一種の檢地策。宋代では李椿年が紹興年間に浙西路平江府で行ったことに始まり、朱子も漳州の知事時代に漳・泉・汀の三州で實施しようとしたのであるが實現しなかつた。經界の實施に際して算法が重要であることについては、「一、經界之法打量一事、最費功力、而紐折算計之法、又人所難曉者。本州自開初降指揮、即已差人於鄰近州縣已行經界去處、取會到紹興年中施行事目、及募本州舊來有會經奉行、諳曉算法之人、選擇官吏將來可委者、日逐講究、聽候指揮。但紹興年中戶部行下打量攢算格式印本、多方尋訪、未見全文。竊恐諸州亦未必有。欲乞聖慈特詔戶部根檢贍錄、點對行下。」(『朱子文集』卷一九「條奏經界狀」)とあり、朱子が實際に經界を實施するに際して算法に通じた者を募ろうとしていたことが分かる。また、「今上下匱乏、勢須先正經界。賦入既正、總見數目、量入爲出、罷去冗費、而悉除無名之賦、方能救百姓於湯火中。若不認百姓是自家百姓、便不恤」(『語類』卷一一、四條、(Ⅶ 2714))とあるように、朱子は民の窮乏を救う方法として第一に經界法を實施しなければならぬ

と考えていた。經界法については、曾我部靜雄『宋代政經史の研究』第一章「南宋の土地經界法」（吉川弘文館、一九七四年）や、和田清編『宋史食貨志譯注（二）』（東洋文庫、一九六〇年）を参照。また、思想史の側面から朱子の經界法を論じた研究に、友枝龍太郎『朱子の思想形成』第三章第二節「格物説と政治的實踐」（春秋社、一九六九年）がある。

### 經上

63条

大學首三句説一箇體統、用力處却在致知格物。 端蒙

〔校勘〕

○朝鮮古写本無此文。

〔訳〕

『大學』の首三句は綱領を説いており、（具體的な）實踐は致知格物にある。 程端蒙録

〔注〕

（一）「體統」『大學章句』經一章「大學之道、在明明徳、在親民、在止於至善」。朱注「此三者、大學之綱領也」。體統とは、ここにいう

綱領のこと。體統については、また次の條も参照。『語類』卷一三、第一四二條、余大雅録（I 247）「唯大學是曾子述孔子説古人爲學之大方、門人又傳述以明其旨、體統都具。玩味此書、知得古人爲學所郷、讀語孟便易入。後面工夫雖多、而大體已立矣」。

64条

天之賦於人物者謂之命、人與物受之者謂之性、主於一身者謂之心、有得於天而光明正大者謂之明德。 敬仲 以下明明徳。

〔校勘〕

○朝鮮古写本無「以下明明徳」。

〔訳〕

天が人や物に賦與したものを命といい、人と物が天から受けたものを性といい、一身を主宰するものを心といい、天から得て光明正大なものを明德という。 游敬仲録 以下明德を明らかにするについて。

〔参考史料〕

『語類』卷五、第四四條、余大雅録（I 88）「問。天之付與人物者爲命、人物之受於天者爲性、主於身者爲心、有得於天而光明正大者爲明德否。曰。心與性如何分別。明如何安頓。受與得又何以異。人與物與身又何間別。明德合是心、合是性」。

65条

或問明德便是仁義禮智之性否。曰便是。

〔校勘〕

○朝鮮古写本無此文。

〔訳〕

ある人が質問した、「明德とは他でもなく義禮智の性のことですか。」  
朱子「そうだ。」 記録者名欠

66条

或問所謂仁義禮智是性、明德是主於心而言。曰這箇道理在心裡光明  
照徹、無一毫不明。

〔校勘〕

○「無一毫不明」 成化本「毫」作「豪」。

○朝鮮古写本無此文。

〔訳〕

ある人が質問した「いわゆる仁義禮智は性で、明德とは心を主眼に  
して言っているのですか。」朱子、「この道理は心にあつて明るく限な

く照らしわたり、些かも明るくないということはないのだ。」 記録者  
名欠

67条

明德是指全體之妙、下面許多節目、皆是靠明德做去。

〔校勘〕

○朝鮮古写本有卷十四第六十六條小注中。

〔訳〕

明德とは全體の妙を指しており、その下の多くの節目は、みな明德  
に依據してやっていくだけだ。 記録者名欠

〔関連史料〕

本條は、卷一四、第一〇六條（I 268）の一部と重複する。「或問。  
何謂明德。曰。我之所得以生者、有許多道理在裏、其光明處、乃所謂  
明德也。明明德者、是直指全體之妙。下面許多節目、皆是靠明德做去。」

68条

明明德、明只是提撕也。 士毅

〔校勘〕

○朝鮮古写本無此文。

〔訳〕

「明德を明らかにする」の明とは、ただ覺醒させるとのことだ。

黃士毅録

〔注〕

(1)「提撕」覺醒させるの意。『語類』卷一二、第八一條、(I 209)「人之爲學、千頭萬緒、豈可無本領。此程先生所以有持敬之語。只是提撕此心、教他光明、則於事無不見、久之自然剛健有力。」「語類」

卷一四、第一〇七條 (I 209)「…大學須自格物入、格物從敬入最好。只敬、便能格物。敬是個瑩徹底物事。今人却塊坐了、相似昏倦、要須提撕著。提撕便敬、昏倦便是肆、肆便不敬。」など。

69条

學者須是爲己。聖人教人、只在大學第一句明明德上。以此立心、則如今端已斂容、亦爲己也。讀書窮理、亦爲己也。做得一件事是實、亦爲己也。聖人教人持敬、只是須著從這裏說起。其實若知爲己後、即自然著敬。 方子

〔校勘〕

○「端已斂容」、朝鮮古写本は「端容」に作る。

○「聖人教人持敬」の「聖人」、成化本は「聖賢」に作る。

○「只是須著」「自然著敬」の「著」、成化本・萬曆本・朝鮮古写本・和刻本は「着」に作る。

○「從這裏說起」の「裏」、萬曆本・和刻本は「裡」に作る。

○「即自然著敬」の「即」、朝鮮古写本は「則」に作る。「著」、朝鮮古写本・和刻本は「着」に作る。

○記録者「方子」、朝鮮古写本は「方子。蓋脚同。」とする。

〔訳〕

学ぶ者は自分自身の向上のために学ばなければならない。聖人が人を教える、その核心はただ『大学』の第一句「明德を明らかにす」にある。これを自身の心の立脚点とすれば、今ここで己を正し容貌をととのえつつしむのも己自身のためであり、読書窮理も己自身のためである。一つのことを着実になすのもやはり己自身のためである。聖人が人に持敬を教えるには、かならずこの、己自身のためにするというところから説き始める。実のところ、いったん己自身のためにするのだとわかれば、自然と敬を身につけることになる。 李方子録

〔注〕

(1)「爲己」二八条の注(1)を参照。なお、「爲己」は義理を志向するものであり、心が義理に繋ぎ止められてあらぬ方にそれること

がない、という意味でそれは「持敬」にも通底する。「語類」巻八、七九条、李方子録（I 139）「學者只是不爲己、故日間此心安頓在義理上時少、安頓在閑事上時多、於義理却生、於閑事却熟。」

(2) 「立心」『周易』「益」上九。莫益之、或擊之。立心勿恒、凶。『伊川易傳』「九、以剛而求益之極、衆人所共惡。故无益之者而或攻擊之矣。立心勿恒、凶。聖人戒人、存心不可專利。云勿恒如是、凶之道也。所當速改也。」

(3) 「端己斂容」「斂容」は『漢書』卷六八。霍光傳「光每朝見、上虚己斂容、禮下之已甚。」

(4) 「讀書窮理、亦爲己也」『語類』卷二四、二四條、程端蒙録（II 572）「有爲己而讀書者、有爲名而讀者、有爲利而讀者、須觀其所由從如何。」

(5) 「持敬」一九条の注（3）を参照。また、卷二二、一一〇条、呉振録（I 212）が参考になる。「今所謂持敬、不是將箇敬字做箇好物事樣塞放懷裏。只要胸中常有此意、而無其名耳。」

(6) 「須著」三二条の注（1）参照。

(7) 「著敬」（着敬）『語類』には本条以外に用例はない。

70条

明明德乃是爲己工夫。那个事不是分内事。明德在人、非是從外面請入來底。 蓋卿

〔校勘〕

○朝鮮古写本、「明明德」の前に「大學」の二字有り。

○「那个」の「个」、成化本・朝鮮整版本は「箇」に作る。

〔訳〕

「明德を明らかにす」とはすなわち己自身のための工夫である。いったい何が己の本分に含まれないだろうか、すべて本分の内のことである。明德が人に具わっているのは、外から入ってきてもらうのではない。 襲蓋卿録

〔注〕

(1) 「爲己」と「分内」をめぐる議論に関しては以下を参照。『大学或問』（山崎嘉点本、8b-9a）「曰。治國平天下者、天子諸侯之事也。卿大夫以下、蓋無與焉。今大學之教、乃例以明明德於天下爲言。豈不爲思出其位、犯非其分。而何以得爲爲己之學哉。曰。天之明命、有生之所同得。非有我之得私也。是以君子之心、豁然大公、其視天下、無一物而非吾心之所當愛。無一事而非吾職之所當爲。雖或勢在匹夫之賤、而所以堯舜其君、堯舜其民者、亦未嘗不在其分内也。」

71条

爲學只在明明德一句。君子存之、存此而已。小人去之、去此而已。一念竦然自覺其非、便是明之之端。 儒用

〔校勘〕

○記録者、朝鮮古写本は「儒用。夔孫同。」とする。

〔訳〕

学問はただ「明德を明らかにするに在り」の一句だ。孟子の「君子之を存す」とは、このことをしっかりとおさえているからだ。「小人之を去る」とは、このことから離れるからだ。己の非をひとたび自覚してぞっとすれば、それが明德を明らかにする端緒である。 李儒用 録

〔注〕

(1)「君子存之」「小人去之」「孟子」離婁下「孟子曰、人之所以異於禽獸者幾希。庶民去之、君子存之。舜明於庶物、察於人倫、由仁義行。非行仁義也。」朱熹集注は以下の通り。「幾希、少也。庶、衆也。人物之生、同得天地之理以爲性、同得天地之氣以爲形。其不同者、獨人於其間得形氣之正、而能有以全其性、爲少異耳。雖曰少異、然人物之所以分、實在於此。衆人不知此而去之、則名雖爲人、而實無以異於禽獸。君子知此而存之、是以戰兢惕厲而卒能有以全其所受之理也。」また、同じく『孟子』離婁下「孟子曰、君子所以異於人者、以其存心也。君子以仁存心、以禮存心。」  
(2)「竦然」ぞっとする。用例として、他に卷四、四一条、沈備録（I 88）「某年十五六時、讀中庸人一己百、人十己千一章、因見呂與叔解得此段痛快、讀之未嘗不竦然警厲奮發。人若有向學之志、須是如

此做工夫方得。」卷一一三、一一条、訓廖德明（VII 2740）「因說某人、開廣可喜、甚難得、只是讀書全未有是處。學者須是有業次。竊疑諸公亦未免如此。德明與張顯父在坐、竦然聽教。」などがある。卷四、四一条は三浦國雄『朱子語類抄』（頁三六〇以下）に訳注があり、「竦然」を「身がひきしまり」と訳す。

72条

大學在明明德一句、當常常提撕。能如此、便有進步處。蓋其原自此發見。人只一心爲本。存得此心、於事物方知有脈絡貫通處。 季札

〔校勘〕

○朝鮮古写本、記録者「季札」の下に「明德是指全體之妙下面許多節目皆是靠明德做去」の二十一字有り。この二十一字は本訳注テキストの卷一四、六七条と一致する。

〔訳〕

『大學』の「明德を明らかにするに在り」の一句は、常々心中に呼び覚ましておかなければならない。これができれば、前進するところがある。思うに、工夫の進歩の源はここにあつて、ここから発現するのだ。人は心をこそ本とする。この心を保ち続けてはじめて、事物に於いてすべての理がつながり貫通しているのがわかるのだ。 季季札

録

〔注〕

(1) 「提撕」六八条の注(1)を参照。

(2) 「存得此心」『孟子』盡心上「孟子曰、盡其心者、知其性也。知其性、則知天矣。(心者、人之神明、所以具衆理而應萬事者也。性則心之所具之理、而天又理之所從以出者也。人有是心、莫非全體、然不窮理、則有所蔽而無以盡乎此心之量。故能極其心之全體而無不盡者、必其能窮夫理而無不知者也。既知其理、則其所從出、亦不外是矣。以大學之序言之、知性則物格之謂、盡心則知至之謂也。)存其心、養其性、所以事天也。(存、謂操而不舍。養、謂順而不害。事、則奉承而不違也。)(一)内は朱熹集注。

(3) 「脈絡貫通」ここでは、衆理がつながり貫通していることと解した。以下の例を参照。卷一一、一九条、林賜録(一)〔8〕「讀書閑暇、且靜坐、教他心平氣定、見得道理漸次分曉。季札云、庶幾心平氣和、可以思索義理。這箇却是一身總會處。且如看大學在明明德一句、須常常提醒在這裏。他日長進、亦只在這裏。人只是一箇心做本、須存得在這裏、識得他條理脈絡、自有貫通處。賜。季札録云、問、伊川見人靜坐、如何便歎其善學。曰、這却是一箇總要處。又云、大學在明明德一句、當常常提撕。能如此、便有進步處。蓋其原自此發見。人只一心爲本。存得此心、於事物方知有脈絡貫通處。」卷九八、六三条、程端蒙録(Ⅶ 2518)「大其心、則能遍體天下之物。體、猶仁體事而無不在、言心理流行、脈絡貫通、無有不到。苟一物有未體、則便有不到處。包括不盡、是心爲有外。蓋私意間隔、而物我對立、則雖至親、且未必能無外矣。故有外之心、不足以合天心。」

73条

在明明德、須是自家見得這物事光明燦爛、常在目前、始得。如今都不會見得。須是勇猛著起精神、拔出心肝與它看、始得。正如人跌落大水、浩無津涯、須是勇猛奮起這身、要得出來、始得。而今都只汎汎聽他流將去。

〔校勘〕

○「著起精神」の「著」、成化本・萬曆本・朝鮮古写本・和刻本は「着」に作る。

○「心肝與它看」の「它」、成化本・朝鮮古写本・朝鮮整版本は「他」に作る。

○「汎汎」、朝鮮古写本「汎汎」に作る。

〔訳〕

「明德を明らかにするに在り」とは、必ず自身にこのもの(明德)が光り輝いて見えるようにと、常に思いを致していなければならぬ。(しかし君らは)今まで全く見えていない。是非とも勇猛に精神を奮い起こし、心臓と肝臓を引つ張り出して(人に)看せなくてはならない。ちょうど、人が足を踏み外して大河に落ち、見渡す限り岸辺がない時に、必ず勇猛にこの身を奮い起こして脱出しようとしなければならぬ。そのようなものだ。ところが今(君らは)みなただ流れに任せて漂っているだけだ。 記録者名欠

〔注〕

(1) 「常在目前」 明德が目前に在るとは、常に明德に思いを致すという意。『語類』卷一六、八条、沈僩録「顧諟天之明命、古註云。常在目前之。说得極好。非謂有一物常在目前可見、也只是長存此心、知得有這道理光明不昧。」なお類似の表現として以下を参照。『延平答問』(『朱子遺書』本、12b)「某自聞師友之訓、賴天之靈、時常只在心目間。雖資質不美、世界妨奪處多、此心未嘗敢忘也。」

(2) 「拔出心肝」 『語類』卷八、六〇条、沈僩録(133)「聖賢千言萬語、無非只說此事。須是策勵此心、勇猛奮發、拔出心肝、與他去。如兩邊播起戰鼓、莫問前頭如何、只認捲將去。如此方做得工夫。若半上落下、半沉半浮、濟得甚事。」また、韓愈「送窮文」(『韓昌黎集』卷三六)「其次曰交窮。磨肌斲骨、吐出心肝、企足以待、實我讎冤。」また、『無門関』第七「趙州洗鉢」に「無門曰、趙州開口見胆、露出心肝、者僧聽事不真、喚鐘作甕。」とある。

(3) 「無津涯」 『書經』微子「今殷其淪喪。若涉大水、其無津涯。」

(4) 「汎汎」 水に漂い流れるさま。『詩經』邶風柏舟「汎彼柏舟、亦汎其流。」毛伝に「汎汎、流貌。」

74条

或以明明德譬之磨鏡。曰、鏡猶磨而後明。若人之明德、則未嘗不明。雖其昏蔽之極、而其善端之發、終不可絕。但當於其所發之端、而接續光明之、令其不昧、則其全體大用可以盡明。且如人知己德之不明而欲

明之、只這知其不明而欲明之者、便是明德、就這裏便明將去。 僩

〔校勘〕

○「就這裏便明將去」の「裏」、萬曆本・和刻本は「裡」に作る。

〔訳〕

ある人が「明德を明らかにす」を、鏡を磨くことに喩えた。(先生は)言われた、「鏡は磨いた後に明らかになる。人の明德というものは、明らかでない時はない。(氣稟や物欲に) おおわれて暗くなつた極致であっても、その善の端緒の発現はついに絶えることはない。ただ、その発現する端緒に於いて、それを承けて光り輝かし、昧くなることのないようにすれば、心の本来の完全なる本質とその偉大なる働きとは、ことごとく明らかにすることができる。もし人が己の徳の不明なところを知つてこれを明らかにしようとするならば、この、不明を知つて明らかなものにしようとするもの、それがすなわち明德であり、ここを足場に明らかにしてゆくのだ。」 沈僩録

〔注〕

(1) 「譬之磨鏡」 『語類』卷一七、二八条、郭友仁録(II 377)「友仁説明明德。此明德、乃是人本有之物、只爲氣稟與物欲所蔽而昏。今學問進修、便如磨鏡相似。鏡本明、被塵垢昏之、用磨擦之工、其明始現。及其現也、乃本然之明耳。曰。公說甚善。但此理不比磨鏡之法。先生略擡身、露開兩手、如閃出之狀、曰。忽然閃出這光明來、不待



磨而後現、但人不自察耳。如孺子將入於井、不拘君子小人、皆有怵惕惻隱之心、便可見。友仁云、或問中説、是以雖其昏蔽之極、而介然之頃、一有覺焉、則即此空隙之中而其本體已洞然、便是這箇道理。先生頷之曰。於大原處不差、正好進修。」

(2) 「雖其昏蔽之極」 『大学或問』 「然而本明之體、得之於天、終有不可得而昧者。是以雖其昏蔽之極、而介然之頃、一有覺焉、則即此空隙之中而其本體已洞然矣。」

(3) 「其善端之發」 『中庸章句』 第三章、朱註「蓋人之性無不同、而氣則有異。故惟聖人能舉其性之全體而盡之。其次則必自其善端發見之偏、而悉推致之、以各造其極也。」

(4) 「全體大用」 『大學章句』 伝五章、格物補伝「是以大學始教、必使學者即凡天下之物、莫不因其已知之理而益窮之、以求至乎其極。至於用力之久、而一旦豁然貫通焉、則衆物之表裏精粗無不到、而吾心之全體大用無不明矣。此謂物格。此謂知之至也。」

なお、朱熹は『禮記』 大学篇の「此謂知本、此謂知之至也」を伝五章とし、「格物致知」を釈した部分が散佚したと考えて、彼自身が程頤の説を承けて補った。それが所謂「格物補伝」であり、朱熹の「格物致知」論を最も簡潔に叙述したものとされる。本訳では、島田虔次『大学・中庸』上の「完全な体とその偉大なる用」(中国古典選6、頁八二、伝一章の解説。朝日新聞社、一九七八年)、及び、同氏『朱子学と陽明学』の「吾が心の全体(本来完全なる本質)、大用(偉大なる作用)」(頁一〇四、岩波書店、一九六七年)を参照した。

75条

明明徳、如人自云天之所與我、未嘗昏、只知道不昏、便不昏矣。 僩。

〔校勘〕

○この条、朝鮮古写本では卷一四の七二条目(同本「経上」の二〇条目)に載せる。また、記録者を「夔孫」(林夔孫)とする。

〔訳〕

「明徳を明らかにす」とは、人が「天が我に与えたものは、昏い時などない」と言っているように、ただ昏くないことを知れば、それだけで昏くなくなる。 沈僩録

〔注〕

(1) 「天之所與我」 『孟子』 告子上「公都子問曰、鈞是人也。或爲大人、或爲小人、何也。孟子曰、從其大體爲大人。從其小體爲小人。曰、鈞是人也。或從其大體、或從其小體、何也。曰、耳目之官、不思而蔽於物、物交物則引之而已矣。心之官則思。思則得之、不思則不得也。此天之所與我者、先立乎其大者、則其小者不能奪也。此爲大人而已矣。」朱熹集注は以下の通り。「官之爲言、司也。耳司聽、目司視、各有所職、而不能思。是以蔽於外物。既不能思而蔽於外物、則亦一物而已。又以外物交於此物、其引之而去不難矣。心則能思、而以思爲職。凡事物之來、心得其職、則得其理、而物不能蔽。失其職、則

不得其理、而物來蔽之。此三者、皆天之所以與我者、而心爲大。若能以立之、則事無不思、而耳目之欲不能奪之矣。此所以爲大人也。」

76条

明明德、是明此明德、只見一點明、便於此明去。正如人醉醒、初間少醒、至於大醒、亦只是一醒。學者貫復其初、至於已到地位、則不著个復字。可學

〔校勘〕

○「不著个」の「著」、成化本・萬曆本・朝鮮古写本・朝鮮整版本は「着」に作る。「个」、成化本は「箇」に作る。

〔訳〕

「明德を明らかにす」は、この明德を明らかにすることで、ただ少しでも明らかに見えれば、ただちにそこから明らかにしてゆく。ちょうど人が酔いから醒めるようなもので、初めに少し醒めるのも、大いに醒めてしまうのも、同じ醒めることだ。学ぶ者は「初めに復す」ることを貴ぶが、いったんその境地に至れば（もはや）「復」字を用いない。鄭可學録

〔注〕

(1) 「復其初」『大學章句』經一章の朱註「明德者、人之所得乎天、

而虛靈不昧、以具衆理而應萬事者也。但爲氣稟所拘、人欲所蔽、則有時而昏。然其本體之明、則有未嘗息者。故學者當因其所發而遂明之、以復其初也。」また、『語類』卷八、二七条、鄭可學録（I 133）「某問、明性須以敬爲先。曰、固是。但敬亦不可混淪說、須是每事上檢點。論其大要、只是不放過耳。大抵爲己之學、於他人無一毫干預。聖賢千言萬語、只是使人反其固有而復其性耳。」を参照。

「復初」の觀念は、早く『莊子』繕性「繕性於俗、學以求復其初、滑欲於俗、思以求致其明。謂之蔽蒙之民。」「淮南子」傲真訓「夫世之所以喪性命、有衰漸以然、所由來者久矣。是故聖人之學也、欲以返性於初、而游心於虛也。」及びその高誘注「人受天地之中以生。孟子曰、性無不善、而情欲害之。故聖人能返其性於初也。游心於虛、言無欲也。」等に見える。『孟子』の「復性」的思想は「告子上」に見える。宋学の「復性」思想は直接には唐の李翱「復性書」を襲うと考えられるが、大西晴隆氏はその淵源を『孟子』に求める（『懷徳』第三十八号「復性書について」、一九六七年、懷徳堂堂友会）。宋学では周敦頤の「主靜」、邵雍の「處理性」、張載の「善反之（則天地之性存焉）」など、李翱の「復性」思想の延長上にある。ただし、朱子は、李翱が情を滅すること（妄情滅息）を復性の要件としたのに対して、「李翱復性則是云滅情以復性、則非。情如何可滅。此乃釋氏之說、陷於其中不自知。」（卷五九、二九条、鄭可學録、IV 1381）と批判している。

77条

問明明徳。曰、人皆有明處、但爲物欲所蔽。剔撥去了、只就明處漸明將去。然須致知、格物、方有進步處、識得本來是甚麼物。季札

〔校勘〕

○「問明明徳」、朝鮮古写本は「問」と「明明徳」との間に「大學之道在」の五字有り。

○「有个明處」の「个」、成化本・朝鮮整版本は「箇」に作る。

〔訳〕

「明徳を明らかにす」を問うた。(先生は)おっしゃった。「人には皆、本来具わった明晰な働き(明徳)があるが、ただ物欲に蔽われている。その物欲の蔽いを拭い払い去って、その明らかなるところに即して、いに明らかにしてゆくだだけだ。しかし、致知格物をして始めて進歩するところが、それが本来どのようなものであるかを認識できるのだ。」季季札録

〔注〕

(1)「人皆有明處」二二条の注(2)及び(3)を参照。

(2)「剔撥」えぐりひらく。同時に払い除く意ともなる。以下の用

例を参照。卷一六、三条、葉賀孫録(II 33)「問荀日新、日日新。曰、

這箇道理、未見得時、若無頭無面、如何下工夫。才剔撥得有些通透處、

便須急急躡蹤趨鄉前去。」卷二〇、一四二条、黄幹録(II 28)「問、

謝氏說如何。曰、謝氏此一段如亂絲、須逐一剔撥得言語異同、巧言字如何不同、又須見得有箇總會處。」

(3)「須…方」ぜび…して始めて…だ。三浦國雄「朱子語類抄」頁三七。

78条

明徳未嘗息、時時發見於日用之間。如見非義而羞惡、見孺子入井而惻隱、見尊賢而恭敬、見善事而歎慕、皆明徳之發見也。如此推之、極多。但當因其所發而推廣之。 憫

〔校勘〕

○この条、朝鮮古写本は卷一四の五六条目(「経上」の四条目)に載せる。

〔訳〕

明徳は息む時がなく、いつでも日々の行為のうちに発現する。たとえば義でないことを見て羞惡の情をおこし、赤子の井戸に落ちようとするのを見て惻隱の情をおこし、尊い人すぐれた人を見て恭敬の情をおこし、善いことを見て歎慕の情をおこすのは、すべて明徳の発現である。このようにして推してゆけば、明徳の発現は極めて多端である。この明徳の発現したことがらを手がかりにしてそれを推し拡げな

くてはならない。沈憫録

〔注〕

(1)「日用」『易経』繫辭上「一陰一陽之謂道。繼之者善也。成之者性也。仁者見之謂之仁、知者見之謂之知。百姓日用而不知。故君子之道鮮矣。」

(2)「羞惡」「惻隱」「恭敬」『孟子』告子上「惻隱之心、人皆有之。羞惡之心、人皆有之。恭敬之心、人皆有之。是非之心、人皆有之。惻隱之心、仁也。羞惡之心、義也。恭敬之心、禮也。是非之心、智也。仁義禮智、非由外鑠我也。我固有之也。弗思耳矣。」朱熹集注「言四者之心人所固有、但人自不思而求之耳。」

(3)「見孺子入井」『孟子』公孫丑上「所以謂人皆有不忍人之心者、今人乍見孺子將入於井、皆有怵惕惻隱之心。非所以交於孺子之父母也。非所以要譽於鄉黨朋友也。非惡其聲而然也。」

(4)「推廣之」「推」が「明明徳」における重要な工夫と位置付けられることについては、二一条の注(3)を参照。この七八条は四端を明徳の発現としてその「推拡」の必要を説くが、そもそも、孟子も四端の「拡充」を説いている。公孫丑上「凡有四端於我者、知皆擴而充之矣、若火之始然、泉之始達。苟能充之、足以保四海。苟不充之、不足以事父母。」朱熹の集注は以下の通り。「擴、推廣之意。充、滿也。四端在我、隨處發見。知皆即此推廣、而充滿其本然之量、則其日新又新、將有不能自己者矣。能由此而遂充之、則四海雖遠、亦吾度内、無難保者。不能充之、則雖事之至近而不能矣。此章所論、

人之性情、心之體用、本然全具、而各有條理如此。學者於此、反求默識而擴充之、則天之所以與我者、可以無不盡矣。」

79条

明德、謂得之於己、至明而不昧者也。如父子則有親、君臣則有義、夫婦則有別、長幼則有序、朋友則有信、初未嘗差也。苟或差焉、則其所得者昏、而非固有之明矣。履孫

〔校勘〕

○この条、朝鮮古写本は卷一四の五五条目(「經上」の三条目)に載せる。

〔訳〕

明德は、自分の内に持つていて、至明不昧なものである。たとえば父子の間には「親」があり、君臣間には「義」が、夫婦には「別」が、長幼の間には「序」が、友人間に「信」が成立するのは、はじめから揺らぎようのないことである。かりにここからはずれるとしたら、生得の明德が昏まされたのであって、明德本来の明らかさではない。

潘履孫録

〔注〕

(1)「明德、謂得之於己」卷一七、五二条、葉賀孫録(II 386)「問、

引成性存存、道義出矣、何如。曰、自天之所命、謂之明命、我這裏得之於己、謂之明德、只是一箇道理。人只要存得這些在這裏。才存得在這裏、則事君必會忠。事親必會孝。見孺子、則怵惕之心便發。見穿窬之類、則羞惡之心便發。合恭敬處、便自然會恭敬。合辭遜處、便自然會辭遜。須要常存得此心、則便見得此性發出底都是道理。若不存得這些、待做出、那箇會合道理。」

「徳」を「得」と解するのは、『礼記』樂記の「徳者、得也。」、『論語』爲政「爲政以德」の皇侃疏「徳者、得也。」などに見られる。ちなみに、朱熹は爲政篇「爲政以德」の集注に「徳之爲言、得也。得於心而不失也。」、また『語類』卷二三、七条、林子蒙録(II 534)に「此全在徳字。徳字従心者、以其得之於心也。」、さらに述而篇「子曰、志於道、據於徳、依於仁、游於藝。」について『語類』卷三四、五四条、周謨録(III 88)に「徳者、得也。既得之、則當據守而弗失。」と言う。徳は天から己(心)に得るものである。『語類』中の同様の例をあげておく。卷七四、四三条、襲蓋卿録(V 1883)「蕭兄問、徳、業。曰、徳者、得也、得之於心謂之徳。」卷六、一七条、程端蒙録(I 101)「至徳、至道。道者、人之所共由。徳者、己之所獨得。」同一八条、一九条、甘節録(I 101)「存之於中謂理、得之於心爲徳、發見於行事爲百行。」「徳是得於天者、講學而得之、得自家本分底物事。」など。

(2) 「父子則有親、君臣則有義、夫婦則有別、長幼則有序、朋友則有信」  
『孟子』滕文公上「后稷教民稼穡、樹藝五穀。五穀熟而民人育。人之有道也、飽食煖衣、逸居而無教、則近於禽獸。聖人有憂之、使

契爲司徒、教以人倫、父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信。」

80条

人本來皆具此明德、徳内便有此仁義禮智四者。只被外物汨沒了不明、便都壞了。所以大學之道、必先明此明德。若能學、則能知覺此明德、常自存得、便去刮剔、不爲物欲所蔽。推而事父孝、事君忠、推而齊家、治國、平天下、皆只此理。大學一書、若理會得這一句、便可迎刃而解。

椿

〔校勘〕

○朝鮮古写本はこの条を欠く。

〔訳〕

人は本来皆この「明德」を具えている。その徳のうちには仁・義・礼・智の四つのもが入っている。ただ、外物に沈められてしまつて不明であれば、この四つはすべてだいなしだ。だから『大学』の道は、必ず先ずこの明德を明らかにする。これを学ぶことができれば、この明德を知覚することができる。これを常に己の内に保つことができれば、(常に明德を) えぐり出して、物欲に蔽われることはない。これを推し抜けて父に仕えては孝、主君に仕えては忠、推し抜けて家をととのえ、国を治め、天下を平安にする、すべてただこの道理である。『大学』

の一書は、この一句をとらえれば、楽に読み進めることができる。  
魏椿録

〔注〕

(1)「汨沒」(水中に)沈む。【語類】の用例として卷一一、四条、葉賀孫録(I 176)を挙げる。「初學於敬不能無間斷、只是才覺間斷、便提起此心。只是覺處、便是接續。某要得人只就讀書上體認義理。日間常讀書、則此心不走作。或只去事物中滾、則此心易得汨沒。知得如此、便就讀書上體認義理、便可喚轉來。」

(2)「壞了」だめだ。つぶれてしまふ。【語類】の用例として、卷一一、九〇条(I 236)、同一四〇条(I 243)(ともに葉賀孫録)を挙げておく。「要做好事底心是實、要做不好事底心是虛。被那虛底在裏夾雜、便將實底一齊打壞了。」「義理人心之所同然、人去講求却易爲力。舉業乃分外事、倒是難做。可惜舉業壞了多少人。」

(3)「刮剔」けずりえぐる。【語類】での用例は本条のみ。既出の「剔撥」(卷一四、七七条)や、卷一四、一一五条、湯泳録(I 271)「明德、是我得之於天、而方寸中光明底物事。統而言之、仁義禮智。以其發見而言之、如惻隱、羞惡之類。以其見於實用言之、如事親、從兄是也。如此等德、本不待自家明之。但從來爲氣稟所拘、物欲所蔽、一向昏昧、更不光明。而今却在挑剔揩磨出來、以復向來得之於天者、此便是明明德。」(三浦國雄【朱子語類抄】頁一七八以下に訳注有り)の「挑剔」など同意。

(4)「事父孝、事君忠」【大学】伝九章「孝者所以事君也。弟者所以

事長也。慈者所以使衆也。」また、【孝經】感応章「子曰、昔者明王、事父孝、故事天明。事母孝、故事地察。長幼順、故上下治。天地明察、神明彰矣。」同、廣揚名章「子曰、君子之事親孝、故忠可移於君。事兄悌、故順可移於長。居家理、故治可移於官。是以行成於内、而名立於後世矣。」

(5)「迎刃而解」いとも容易に事が進むこと。【莊子】養生主「庖丁爲文惠君解牛。手之所觸、肩之所倚、足之所履、膝之所踣、砉然響然、奏刀騞然、莫不中音、合於桑林之舞、乃中經首之會。」【晋書】卷三四、杜預伝「今兵威已振、譬如破竹、數節之後、皆迎刃而解、無復著手處也。」

81条

明德、也且就切近易見處理會、也且慢慢自見得。如何一日便都要識得。如出必是告、反必是面、昏定晨省。必是昏定晨省、這易見。徐行後長者謂之弟、疾行先長者謂之不弟、這也易見、有甚不分明。如九族既睦、是堯一家之明德。百姓昭明、是堯一國之明德。黎民於變時雍、是堯天下之明德。如博弈好飲酒、不顧父母之養、是不孝。到能昏定晨省、冬溫夏清、可以爲孝。然而從父之令、今看孔子說、却是不孝。須是知父之命當從、也有不可從處。蓋與其得罪於鄉黨州閭、甯熟諫。論父母於道、方是孝。 賀孫

〔校勘〕

○朝鮮古写本はこの条を「経上」の六条目（卷一四の五八条目）に載せる。

○朝鮮古写本は「必是昏定晨省」以下を小字注とする。

○「也有不可從處」、朝鮮古写本は「也」と「有」との間に「須知」の二字有り。

○「甯」、成化本・萬曆本・朝鮮古写本・朝鮮整版本は「寧」に作る。

〔訳〕

明德は、卑近で分かり易いことに即して取り組む。とりあえずゆくりとやれば自然にとらえられる。どうして一日でその全てをとらえられようか。たとえば『礼記』にあるように「出づるには必ず是れ告げ、反りては必ず是れ面す」「昏には定にし晨には省る」のであるが、必ず晩に親の寢床を安らかにし、朝早く親の安否を問うというのは、見やすい道理。「徐行して長者に後るるを之れ弟と謂ひ、疾行して長者に先んずるを之れ不弟と謂ふ」というのも、これも見やすい道理で、何も不明なところはない。（『書経』に言う）「九族既に睦む」は、堯一家の明德、「百姓昭明す」は、堯の治める一国の明德、「黎民於變じ時れ雍ぐ」は、堯の天下の明德である。（『孟子』にある）「博弈して飲酒を好み、父母の養を顧みず」は、不孝。（『礼記』の）親のために晩には寢床を安らかにし、朝早く安否を問い、冬には暖かく、夏には涼しく過ごせるよう気を配るといふのは、孝と言える。しかし「父の令に従ふ」のは、『孝経』諫争章の）孔子の説を見るとかえって「不孝」

である。父の命には従うべきであるが、従ってはならない場合もあることを知るべきである。恐らくは（『礼記』内則の）「其の罪を郷黨州閭に得るよりは、諫むるに甯熟ぞ」ということであろう。（『礼記』祭儀の曾参の）「父母を道に諭す」はまさに孝である。葉賀孫録

〔注〕

（1）「切近」身近かな、卑近な。『易经』剥「六四。剝床以膚、凶。象曰、剝床以膚。切近災也。」

（2）「出必是告、反必是面」外出時には必ず親に行き先を告げ、帰ってきたら必ず親に顔を見せて親の安否を確かめまた親に安心していただく。『禮記』曲禮上「夫爲人子者、出必告、反必面。」による。

（3）「昏定晨省」「冬温夏清」親に仕えて、晩には寢床を安らかにし、朝早く安否を問う。冬には暖かく過ごせるよう、夏には涼しく過ごせるよう気を配る。『禮記』曲禮上「凡爲人士之禮、冬温而夏清、昏定晨省。」

（4）「徐行後長者謂之弟、疾行先長者謂之不弟」ゆつくりと年長者の後について歩くことを「弟（悌）」といい、さっさと年長者の先を歩いてゆくのを「不弟（不悌）」という。『孟子』告子下「徐行後長者謂之弟、疾行先長者謂之不弟。夫徐行者、豈人所不能哉。所不爲也。堯舜之道、孝弟而已矣。」

（5）「九族既睦」「百姓昭明」「黎民於變時雍」「書経」堯典「克明俊德、以親九族。九族既睦、平章百姓。百姓昭明、協和萬邦。黎民於變時雍。」朱子は語句の意味の断定を避けながらも、堯が明德を明らかにして

いることによつて、九族、民へと道徳的な教化が及び、よく治まつたことを言つと解しているようである。「語類」卷七八、六六条、廖德明録（V 1989）「克明俊徳、是明明徳之意。」同上、七一条、輔廣録（V 1980）「九族、且從古注。克明德、是再提起堯徳來説。百姓、或以爲民、或以爲百官族姓、亦不可考、姑存二説可也。」同上、七三条、輔廣録（V 1990）「平章百姓、只是近處百姓。黎民、則合天下之民言之矣。」同上、七五条、黄勝録（V 1991）「百姓昭明、百姓只是畿内之民。昭明、只是與它分別善惡、辨是與非。以上下文言之、即齊家、治國、平天下之事。」

(6) 「博弈好飲酒、不顧父母之養」『孟子』離婁下「孟子曰、世俗所謂不孝者五。惰其四支、不顧父母之養、一不孝也。博弈好飲酒、不顧父母之養、二不孝也。好貨財、私妻子、不顧父母之養、三不孝也。從耳目之欲、以爲父母戮、四不孝也。好勇鬥狠、以危父母、五不孝也。章子有一於是乎。」

(7) 「從父之令、今看孔子説、却是不孝」『孝經』諫諍章「曾子曰、若夫慈愛恭敬安親揚名、則聞命矣。敢問、子從父之令、可謂孝乎。子曰、是何言與、是何言與。…父有爭子、則身不陷於不義。故當不義、則子不可以不爭於父、臣不可以不爭於君。故當不義、則爭之。從父之令、又焉得爲孝乎。」

(8) 「與其得罪於鄉黨州閭、甯孰諫」村里で罪人となるより親を諫めることを選ぶ。「禮記」内則「父母有過、下氣怡色、柔聲以諫。諫若不入、起敬起孝。説則復諫。不説、與其得罪於鄉黨州閭、甯孰諫。」（鄭玄注…子從父之令、不可謂孝也。）「また、『論語』里仁「子曰、

事父母幾諫。見志不從、又敬不違、勞而不怨。」朱熹集注「此章與内則之言相表裏。幾、微也。微諫、所謂父母有過、下氣怡色、柔聲以諫也。見志不從、又敬不違。所謂諫若不入、起敬起孝。悅則復諫也。勞而不怨、所謂與其得罪於鄉黨州閭、甯孰諫。父母怒不悅、而撻之流血、不敢疾怨、起敬起孝也。」また、『禮記』曲禮下「爲人臣之禮、不顯諫。三諫而不聽、則逃之。子之事親也、三諫而不聽、則號泣而隨之。」

(9) 「論父母於道」『禮記』祭義「曾子曰、孝有三。大孝尊親、其次弗辱、其下能養。公明儀問於曾子曰、夫子可以爲孝乎。曾子曰、是何言與、是何言與。君子之所爲孝者、先意承志、論父母於道。參直養者也。安能爲孝乎。」

82条

會興宗問。如何是明明徳。曰。明明徳是自家心中具許多道理在這裏。本是个明底物事、初無暗昧、人得之則爲徳。如惻隱、羞惡、辭讓、是非、是從自家心裏出來、觸著那物、便是那箇物出來、何嘗不明。縁爲物欲所蔽、故其明易昏。如鏡本明、被外物點汙、則不明了。少間磨起、則其明又能照物。

又云。人心惟定則明。所謂定者、非是定於這裏、全不修習、待他自明。惟是定後、却好去學。看來看去、久後自然徹。

又有人問。自覺胸中甚昧。曰。這明徳亦不甚昧。如適來說惻隱、羞惡、辭遜、是非等、此是心中元有此等物。發而爲惻隱、這便是仁。發而爲



羞惡、這便是義。發而為辭遜、是非、便是禮、智。看來這個亦不是甚味。但恐於義理差互處有似是而非者、未能分別耳。

且如冬温夏清為孝、人能冬温夏清、這便是孝。至如子從父之令、本似孝、孔子却以為不孝。與其得罪於鄉閭、不若且諫父之過、使不陷於不義、這處方是孝。恐似此處、未能大故分別得出、方味。

且如齊宣王見牛之殺觶、便有不忍之心、欲以羊易之。這便見惻隱處、只是見不完全。及到興甲兵、危士臣處、便欲快意為之。是見不精確、不能推愛牛之心而愛百姓。只是心中所見所好如此、且恁地做去。又如胡侍郎讀史管見、其為文字與所見處甚好、到他自做處全相反。不知是如何、却似是兩人做事一般、前日所見是一人、今日所行又是一人。是見不真確、致得如此。卓

〔校勘〕

- 「自家心中具許多道理」朝鮮古写本は「具」を「與」に作る。
- 「本是个明底物事」朝鮮古写本は「个」を「我」に作る。
- 「如惻隱羞惡辭讓是非」朝鮮古写本は「如羞惡是非辭遜惻隱」に作る。成化本・朝鮮整版本は「辭讓」を「辭遜」に作る。なお諸本が「辭讓」を「辭遜」に作るのは、英宗の実父趙允讓（諡安懿、封濮王、所謂「濮議」で著名、『宋史』卷二四五「濮安懿王允讓」の諱を避けた結果であると思われる。『史諱舉例』卷八、宋諱例「英宗父濮安懿王允讓」「讓改為遜、或為避。」
- 「是從自家心裏出來」成化本・朝鮮古写本・朝鮮整版本は「是」を「皆」に作る。今、訳もこれに従う。

○「便是那箇物出來」朝鮮古写本は「是」を「有」に作る。

○「磨起」朝鮮古写本は「磨起了」に作る。

○「又有人問」朝鮮古写本は「又有人問明德章句」に作る。

○「如適來說惻隱羞惡辭遜是非等」朝鮮古写本は「如說羞惡是非惻隱辭遜」に作る。

○「本似孝」朝鮮古写本にはこの下に「亦有子而不從父之令者而」の文字有り。

○「孔子却以為不孝」朝鮮古写本は「孔子」を「孔子之意」に作る。

○「與其得罪於鄉閭」朝鮮古写本はこの上に「然」字有り。

○「這處方是孝」朝鮮古写本は「方」を「便」に作る。

○「及到興甲兵」朝鮮古写本は「到」を「到着」に作る。

○「心中所見所好如此」朝鮮古写本は「好」を「有」に作る。

○「到他自做處」朝鮮古写本は「到着他日做處」に作る。

○「今日所行又是一人」朝鮮古写本は「今日所見又是一人了」に作る。

○「是見不真確」朝鮮古写本は「也是見不精確」に作る

〔訳〕

曾興宗がお尋ねした。「明德を明らかにするとはどのようなことでしょうか。」先生「明德とは何かと言えば、自己の心中には多くの理がしっかりと具わっている。元来それは澄明なるものであって、全く暗昧な部分はない。人がそれを得れば、それがその人に具わった徳となるのだ。たとえば惻隱・羞惡・辭讓・是非の心（＝四端）にしても、そのいずれもが自己の心のうちから発現してくるのであって、外物が

四端のうちのどれかを触発すると、そのどれかが発現してくるのだ。そこには何の暗昧さもないのだ。ただ物欲によつて蔽われると、その為には明徳の澄明さが容易に眩まされることになる。ちょうど、鏡は元来澄明だが、外物によつて汚されると、その澄明さを失つてしまう、というのと同じだ。しばらく磨いてやれば、取り戻した澄明さによつて再び物を映し出すことができるようになるのだ。」

また言われた。「人の心はただ定まりさえすれば、澄明になる。(しかしながら)所謂定とは、この心が定まりさえすれば、あとは全く修為工夫を用いるまでもなく、心が自ずと澄明さを發揮するのを頼みとすればよい、というようなものではない。心が定まった後には、やはりしつかりと為学に取り組むべきなのだ。そのようにして繰り返し取り組んでいけば、久しい後には自ずと(道理に)透徹し得るのである。」

またある者がお尋ねした。「自分の胸中が極めて蒙昧であるのを感じます。」先生「この明徳は、そんなに蒙昧なものではないのだ。さつきも言ったように、惻隱・羞惡・辭遜・是非等は、心の中にもともとそういう物が具わっているのだ。発現して惻隱となるのが、仁であり、発現して羞惡となるのが義であり、発現して辭遜・是非となるのが、礼・智である。思うにこれらはそんな蒙昧な代物ではないのだ。(にもかわからず明徳の澄明さを失つてしまうのは)ただ、義理に背馳しているながら、似て非なるもの(非でありながら是と紛らわしいもの)と、この有るもので、そういうものに対してきちんと弁別ができていないからだ。」

たとえば、冬には親を温かく夏には親を涼しく、というのは孝であ

る。冬には親を温かく夏には親を涼しくしてあげることができれば、それは孝に他ならない。子が父の命令に従うというのも、元来は孝に似ているようだが、しかし孔子はそれを不孝とした。郷里で父に罪を犯させるよりは、むしろ(未然に)父親の過ちを諫め、不義に陥らぬようにさせることの方が大切なのであって、それでこそ孝なのだ。こういった所を大いに弁別することができないと、蒙昧になつてしまうのだ。

たとえば齊の宣王は牛がおどおどと怯えている様子を見て、それを見るに忍びないという同情心を抱き、牛を羊に取り替えようとした。これは確かに、宣王の惻隱の心を看取すべき所ではある。ただこの場合の宣王の見識はやはり不十分なものだ。戦を興して兵士や庶民を危険に陥れるようなことを喜んで行おうとするようでは、その見識は精緻ではなく、牛を惜しむ気持ちを民百姓を惜しむ気持ちへと推し及ぼすことができなかったのだ。宣王はただ心に思うところ好むところがそのようであったので、このような行動に及んでしまったのだ。ちょうど胡侍郎の『読史管見』のようなものであって、その文章や見解は非常に優れているのだが、彼自身の振る舞いはと言えば、全くそれに相反するものなのだ。一体どうしたわけなのか、まるで別々の二人の人間の振る舞いのようにあって、前日に(優れた)見識を示したのは一人の人間、今日(愚かしい)振る舞いに及んだのはまた別の一人の人間、という具合だ。それもこれも、見識が真真正正なものではなかったために、そんな結果を招いてしまったのだ。 黄卓録

〔注〕

(1) 「曾興宗」『考亭淵源錄』卷一八「曾興宗字光祖、贛州寧都人。

…興宗年十六七時、已厭科舉之習、一意於聖賢爲己之學。…不遠千里、

受業朱子之門、堅守其說。…及僞學禁興、學者諱名其師。興宗執禮

益勤、勵志益苦、未嘗少懈。』陳榮捷『朱子門人』二三八頁。

(2) 「人得之則爲德」 「德」を同音の「得」によつて解釈するのは常

訓である。劉熙『釈名』「釈言語」第二二「德、得也。得事宜也。』「論

語」 「爲政」第二「爲政以德」皇侃義疏「德者得也。』朱子集注「德

之爲言、得也。得於心而不失也。』なお七九条、注(1)参照。

(3) 「惻隱、羞惡、辭讓、是非」 『孟子』 「公孫丑」上。七八条、注(2)に既出。

(4) 「觸著那物」 『語類』卷五三、四四條、林賜録(IV 128) 「四端皆

是自人心發出。…惻隱元在這心裏面、被外面事觸起。羞惡・辭遜・

是非亦然。』 『語類』卷五三、四八條、呂燾録(IV 128) 「問。喜怒哀

樂未發已發之別。曰。未發時無形影可見、但於已發時照見。謂如見

孺子入井、而有怵惕惻隱之心、便照見得有仁在裏面。見穿窬之類、

而有羞惡之心、便照見得有義在裏面。…惟是先有這物事在裏面、但

隨所感觸、便自是發出來。故見孺子入井、便有惻隱之心。見穿窬之類、

便有羞惡之心。見尊長之屬、便有恭敬之心。見得是、便有是之心、

見得非、便有非之心。』

(5) 「點汗」 「點」も「汗」もともに汚すの意。三國志『三國志』卷

六五、吳書「韋曜」「皓(孫皓)更怪其書之垢、故又以詰曜。曜對曰。

囚撰此書、實欲表上、懼有誤謬、數數省讀、不覺點汚。』 『顏氏家訓』

「治家」第五「借人典籍、皆須愛護。先有缺壞、就爲補治。…或有狼籍几案、分散部帙、多爲童幼婢妾之所點汙、風雨蟲鼠之所毀傷、實爲累德。』

(6) 「定則明」 『河南程氏文集』卷二(明道先生文)「答橫渠張子厚

先生書」 「承教、論以定性未能不動、猶累於外物。…所謂定者、動

亦定、靜亦定、無將迎、無内外。…與其非外而是内、不若内外之兩

忘也。兩忘則澄然無事矣。無事則定、定則明、明則尚何應物之爲累哉。』

『語類』卷七三、五〇條、林學履録(V 185) 「問。良之象、何以為

光明。曰。定則明。凡人胸次煩擾、則愈見昏昧。中有定止、則自然

光明。』 『語類』卷九五、一〇二條、程端蒙録(VI 245) 「動亦定、靜

亦定、則應物之際、自然不累於物。』 「大学章句」經「知止而后有定、

朱注に「止者、所當止之地、即至善之所在也。知之、則志有定向。」

と有るように、「定」とは志がしっかりと定まっていること。志が

定まれば外物に煩わされることもない。『語類』卷九五、一〇四條、

陳淳録(VI 245) 「問。聖人定處未詳。曰。知止而後有定、只看此

一句、便了得萬物各有當止之所。…當應而應、便是定。若不當應而應、

便是亂了。當應而不應、則又是死了。』

(7) 「冬温夏清」 『礼記』 「曲礼」上。八一条に既出。

(8) 「子從父之令、孔子却以為不孝」 「不陷於不義」 『孝經』 「諫諍章」

八一条に既出。

(9) 「與其得罪於鄉閭、不若且諫父之過」 『礼記』 「内則」。八一条に

既出。

(10) 「大故」 大いに。『語類』卷九、四九條、林夔孫録(I 156) 「張

子云。義理有疑、則濯去舊見、以來新意。人多是被那舊見戀不肯舍。除是大故聰明、見得不是、便翻了。」

(11)「齊宣王見牛之殺觶」『孟子』「梁惠王」上「臣聞之胡斨曰。王坐於堂上、有牽牛而過堂下者。王見之曰。牛何之。對曰。將以鬻鐘。王曰。舍之。吾不忍其觶觶、若無罪而就死地。對曰。然則廢釁鐘與。曰。何可廢也。以羊易之。」朱注「觶觶、恐懼貌。」

(12)「這便見惻隱處」『孟子』「梁惠王」上、朱注「王見牛之觶觶而不忍殺、即所謂惻隱之心仁之端也。擴而充之、則可以保四海矣。」

(13)「興甲兵」『孟子』「梁惠王」上「抑王興甲兵、危士臣、構怨於諸侯、然後快於心與。王曰。否。吾何快於是。將以求吾所大欲也。曰。然則王之所大欲、可知已。欲辟土地、朝秦楚、莅中國而撫四夷也。」

(14)「胡侍郎讀史管見」胡寅(字明仲、号致堂、一〇九八—一一五六)は『宋史』卷四三五「儒林伝」に立伝されている。かつて礼部侍郎を拜命したため(紹興八年四月癸酉、「建炎以來繫年要録」卷一一九)胡侍郎と称されている。『語類』において朱子は「讀史管見」に対しておおむね肯定的に評価している。『語類』卷一〇一、一九一条、黄魯録(Ⅶ 101)「又曰。明仲嘗長五峰議論精確、五峰亦嘗不有其兄、嘗欲焚其論語解并讀史管見。以今觀之、殊不然。如論語、管見中雖有粗處、亦多明白。至五峰議論、反以好高之過。」『語類』卷一三四、三九条、記録者名欠(Ⅶ 390)「致堂管見、方是議論。唐鑑議論弱、又有不相應處。前面說一項事、末又說別處去。」また胡寅の為人に対しても、本条におけるような厳しい批判は見受けら

れない。『語類』卷一〇一、一四〇条、萬人傑録(Ⅶ 288)「胡致堂議論英發、人物偉然。」『宋史』によれば、胡寅は生母の死に際して服喪しなかつたため、弾劾を受けたことがあった。朱子による批判は或いはこの辺りに起因するか(待考)。『宋史』卷四三五「寅字明仲、安國弟之子也。寅將生、弟婦以多男欲不舉、安國妻夢大魚躍盆水中、急往取而子之。右正言章復劾寅不持本生母服不孝。」『齊東野語』卷六「胡明仲本末」の条参照。

## 83条

或問。明明德、是於靜中本心發見、學者因其發見處從而窮究之否。曰。不特是靜、雖動中亦發見。孟子將孺子將入井處來明這道理。蓋赤子入井、人所共見、能於此發端處推明、便是明。蓋人心至靈、有什麼事不知、有什麼事不曉、有什麼道理不具在這裏。何緣有不明。為是氣稟之偏、又為物欲所亂。如目之於色、耳之於聲、口之於味、鼻之於臭、四肢之於安佚、所以不明。然而其德本是至明物事、終是遮不得、必有時發見。便教至惡之人、亦時乎有善念之發。學者便當因其明處下工夫、一向明將去。致知・格物、皆是事也。且如今人做得一件事不是、有時都不知、便是昏處。然有時知得不是、這箇便是明處。孟子發明赤子入井。蓋赤子入井出於倉猝、人都主張不得、見之者莫不有怵惕惻隱之心。

又曰。人心莫不有知、所以不知者、但氣稟有偏、故知之有不能盡。所謂致知者、只是教他展開使盡。

又曰。看大學、先將經文看教貫通。如看或問、須全段相參酌、看教

他貫通、如看了隻手、將起便有五指頭、始得。今看或問、只逐些子看、都不貫通、如何得。 子蒙

〔校勘〕

○朝鮮古写本卷一四は本条を未収録。

〔訳〕

ある者がお尋ねした「明德を明らかにするとは、心が静謐な時にはその本心が発現するものだから、学ぶ者はその発現した場を抛り所として、それを究めていけ、ということでしょうか。」先生「単に静謐な時だけではない。心が活動している際にも、やはり本心は発現するのだ。孟子は幼児が井戸に落つこちる場面を例に取り上げて、この道理を明らかにした。思うに、赤ん坊が井戸に落つこちそうだとするのは、誰もが同じように目撃するわけだが、その際に発現した（惻隱の心という）端緒を推し拡げて明らかにすることができるなら、それが（明德を）明らかにするということなのだ。思うに人の心とは至って靈妙なるものなのであって、どんな事柄をも知り得るし、どんな事柄にも通曉し得るし、どんな道理をもその内面に具有しているのだ。ではその明德が、一体何によってその明るさを失うのか。それは稟受した氣質に偏りが有るからであり、また物欲によって乱されるからでもある。（物欲とは）例えば目が色を求め、耳が声を求め、口が味を求め、鼻が臭を求め、四肢が安佚を求めるといふ類であつて、こうして明德がその明るさを失うのだ。しかしながらその徳は元来、極めて澄明な

るものなのであって、結局はその澄明さを遮ることはできず、時として必ずや発現するのだ。たとえ極悪の人であっても、善念が起る時というのには有るものなのだ。学ぶ者はその澄明なるところを抛り所として実践工夫に取り組むべきであつて、ひたすらにそれを明らかにしていくのだ。致知も格物もみな、こういう営みに他ならない。たとえば今、人が何事かを行つてそれが正しくなかつたとする。それが正しくないことに全く気づかない時もあり、それは明德が眩まされた場合だ。しかしまた正しくないことに気づく時だつてあるのであつて、これこそが徳が明らかの場合だ。孟子は赤ん坊が井戸に落つこちる場合を明らかにした。思うに赤ん坊が井戸に落つこちるといふのはとつさの場合であつて、人は誰もが已むに已まれず、これを見る者は驚き傷む気持ちを抱かずにはいられないのである。」

又言われた。「人の心はどんな事柄をも知り得るものなのであつて、知り得ないとすればそれは、稟受した氣質に偏りがあつて、だから十分に知り尽くせないのだ。所謂致知とは、その知を延べ拡げ、（知る働きを）尽くさせることに他ならない。」

又言われた。「『大学』を読む場合には、まずは経文だけを、その趣旨が全体を貫通するするまで読んでみることだ。『大学或問』を読む場合も、是非その全段を彼此参照しながら、その全体を貫通させることだ。たとえば片方の手を見た途端に、もう五本の指全部が見えていくようにないことだ。今『大学或問』を読むのに、ただ少しずつ逐条的に読んでいって全体が貫通しないようでは、全然だめだ。」林子蒙録

〔注〕

(1) 「孺子將入井」 『孟子』「公孫丑」上。七八条に既出。

(2) 「氣稟」「物欲」 『大学章句』經、朱注「明德者、人之所得乎天、而虛靈不昧、以具衆理而應萬事者也。但為氣稟所拘、人欲所蔽、則有時而昏。」

(3) 「目之於色」 『孟子』「盡心」下「孟子曰。口之於味也、目之於色也、耳之於聲也、鼻之於臭也、四肢之於安佚也、性也。有命焉、君子不謂性也。」

(4) 「便教」 たとえ。たとえでも。『語類』卷二五、一四條、林夔孫錄(II 305)「人而不仁、如禮何。而今莫說八佾・雍徹、是無如禮樂何。便教季氏用四佾以祭、也無如禮樂何、緣是它不仁了。」

(5) 「主張」 主宰する、支配する、制御する。『莊子』外篇「天運」「天其運乎、地其處乎、日月其爭於所乎。孰主張是、孰維綱是。」「語類』卷二〇、四條、吳雉錄(II 446)「蓋人只有箇心、天下之理皆聚於此。此是主張自家一身者。若心不在、那裏得理來。」ここでの「主張不得」は、自己の真情の發露を制御することができない、惻隱の情が已むに已まれずに發露する、という方向で解釈した。

(6) 「展開」 延べ拡げる。「致知」の「致」を朱子は「推極」と訓詁しているが(『大学章句』)、ここでの「展開」は「推極」とほぼ同義である。『語類』卷一八、七九條、楊道夫錄(II 300)「問由中而外、自近而遠。曰。某之意、只是說欲致其知者、須先存得此心。此心既存、却看這箇道理是如何。又推之於身、又推之於物、只管一層展開一層、又見得許多道理。」

(7) 「先將經文看教貫通」 まず經文だけを読め、という教えは四〇条や四三条にも見える。

(8) 「今看或問」云々 『大学或問』は注釈の注釈であつて、必ずしも拘泥して読む必要はない、そんなことをすれば無用の疑念を生ずるものである、という趣旨が四七〜四九條に述べられている。

(9) 「如何得」 現代語の「怎么行」に同じ。四三条、注(5)に既出。

84条

或問。明明徳云云。曰。不消如此說、他那注得自分曉了。只要你實去體察、行之於身。須是真个明得這明德是怎生地明、是如何了得它虛靈不昧。須是真个不昧、具得衆理、應得萬事。只恁地說、不濟得事。

又曰。如格物・致知・誠意・正心・修身五者、皆明明徳事。格物・致知、便是要知得分明。誠意・正心・修身、便是要行得分明。若是格物・致知有所未盡、便是知得這明德未分明。意未盡誠、便是這徳有所未明。心有不正、則徳有所未明。身有不修、則徳有所未明。須是意不可有頃刻之不誠、心不可有頃刻之不正、身不可有頃刻之不修、這明德方常明。

問。所謂明德工夫、也只在讀書上。曰。固是在讀書上。然亦不專是讀書、事上也耍理會。書之所載者、固要逐件理會。也有書所不載、而事上合當理會者。也有古所未有底事、而今之所有。當理會者極多端。 箇 齋録別出

〔校勘〕

○「齋録別出」 朝鮮古写本にはこの校記がない。

〔訳〕

ある者が「明德を明らかにするとは、云々ということですね。」とお尋ねした。先生「そんな風に説くものではない。そんなことは、その注釈（『大学章句』当該箇所の朱注）で既に解説済みだ。肝心なのは君が实地にそれを体察し、我が身に実践することなんだ。この明德とは、一体どうして澄明なのか、それは一体いかにしてその虚霊不昧なるあり方を実現し得ているのか、ということ、是非とも真に明らかにせねばならぬ。そして是非とも本当に、この明德を不昧ならしめ、衆理を具備し、萬事に応じねばならぬ。（そのような実践を差し置いて）ただそんな風に説くだけでは、何の役にも立たんのだ。」

また言われた。「格物・致知・誠意・正心・修身の五者は、全て明德に属する事柄である。格物・致知とは、（明德について）明確に知ることを要するものであり、誠意・正心・修身とは、（明明徳について）明確に行うことを要するものである。もしも格物・致知に十分な点が有れば、この明德についても十分明確には知り得ない。もしも誠意に不十分な点が有れば、この徳についても明らかにし得ない部分が残る。もしも心が正されなければ、この徳についても明らかにし得ない部分が残る。もしも心が正されなければ、この徳についても明らかにし得ない部分が残る。是非とも一刻たりとも意が誠でない時はなく、一刻たりとも心が正しくない時はなく、一刻たりとも心が修

まらない時はないようにして、それでこそこの明德は常に明らかとなるのだ。」

質問「徳を明らかにする工夫も、やはりただ読書に即して行うべきものでしょうか。」先生「もちろん読書に即しても行うべきである。しかしながら読書だけがそうだというわけではない。何か事柄を行うような場合にも、やはりその事柄に即して取り組むべきだ。書物に書かれている教えについては、もちろん逐一それに取り組むべきだ。けれども、書物には書かれていなくて、何かの事柄に即して取り組むべきものだって有る。また古には存在しなかった事柄で、今は存在するものだって有る。要するに、当然取り組むべき事柄というのは、多岐にわたって存在するのだ。 沈憫録。 呂齋録は別に掲載する。

〔注〕

(1) 「不消」 する必要がある。七条、三八条に既出。

(2) 「真个」 真実に、本当に、確かに。『語類』巻五、六七条、廖謙録（108）「如學天下説生薑辣、待我喫得真箇辣、方敢信。」『語類』

巻六、一〇八条、李閔祖録（112）「欲真箇見得仁底模樣、須是從克己復禮做工夫去。今人説仁、如糖。皆道是甜、不會喫着、不知甜是甚滋味。」

(3) 「怎生」「怎麼生」とも表記し、現代中国語の「怎麼樣」に同じ。「如何」と同義で「どうして」「どのようにして」の意。

(4) 「虚霊不昧」云々『大学章句』経、朱注「明德者、人之所得乎天、而虚霊不昧、以具衆理而應萬事者也。」

(5) 「恁地」「如此」に同じ。一八条に既出。

(6) 「不濟得事」「不濟事」の形で語類に類出し「だめだ」「役に立たない」の意。三七条に既出。

(7) 「五者、皆明明德事」「大学」八条目のうち「格物」乃至「修身」の五者は三綱領の「明明德」に相当し、「齊家」乃至「平天下」の三者は三綱領の「新民」に相当する。『大学章句』経、朱注「脩身以上、明明德之事也。齊家以下、新民之事也。」

(8) 「要知得分明」「要行得分明」「格物」「致知」を「知」に、「誠意」「正心」「修身」を「行」に配当した議論。因みに知行の先後問題に關して朱子学は基本的に「知先行後」の立場を採る。『語類』卷九、四条、程端蒙録（I 148）「致知・力行、用功不可偏。偏過一邊、則一邊受病。…但只要分先後輕重。論先後、當以致知為先。論輕重、當以力行為重。」「語類」卷九、三五条、林夔孫録、末尾小注引黃義剛録（I 153）「若是不致知・格物、便要誠意・正心・修身、氣質純底、將來只便成一箇無見識底獸人。」本条における八条目と知行の配当の議論に拠るならば、朱子学の「知先行後」説は『大学』八条目の説く為学の階梯にも根拠づけられている、ということができらう。

(9) 「事上也要理會」「無事」が「心事」「遇事」「臨事」等と対拏されることから明らかなように、「事」とは人と対応したり事柄に対処したり、といった事態を指す。『語類』卷一二、四九条、萬人傑録（I 204）、卷一二、七〇条、童伯羽録（I 206）、卷一八、一三条、陳淳録（II 393）。以下の用例を参照。『語類』卷一七、三八条、葉賀

孫録（II 383）「心無事時、都不見。到得應事接物、便在這裏、應事了、又不見。恁地神出鬼沒。」卷二、七九条、徐寓録（II 488）「居常無事、則學文講義。至事與吾接、則又出而應之。」

(10) 「多端」 讀書以外にも取り組むべき事柄は多様である、という主張については以下の例も参照。『河南程氏遺書』卷一八、二七条「凡一物上有一理、須是窮致其理。窮理亦多端。或讀書、講明義理、或論古今人物、別其是非、或應事接物而處其當、皆窮理也。」

(11) 「燾録別出」 次条。

85条

問。或謂虛靈不昧、是精靈底物事、具衆理、是精靈中有許多條理、應萬事、是那條理發見出來底。曰。不消如此解說。但要識得這明德是甚物事、便切身做工夫、去其氣稟物欲之蔽。能存得自家個虛靈不昧之心、足以具衆理、可以應萬事、便是明得自家明德了。若只是解說虛靈不昧是如何、具衆理是如何、應萬事又是如何、却濟得甚事。

又問。明之功、莫須讀書為要否。曰。固是要讀書。然書上有底、便可就書理會、若書上無底、便著就事上理會。若古時無底、便著就而今理會。

蓋所謂明德者、只是一個光明底物事。如人與我一把火、將此火照物、則無不燭。自家若滅息著、便是暗了明德、能吹得著時、又是明其明德。所謂明之者、致知、格物、誠意、正心、修身、皆明之事、五者不可闕一。若闕一、則德有所不明。



蓋致知、格物、是要知得分明、誠意、正心、修身、是要行得分明。然既明其明德、又要功夫無間斷、使無時而不明、方得。若知有一之不盡、物有一之未窮、意有頃刻之不誠、心有頃刻之不正、身有頃刻之不修、則明德又暗了。惟知無不盡、物無不格、意無不誠、心無不正、身無不修、即是盡明明德之功夫也。 熹

〔校勘〕

○「個」 萬曆本、和刻本は「个」に作り、成化本・朝鮮整版本は「箇」に作る。

○「著」 成化本、萬曆本、和刻本は「着」に作る。

○「則明德又暗了」 和刻本は「又」を「人」に作る。

○「修」 成化本、和刻本は「脩」に作る。

○朝鮮古写本卷一四は本条を未収録。

〔訳〕

質問「ある人は言います。『虚靈不昧』は靈妙なるものであり、『衆理を具ふ』は靈妙(なるもの)の中にたくさん(の)の條理があることであり、『萬事に應ず』はその條理が外にあらわれ出て来たものである。』先生「そのように言葉だけで分析し解釈する必要はない。ただこの明德はどのようなものか知らなければならず、それから切実に努力をして、その氣稟と物欲の蔽いを取り除く。自らのこの『虚靈不昧』の心を存すれば、充分に『衆理を具ふ』るし、『萬事に應ず』ることができる、これが即ち、自らの明德を明らかにすることができたことである。も

しただ『虚靈不昧』とは何か、『衆理を具ふ』とは何か、『萬事に應ず』とは何かを解釈するだけならば、何の役に立つのか。」

またお尋ねしました。「『これを明らかにす』の努力は、読書が肝要だとすべきですね。」先生「もちろん読書しなければならぬ。しかし、書物に記されているのであれば、それに従って取り組むことができるが、もし書物に記していなければ、(具体的な)事にあたって取り組む。昔に(例が)なければ、今の(その事)にあたって取り組むのだ。」

思うにいわゆる明德とは、ただ一つの光り輝くものである。例えば人が一つ松明を私にくれたとして、その松明で物を照らすならば、(物が)照らされてはつきり見える。私はその火を消せば、明德を暗くした(ような)ものであるが、息を吹きかけてその火をとますことができれば、再び明德を明らかにした(ような)ものである。いわゆる『これを明らかにす』とは、致知・格物・誠意・正心・修身、みな『これを明らかにす』ることであり、この五者は一つも欠けることができな、ということである。もし一つでも欠ければ、徳は明らかだとは言えない。

思うに致知、格物は明確に知らなければならないことであり、誠意、正心、修身は明確に行わなければならないことである。だが、その明德を既に明らかにしても、また間斷なく努力しなければならず、明らかでない時はない、というようであつてこそよいのだ。もし、『知』に一つでも尽くしていない所があれば、『物』に一つでも窮めていない所があれば、『意』に一刻でも誠でない時があれば、『心』に一刻でも正しくない時があれば、『身』に一刻でも修めない時があれば、明

徳は再び暗くなってしまうのだ。「知」は尽くしていない所がなく、「物」は格つていない所がなく、「意」は誠でない時がなく、「心」は正しくない時がなく、「身」は修めていない時がなければ、これこそ即ち、明德を明らかにする努力を尽くしたことになる。」 呂熹録

〔注〕

(1) 「虚靈不昧、…、具衆理、…、應萬事、…」 『大学章句』経「大學之道、在明明徳、在新民、在止於至善。」朱注「大學者、大人之學也。明、明之也。明德者、人之所得乎天、而虚靈不昧、以具衆理而應萬事者也。」「虚靈」は即ち「心之本體」である。『語類』卷五、三八条、萬人傑録（I 87）「虚靈自是心之本體、非我所能虚也。耳目之視聽、所以視聽者即其心也、豈有形象。然有耳目以視聽之、則猶有形象也。若心之虚靈、何嘗有物。」「虚靈」の「虚」については、『語類』卷九八、四三条、周謨録（VII 2514）「凡物有心而其中必虚、如飲食中雞心猪心之屬、切開可見。人心亦然。只這虚處、便包藏許多道理、彌綸天地、該括古今。推廣得來、蓋天蓋地、莫不由此、此所以為人心之妙歟。」とある。

(2) 「精靈底物事」「魂」とする場合がある。『朱文公文集』卷五九「答楊子順」第三書「魂氣之説、近之。但便謂魂為知、則又未可。大抵氣中自有箇精靈底物、即所謂魂耳。」「魂」は「神」ともされる。『語類』卷六三、一三三條、周謨録（IV 1548）「如氣之呼吸者有魂、魂即神也。」「神」については、『語類』卷六三、一三三條、葉賀孫録（IV 1548）「言神、只言其妙而不可測識。」とあり、「精靈」とは「靈妙」

の意であろう。

(3) 「發見」「外に現れ出たもの」の意。三浦國雄『朱子語類抄』一八一頁を参照。

(4) 「不消如此解說」「不消」は「しる必要がない」の意。七条、三八条、前条に既出。「解説」は二七条に既出。これ自体は必ずしも否定的な概念ではないが、しばしば、実践を遊離した、言葉の上だけの解釈、能書きといった否定的なニュアンスで用いられることがある。『語類』卷一一、一〇五条、黄升脚録（I 211）「問敬。曰。不用解説、只整齐嚴肅便是。」「語類」卷一七、六条、呂熹録（II 321）「次日、又曰。夜來說敬、不須只管解説、但整齐嚴肅便是敬。」

(5) 「甚物事」「甚麼物事」または「甚麼模樣」に同じ。「どのようなものか」の意。『語類』卷三四、一二条、葉賀孫録（III 857）「或問此章。曰、須實見得是如何。徳是甚麼物事、如何喚做修。」「語類」卷六、一〇八条、李閔祖録（I 117）「惟仁、然後與天地萬物為一體。要在二者之間識得畢竟仁是甚麼様、欲曉得仁名義、須并義禮智三字看。」「三浦國雄『朱子語類抄』に「甚麼様」は「甚麼模樣」とも書く。類似の表現（甚麼様）は五三ページに見えたが、この場合は「どのようなものか」の意」とある（四〇六頁）。

(6) 「切身」身に切なること、切実であること。『語類』卷六七、五六条、葉賀孫録（V 1659）「曰、學詩乎、學禮乎、詩是吟詠情性、感發人之善心、禮使人知得箇定分、這都是切身工夫。」「親切」はその類義語である。『語類』卷二六、二三條、沈憫録（II 646）「曰、仁是最切身底道理。志於仁、大段是親切做工夫底、所以必無惡。」「朱

子語類」訳注 卷十、十一（汲古書院）頁二五八には「親切」は、  
びつたりすること」とある。

(7) 「濟得甚事」「濟事」の反語表現。『朱子語類』訳注卷十、  
十一（汲古書院）頁二五に「不濟事」は口語で、「役に立たない」「も  
のにならない」の意味。…『語類』での用例は、すべて否定形ま  
たは反語で用いられる」とある。また、前条の注(6)を参照。

(8) 「功」「功夫」と同義。本条に「然既明其明德、又要功夫無間斷」  
とある。「功夫」については、四四条の注(1)を参照。

(9) 「莫く否」「く莫きや」と読む。「莫はく否」とも書く。三浦國  
雄『朱子語類抄』一三九頁を参照。

(10) 「須く為要」くを肝要としなければならぬ。『語類』卷  
一〇一、七六条、録者不明(VII 288)「龜山與范濟美言、學者須當以  
求仁為要。」

(11) 「便著」「便」に同じ。『語類』卷二四、一五九条、葉賀孫録(II  
811)「問。見義不為無勇、莫是連上句意否。曰。不須連上句。自說  
凡事見得是義、便著做、不獨說祭祀也。」など。

(12) 「是要知得分明」「是要行得分明」前条の注(8)を参照、  
(13) 「方得」現代語の「才行」に同じ。「くしてこそよい」の意。

86条

問。大學注言、其體虛靈而不昧、其用鑒照而不遺。此二句是說心、  
說德。曰。心、德皆在其中、更子細看。又問。德是心中之理否。曰。

便是心中許多道理、光明鑒照、毫髮不差。 寓 按注是舊本

〔校勘〕

○「毫髮不差」成化本は「毫」を「豪」に作る。

○「按注是舊本」朝鮮古写本にはない。

〔訳〕

質問(明德についての)『大學』注に「其の體は虚靈にして昧ならず、  
其の用は鑒照して遺さず」とあります。この二句は心について述べら  
れたものですか、徳について述べられたものですか。先生「心と徳  
がともにその中にある。もつとよく考えるのだ。またお尋ねしました。  
「徳は心の中の理ですか。」先生「そりゃあ心の中のたくさんの道理で  
あり、光り輝いて照らし、ほんの少しの差もたがうことがないのだ。」  
徐寓録。按ずるに(『大學注』の)注は旧本である。

〔注〕

(1) 「子細看」「嚴密に読む」「悉に研究する」または「よく考える」  
の意。『語類』卷四、六五条、林夔孫録(Ⅰ)「又問、橫渠論氣質  
之性、却分曉。明道生之謂性一章、却難曉。曰、它中間性有兩三說、  
須子細看。」『語類』卷一九、三二条、陳淳録(II 288)「人有言、理  
會得論語、便是孔子、理會得七篇、便是孟子。子細看、亦是如此。」  
三浦國雄『朱子語類抄』では、「ある人が『論語』がわかれば孔子  
だし、『孟子』七篇がわかれば孟子だ、と云ったが、よく考えれば

やはりその通りだ」と訳す(二〇三〜二〇四頁)。

(2)「便是」よく「たとえ」でも」の意として用いられるが(三浦國雄『朱子語類抄』一四六頁)、ここでは「是」に同じ。『語類』卷一四、六五條、録者不明(一260)「或問、明德便是仁義禮智之性否。曰、便是。」など。

(3)「鑒照」「照らす」の意。『語類』卷四五、五條、潘時舉録(Ⅲ 1149)「問、子貢一貫章。曰、一以貫之、固是以心鑒照萬物而不遺。然也須多學而識之始得、未有不學而自能一貫者也。」

(4)「毫髮不差」ほんのわずかな差もない。『語類』卷九四、一〇六條、徐寓録(VI 2386)「周子太極之書如易六十四卦、一一有定理、毫髮不差。自首至尾、只不出陰陽二端而已。」など。

(5)「按注是舊本」この案語によれば、朱子の『大学』注の「舊本」は、恐らく『朱子語類』の編者である黎靖徳も見ていないであろう。

87条

明德者、人之所得乎天、而虚靈不昧、以具衆理而應萬事者也。禪家則但以虚靈不昧者為性、而無以具衆理以下之事。 個

〔訳〕

「明德とは、人の天に得る所にして、虚靈不昧、以て衆理を具へて萬事に應ずる者なり。」禪家と言えはただ「虚靈不昧」を性とするのみで、「以て衆理を具ふ」以下の事柄は滅ぼし尽くした。 沈憫録

〔注〕

(1)「明德者、…、以具衆理而應萬事者也」「大学章句」經の朱注である。八五條の注(1)を参照。

(2)「事」八四條の注(9)を参照。

(3)「禪家」仏教の三門の一つ。『語類』卷八、九一條、葉賀孫録(Ⅰ 141)「佛家有三门、曰教、曰律、曰禪。禪家不立文字、只直截要識心見性。」禪家は「義理」さえも滅ぼし尽くしたとされる。『語類』卷一二六、二二條、林學蒙録(Ⅷ 3014)「或問佛與莊老不同處。曰、

莊老絶滅義理未盡。至佛則人倫滅盡、至禪則義理滅盡。」

88条

問。學者當因其所發而遂明之、是如何。曰。人固有理會得處、如孝於親、友於弟、如水之必寒、火之必熱、不可謂他不知。但須去致極其知、因那理會得底、推之於理會不得底、自淺以至深、自近以至遠。又曰。因其已知之理而益窮之、以求至乎其極。 廣

〔校勘〕

○朝鮮古写本卷一四は本条を未収録。

〔訳〕

質問「『學ぶ者は當に其の發する所に因りて遂に之を明らかにすべし』は、どう理解すればよいでしょうか」先生「人にはもとよりよく

心得ているものがあり、例えば親に孝であり、兄弟に友であるとか、たとえ水は必ず冷たく、火は必ず熱いとか、(このようなことは)まさか人が知らないことはあり得ない。ただその『知』を究極まできわめていかなければならず、そのよく心得ているものに基づいて、それをよく分かっているものに押し広めて、浅い所から深い所に至り、近い所から遠い所に至るようにせよ。」またおっしゃった。「その既に知っている『理』に基づきながら更にそれを窮めて、その究極に至るように追求せよ。」 輔廣録

〔注〕

(1)「學者當因其所發而遂明之」『大学章句』經「大學之道、在明明德、在新民、在止於至善。」朱注「大學者、大人之學也。明、明之也。明德者、人之所得乎天、而虛靈不昧、以具衆理而應萬事者也。但為氣稟所拘、人欲所蔽、則有時而昏、然其本體之明、則有未嘗息者。故學者當因其所發而遂明之、以復其初也。」

(2)「理會得處」 「よくわかったところ」の意。『語類』卷一〇、八二条、林夔孫録 (I 172)「讀書只要將理會得處、反覆又看。」『語類』卷一四、一三二条、黃士毅録 (I 274)「問、大學之靜與伊川『靜中有動』之『靜』、同否。曰、未須如此說。如此等處、未到那裏、不要理會。少頃都打亂了、和理會得處、也理會不得去。」など。

(3)「孝於親、友於弟」『論語』為政第二「或謂孔子曰、子奚不為政。子曰、書云孝乎惟孝、友于兄弟、施於有政、是亦為政、奚其為為政。」朱注「書周書君陳篇。書云孝乎者、言書之言孝如此也。善兄弟曰友。」

書言君陳能孝於親、友於兄弟、又能推廣此心、以為一家之政。」

(4)「水之必寒、火之必熱」『白虎通』五行「五行之性、火熱水寒、有溫水無寒火何。明臣可以為君、君不可更為臣。」

(5)「自淺以至深、自近以至遠」『朱文公文集』卷九〇「曹立之墓表」 「由淺而深、由近而遠。」

(6)「因其已知之理而益窮之、以求至乎其極」『大学章句』伝第五章「是以大學始教、必使學者即凡天下之物、莫不因其已知之理而益窮之、以求至乎其極。」

89条

問。大學之道、在明明德。此明德、莫是天生德於予之德。曰。莫如此問、只理會明德是我身上甚麼物事。某若理會不得、便應公是天生德於予之德、公便兩下都理會不得。且只就身上理會、莫又引一句來問。如此、只是紙上去討。又曰。此明德是天之予我者、莫令汗穢、當常常有以明之。 驥

〔校勘〕

○「問大學之道」朝鮮古写本は「驥問大學之道」に作る。

○「驥」朝鮮古写本は「道夫」に作る。

〔訳〕

質問「『大学』に『大学の道は、明德を明らかにするに在り』とあ

ります。この明德は、『論語』にいう「天、徳を予れに生ぜり」の徳ではないでしょうか。先生「そのように問うのではなく、ただ明德は自らの身にあつてはどのようなものを理解するのだ。（そのことを）私がかもし心得ないままに、君に「天、徳を予れに生ぜり」の徳だよと答えたら、君は『大学』の明德と『論語』の徳、この二両方とも理解できないだろう。まずひたすら身において体得するのであつて、その上さらに一句を引用して問うようなことをしてはいけない。（二句を引いて議論するという）このようなことは、ただ机上の空論に過ぎない。」またおっしゃった。「この明德は天の我に与えたものであり、汚れさせることなく、いつもこれを明らかにしておくべきである。」楊驥録

〔注〕

- (1) 「大學之道、在明明徳」 『大学章句』経「大學之道、在明明徳、在新民、在止於至善。」
- (2) 「天生徳於予」 『論語』述而第七「子曰、天生徳於予、桓魋其知予何。」
- (3) 「莫是々」「莫是々否」に同じ。「々莫きや」と読む。八五条の注(9)を参照。
- (4) 「甚麽物事」「どうようなものか」の意。八五条の注(4)を参照。
- (5) 「驥」 楊驥。字は子昂、『宋元学案』では「字は子節」とする。浦城の人。楊道夫の族兄。『宋元学案』巻六九、など。楊驥の字については、『朱子門人』(前掲)に「子節誤」とある(二七五頁)。

90条

問。明明徳意思、以平且驗之、亦見得於天者未嘗不明。曰。不要如此看。且就明德上說、如何又引別意思證。讀書最不要如此。賀孫遂就明德上推說。曰、須是更仔細將心體驗。不然、皆是閑說。賀孫

〔校勘〕

- 「問明明徳意思」 成化本、朝鮮整版本は「問明德意思」に作る。
- 朝鮮整版本考異「明德。明上一有明」朝鮮古写本は「賀孫問明德意思」に作る。
- 「仔細」 萬曆本は「仔」を「子」に作る。

〔訳〕

質問「『大学』に言う『明德を明らかにす』の意味は、夜明けがた(の心の、物と接する前に僅かに現れた良心)をもつてそれを実証しても、『天より得たる者』(としての明德)がその明るさを失っていない、ということが分かりますが。」先生はおっしゃった。「そのように考えてはいけない。まず明德そのものについて説くべきであつて、どうしてまた違う意味(の語)を引いて実証しようとするのか。読書においてはこれが一番いけないのだ。」私がそこで明德そのものについて押し広げて述べると、先生はおっしゃった。「もっと注意深く心で繰り返し思ひはかるべきだ。さもなければ、すべて無駄な話だ。」葉賀孫録

〔注〕

- (1) 「平旦」「夜明けがた」の意であるが、宋学では「平旦之氣」を指す場合がある。『孟子』告子章句上「孟子曰、…雖存乎人者、豈無仁義之心哉。其所以放其良心者、亦猶斧斤之於木也、且旦而伐之、可以為美乎。其日夜之所息、平旦之氣、其好惡與人相近也者幾希、則其旦晝之所為、有梏亡之矣。梏之反覆、則其夜氣不足以存、夜氣不足以存、則其違禽獸不遠矣。」朱注「好、惡、並去聲。良心者、本然之善心、即所謂仁義之心也。平旦之氣、謂未與物接之時、清明之氣也。好惡與人相近、言得人心之所同然也。幾希、不多也。梏、械也。反覆、展轉也。言人之良心雖已放失、然其日夜之間、亦必有所生長。故平旦未與物接、其氣清明之際、良心猶必有發見者。但其發見至微、而且晝所為之不善、又已隨而梏亡之」『語類』卷五九、六九条、葉賀孫錄(IV 1393)「平旦之氣、只是夜間息得許多時節、不與事物接、才醒來便有得這些自然清明之氣、此心自恁地虛靜。少間才與物接、依舊又汨沒了。只管汨沒多、雖夜間休息、是氣亦不復存。所以有終身昏沉、展轉流蕩、危而不復者。」など。
- (2) 「得於天者」『語類』卷六、一九条、甘節錄(I 101)「德是得於天者、講學而得之、得自家本分底物事。」
- (3) 「別意思」「異なる意味」の意。『語類』卷四二、八五条、呂燾錄(III 1091)「某向來未曉聞達二字。因見鄉中有人、其傳揚說好者甚衆、以至傳揚於外、莫不皆然。及細觀其所為、皆不誠實。以此方見得聖人分達與聞之別意思、如此段形容得達與聞極精。」
- (4) 「體驗」「體認」に同じ。主に「もう一度思い尋ねる」「繰り返

し思いはかる」の意として用いられる。『語類』卷一一九、三八条、訓黃士毅(VII 2879)「講論自是講論、須是將來自體驗。說一段過又一段、何補。某向來從師、一日說話、晚頭如溫書一般、須子細看過。有疑、則明日又問。問、士毅尋常讀書、須要將說心處將自體之以心、言處事處推之以事、隨分量分曉、方放過、莫得體驗之意否。曰、亦是。又曰、體驗是自心裏暗自講量一次。廣錄云、或問、先生謂講論固不可無、須是自去體認。如何是體認。曰、體認是把那聽得底、自去心裏重複思繹過。」

91条

傳敬子說明明德。曰。大綱也是如此。只是說得恁地孤單、也不得。且去子細看。聖人說這三句、也且大概恁地說、到下面方說平天下至格物八者、便是明德新底工夫。就此八者理會得透徹、明德新民都在這裏。而今且去子細看、都未要把自家言語意思去攙他底。公說胸中有箇分曉底、少間捉摸不著、私意便從這裏生、便去穿鑿。而今且去熟看那解、看得細字分曉了、便曉得大字、便與道理相近。道理在那無字處自然見得。而今且說格物這箇事理、當初甚處得來、如今如何安頓它。逐一只是虛心去看萬物之理、看日用常行之理、看聖賢所言之理。 變

〔校勘〕

○「箇」 萬曆本は「个」に作る。

○「著」 成化本、萬曆本、朝鮮古写本は「着」に作る。

○「便與道理相近」朝鮮古写本は「便與道理相近了」に作る。

○「而今且說格物這箇事理」萬曆本、朝鮮古写本は「理」を「物」に作る。朝鮮整版本考異「事理、理一作物」

○「夔」成化本、朝鮮古写本、朝鮮整版本は「夔孫」に作る。訳ではこれによって改める。

〔訳〕

傳敬子が「明德を明らかにす」について話しますと、先生はおっしゃった。「大筋はそのようである。ただそのように他との關係を無視して説いてはいけない。ひとまず細かく読むのだ。聖人がこの『大學』の「明德を明らかにするに在り、民を新たにするに在り、至善に止まるに在り」の三句を言ったのも、まあ大筋でこのように言ったものであり、その後によく『平天下』から『格物』までの八条目を言うのであって、それが、即ち「明德」「新民」の実践である。この八条目をすっかり理解すれば、『明德』も『新民』もともにこの中にある。いまはまず細かく読んでいき、少しも自分の言葉や考えをそれに混ぜてはいけない。君は、胸中に明確に理解できたところがあると言うが、少しの間でもその明確なところをしっかりと把握していかなかったならば、そのところから私意が芽生え、あれこれ穿鑿するようになってしまふのだ。いまはまずその注解を熟読し、注釈の部分をすっかり分かれば、その本文の部分も分かり、すると道理と相近いのだ。（最終的には）道理は注釈にも本文にも頼ることなく自然に分かるようになる。いままあ『格物』というこの事理について述べよう、

最初はどこから得たのか、いまそれをどのように位置付ければよいのか。（『格物』とは）一つ一つひたすら心を虚しくして万物の理を探究し、日常生活活動の理を発見し、聖人や賢人の言う理を理解していくことだ。」林夔孫録

〔注〕

（1）「傳敬子」傳定、字は敬子、浙江省義烏県の人。『朱子門人』（前掲）二三〇頁。

（2）「大綱」「大筋」「大要」の意。また、『大學』の「在明明徳、在止於至善」を「大綱」とする場合もある。『語類』卷一九、四七条、陳淳録（II 266）「先生問、論語如何看。淳曰、見得聖人言行、極天理之實而無一毫之妄。學者之用工、尤當極其實而不容有一毫之妄。曰、大綱也是如此。然就裏面詳細處、須要十分透徹、無一不盡。」「語類」卷一五、一四六条、周明作録（I 308）「大學在明明徳、在新民、在止於至善、此三箇是大綱、做工夫全在此三句内。」（3）「恁地」「如此」に同じ。一八条、八四条に既出。

（4）「孤單」「孤立無援」「単独で孤立している」の意。転じて、広がりや欠き視野や見識が狭いことを意味する語とも理解できる。『語類』卷五二、七一条、竇從周録（IV 1245）「孟子養氣一章、大綱は説箇仰不愧於天、俯不忤於人。上面從北宮黜孟施舍說將來、只是箇不怕。但二子不怕得粗、孟子不怕得細。或問、合而有助、助字之訓如何。曰、道義是虛底物、本自孤單、得這氣帖起來、便自張主皆去聲、無所不達。如今人非不為善、亦有合於道義者。若無此氣、便只是一箇衰底人。」「語



類」卷一〇五、二九条、楊道夫録（Ⅶ 2629）「近思録首卷難看。某所以與伯恭商量、教他做數語以載於後、正謂此也。若只讀此、則道理孤單、如頓兵堅城之下、却不如語、孟只是平鋪説去、可以游心。」（「頓兵堅城」は、『後漢書』卷一九「耿弇」または『三國志』卷九「曹仁」に見える。中華書局標点本、『後漢書』の七一〇頁と『三國志』の二七五頁を参照。）『語類』卷一一七、四四條、訓陳淳（Ⅶ 2822）「曰、聖賢教人、多説下學事、少説上達事。説下學工夫要多也好、但只理會下學、又局促了。須事事理會過、將來也要知箇貫通處。不要理會下學、只理會上達、即都無事可做、恐孤單枯燥。」また、『朱子語類』訳注 卷十「十一」（汲古書院）には本条を引用して「孤單」は、獨りぼっちであること」とある（二七七頁）。

(5) 「也且」 八一条に既出。

(6) 「工夫」 実践、修行、努力などの意。四四條の注(1)を参照。

(7) 「理會得透徹」 奥義まですっかり理解すること。『語類』卷一八、七〇条、輔廣録（Ⅱ 406）「致知一章、此是大學最初下手處。

若理會得透徹、後面便容易。』『語類』卷三三、六九條、潘植録（Ⅲ 866）「問、己欲立而立人、己欲達而達人、立、達二字、以事推之如何。

曰、二者皆兼内外而言。且如修德、欲德有所成立、做一件事、亦欲成立。如讀書、要理會得透徹、做事、亦要做得行。』「透徹」は、四條、三三條に既出。

(8) 「分曉」 はっきりしていること、明らかであること。

(9) 「少間捉摸不著」 「少間」は「おっつけ、しばらくして」の意。四八條に既出。「捉摸不著」は、「見定めることができない」「しっ

かり把握することができない」の意。『語類』卷三六、九〇条、廖徳明録（Ⅲ 866）「問、此是聖人思不勉、從容自中之地。顔子鑽仰瞻忽、既竭其才、歎不能到。曰、顔子鑽仰瞻忽、初是捉摸不著。夫子不就此啓發顔子、只博之以文、約之以禮、令有用功處。顔子做這工夫、漸見得分曉、至於欲罷不能、已是住不得。」

(10) 「細字」「小字」に同じ。經書などの本文（「大字」「正文」「本文」）に対する注釈を指す。『語類』卷一九、七六條、記録者名欠（Ⅱ 400）

「又曰。凡看文字、端坐熟讀、久久於正文邊自有細字注脚迸出來、方是自家見得親切。若只於外面捉摸箇影子説、終不濟事。』『語類』

卷一〇七、八條、葉賀孫録（Ⅶ 2603）「某告之云。某所説底、都是大字印在那裏底、却不是注脚細字。」

(11) 「事理」「事物之理」に同じ。『語類』卷一七、三四條、葉賀孫録（Ⅱ 380）「問、能知所止、則方寸之間、事事物物皆有定理矣。曰、定、靜、安三項若相似、説出來煞不同。有定、是就事理上説、言知得到時、見事物上各各有箇合當底道理。」

(12) 「當初甚處得來、如今如何安頓它」「安頓」は、「ちゃんと置く」または「落ち着かせる」の意。『語類』卷四、四三條、程端蒙録（Ⅰ 86）「性只是理。然無那天氣地質、則此理沒安頓處。但得氣之清明則不蔽錮、此理順發出來。」ここでの「如何安頓」は、「ある道理が全体の理体系において如何に位置する（作用する）のか」の意とも理解できる。『語類』卷五九、一一三條、葉賀孫録（Ⅳ 1403）「操則存、舍則亡、程子以為操之之道、惟在敬以直内而已。如今做工夫、却只是這一事最緊要。這主一無適底道理、却是一箇大底、其他道理總包

在裏面。其他理已具、所謂窮理、亦止是自此推之、不是從外面去尋討。

一似有箇大底物事、包得百來箇小底物事、既存得這大底、其他小底只是逐一為他點過、看他如何模樣、如何安頓。如今做工夫、只是這箇最緊要。「甚處得來」は、「どこから得たのか」の意であるが、

右文の「如何模樣、如何安頓」を受けてここでは「甚麼得來」または「甚底模樣」とも理解できる。「語類」卷二四、七九条、記録者名

欠(Ⅱ 585)「如人學射、雖習得弓箭裏許多模樣、若不會思量這箇是合如何、也不得。既思得許多模樣是合如何、却不曾置得一張弓、一

隻箭、向埃邊去射、也如何得。」【語類】卷二十、九五条、呂齋録(Ⅶ

2909)「且要識認得這身心性情之德是甚底模樣、說未有區別、亦如何得。雖是未發時無所分別、然亦不可不有所分別。蓋仁自有一箇仁

底模樣物事在內、義自有箇義底模樣物事在內、禮智皆然。今要就發處認得在裏面物事是甚模樣。」

(13)「日用常行」日常の生活や人と付き合い物事に接すること。【語類】卷八、八九条、廖謙録(Ⅰ 140)「聖賢言語如何、將已來聽命於他、切已思量體察、就日用常行中着衣喫飯、事親從兄、盡是問學。」

【朱子語類】卷一四(1~91条)、訳注担当者

「はしがき」「凡例」

1~23条

24~35条

36~38条

中 純 夫

中 純 夫

石 立 善

宇佐美文理

39~54条 孫 路 易  
55~68条 田 中 秀 樹  
69~81条 小 笠 智 章  
82~84条 中 純 夫  
85~91条 孫 路 易  
(二〇〇九年九月三〇日受理)

(うさみ ぶんり 京都大学大学院文学研究科准教授)

(おがさ ともあき 京都大学高等教育研究開発機構非常勤講師)

(せき りつせん 京都女子大学非常勤講師)

(そん るい 岡山大学外国語教育センター非常勤講師)

(たなか ひでき 京都女子大学非常勤講師)

(なか すみお 京都府立大学文学部歴史学科教授)